

「愛の法則」



VU

Vicent Guillem

ヴィセント ギリェム

「愛の法則」
—魂の法則 II—

Vicent Guillem
ヴィセント ギリエム

題名： 「愛の法則」 (副題： 魂の法則 II)
スペイン語原題： “LA LEY DEL AMOR” (LAS LEYES ESPIRITUALES II)
著者： Vicent Guillem Primo ヴィセント ギリエム・プリモ
邦訳： 小坂 真理

知的財産権登録番号 V-289-12 (Valencia, España)
Copyright © 2012 Vicent Guillem Primo
Japanese Translation : Mari Kosaka

ホームページ： <http://lasleyespirituales.blogspot.com.es>
日本語サイト： <http://tamashiihousoku.blogspot.com.es>
メールアドレス： tamashiihousoku@gmail.com



「愛の法則」 by [Vicent Guillem](#) is licensed under a [Creative Commons Reconocimiento-No Comercial-Sin Obra Derivada 3.0 Unported License](#).

Creado a partir de la obra en <http://lasleyespirituales.blogspot.com.es>

本書に修正を加えず営利目的にしない条件で、現在利用可能なすべての媒体によって、本書全体またはその一部の複製を許可するものとする。

目次

はじめに	4 項
プロローグ	5 項
「愛の法則」	13 項
愛の法則から見たパートナーとの関係	20 項
愛の法則から見たカップルにおける不実	51 項
パートナーとの関係におけるエゴ的感情	54 項
愛の法則から見た子どもとの関係	68 項
愛の法則から見た隣人愛	77 項
愛の法則から見た十戒	94 項
イエスの地上での使命 —その 2—	139 項
おわりに	153 項
著者のあとがき	161 項

はじめに

親愛なる読者の皆さん

この本を手に入れている皆さんなら、きっと前作の『魂の法則』を読んでくださったことだろう。だから、僕が皆さんを兄弟と呼びたい気持ちでいるのも、わかってもらえることと思う。

前作では冒頭で、『魂の法則』が全世界の人びとに贈る愛のメッセージであると述べたが、これから読むことになる本書はその続編にあたるので、やはり愛のメッセージであることに変わりはない。ただここでは、魂の諸法則の中でも最も重要だと言える「愛の法則」を、もっとずっと掘り下げて見てみたい。

この第二編においても引き続き、僕らが信頼を寄せるイザヤに、人生の意味や感情などについてまだ疑問が残っていることを質問していく。これから見ていく質問の多くは、メールで僕のところに届けられたり、講演会やプライベートな場で投げかけられた皆さん自身の疑問でもある。それらの中から、ここで取り扱う「愛」のテーマに沿った内容で、皆が関心を持ちそうなものを選んでみた。

本書が、自分の感情についての理解を深める一助となることを願う。

そうして、真実の愛の感情と偽物の愛の感情とを見分けることができるようになってほしい。真実の愛の感情だけを育て、愛を装うエゴ的な感情を排除していく役に立てればと思う。なぜなら、それが幸せになれる唯一の方法だからだ。

愛することへの怖れを捨てて、心で感じる通りの人生を生きてほしい。

僕たち一人ひとりが、誰にも侵害されることのない、自由に愛することができる権利を持っているということが、この本を読み終わった後で、はっきりと理解してもらえればとても嬉しく思う。

すべての愛をこめて。

ヴィセント・ギリェム

プロローグ

君は幸せだと言いきれるだろうか？

いや、まだ答えないでほしい。明るく答えられるような質問じゃないし、自分に正直に答えてもらいたいからだ。僕が期待する返事は何だろうと考えながら、うわべを取り繕った回答をする必要はない。

それに、正直になってほしいというのは、僕に対してではない。僕のことは簡単に騙せるだろうし、そうしたとしても何の問題はない。自分を偽らずに本当のことを答えてほしいのは、この問いかけへの答えで、君の人生全体が左右されてしまうからだ。

なぜ、そんなに大事なもののなか、だって？

それは、僕が、すべての人の願いは真に幸せになることだと思っているから。それとも、君は幸せになりたいとは思っていないのだろうか。

でも注意して見てみると、大多数の人が幸福そうには見えない。幸福感が溢れ出ていないからだ。それはなぜだろう？ もしかしたら僕たちは、どうしたら幸せになれるのかを知らないのかもしれない。

一体、幸せになることなどできるのだろうか？ できるとしたら、どうやって？

どうしたら幸福になれるのだろうか？ という問いは誰もが一度はしたことがある筈だ。人は感覚的に、幸せになることは愛を経験することだと思っている。それはカップルの愛という意味だけれど、僕たちは、自分を幸せにしてくれる愛に出会うことを夢見がちだ。

でも中には、そんなことはない、愛が幸せをもたらしてくれることなどない、と反論する人もいると思う。自分はすごく愛したことがあるけれど、その愛によって苦しんだから、と。このような人たちは愛を苦悩と結びつけて考えてしまって、苦しまないで済むために愛さないようになってしまう。

だけど、一体、愛とはなんだろう？ また、苦悩とはどういうものだろうか？ 僕たちは本当に愛というものを理解しているのだろうか？

この本を読みながら、このことについて考える時間はたっぷりあると思うので、これらの疑問を投げかけておいて、話を変えたいと思う。

初めての幽体離脱を経験して霊的世界とコンタクトできた後、抑えがたい郷愁が僕の中で目覚めると同時に、僕は、現実の世界への興味を失ってしまった。世の中と人生とに対する僕の視点がものすごく変わってしまったのだ。以前はわからなかったが、初めて体外に出る経験をした後では、この世界というものが、その中で生まれてから死ぬまで同じ役を演じ続けられる、一種の劇場のように思えてきた。人はあまりにも長いこと同じ作品ばかりを繰り返しているのだから、しまいには自分が作品中の人物であると信じ込んでしまい、それ以外の現実には存在しないと思ってしまうのだろう。

改めて眺めてみると、僕たちは皆、真の現実には気づけずに俗っぽい雑事にとらわれて、機械的に動いているだけのロボットのようなものだ。重要視していることは、今生でいかに成功を取めるか、ということで、それはどうやって社会的に認められて、名声、評判、富、権力などを得るかということだった。

大半の人は、幸せになれるかがこれで決まってしまうかのごとく、それらを手に入れることに全力を費やす。でも他の人が夢中になっていることはすべて、僕には何の意味もなかった。どれも、霊的な世界で感じたような幸せを与えてくれそうになかったからだ。

一方、これとは別な心配が僕を落ち着かない気分させていた。それは、霊的な世界で体験したことを全部細部に至るまで、完全に記憶していられるだろうか、ということだった。なぜなら、覚えていたことはすべて記録していたものの、体験したこと全部を完璧に思い出して、書き留めておくことは不可能だったからだ。そのため、体の外に抜け出すためにリラックスしようとしても、できなくなった。完全にリラックスする必要があるのに、頭に浮かぶとりのめのない思考に邪魔されてしまうのだ。僕の意識が、体外離脱を可能にしてくれるほど、落ち着いて寛いではいなかったからだ。僕は途方に暮れ、余計に神経質になってしまった。

こんな状態で、僕はリラックスの努力を重ねていた。ある日、真っ暗で静まり返った部屋に独り閉じこもって、頭に浮かぶ雑念を払いながら

ベッドに横たわっていると、はっきりと「心配するな」という声が聞こえた。

寝ていて突然起こされた時のように、びっくり仰天した。ギョッとして、目を開けて周りを見回したが、暗いままだった。手探りで明かりをつけてみても、誰もいなかったし、何の異変もなかった。ドアを開け閉めする音も聞こえなかったし、他の音も一切していなかった。

「それなら思い過ごしだろうか」と考えて、もう一度電気を消して、またベットに横になった。そして、呼吸法によって再度リラックスしようとしていたのだが、それほど経たずに、またはっきりと「心配するな」と聞こえた。

二回目はそれほど驚かずに済んだので、起き上がりはしないで、身を固めたまま、次に何が起こるのかを待ってみた。今回は、その声が、実際には僕の耳の中で聞こえていなかったことに気づいたからだ。明瞭な思考のように、むしろ頭の中で話しかけられたのだったが、僕自身のものではなかった。

「誰ですか？」と、声には出さずに訊いてみた。答えが返ってくるとは思わなかったが、試してみたのだ。返事はすぐに戻ってはこなかった。2～3分経っても何も起こらなかったので、脱力した瞬間、

「疑い深い性格だね。あんなにいろいろ体験したのに、まだ疑うのかね？ 一体、私を誰だと思うのかい？」と聞こえた。

「まさか、イザヤ？」と口にした。

「私に訊かないで、自分で答えてごらん」

「あなたのテレパシーの声だとわかります。でも、あなたを見ることのできないので、疑ってしまうのです」

「考えようとしなくて感じ取るように。そうすれば疑いも晴れるだろう。私を見ることのできないのは、君が身体に結びついたままだからだ。でも、私のことがちゃんと聞こえるようだから、それで君がしたいことには充分だろう」

「僕がしたいことですか？ 何のことだかわかりません」

「君があることを心配していたから、心配するな、と答えたのだ」

「本当ですか？　なんで僕が心配していないといけないのですか？」

「自分で考えてごらん。それとも、なぞなぞをして遊ぶとするかね。そうしても、私が勝つことは確かだよ。なにしろ私は思考を読めるからね。でも有利な条件を貰うのは好きではないので、また別の機会にしたいね」

「ええと、幾つか思い悩むことがあるんです。一つには、人びとが苦しんでいるのを見ると、それが気掛かりです」

「人の苦しみは今に始まったことではないが、以前はそれほど気に留めていなかったね」

「以前は気づかなかったのです。正確には、今ほど意識することがなかったのです」

「もちろんだとも。なぜなら、今は君の感受性が目覚めているので、目にしなくても、感じ取って自分のことのように思うのだ。人びとは前から苦しんでいたのだが、君はそれに気づけなかったで、影響されなかったのだ。でも今は意識しているので、動揺している。それがふつうだ。しかし、君が悩んだところで、人びとの苦しみがなくなるわけではない」

「それはそうなのですが、何か役立つことをしたいのです。でも、無力に感じるのです。ベスタとジュノーと一緒にいた時にこの話が出たことは覚えているのですが。つまり、この世の中が実際にどのように機能しているのか——霊性についてとか、人が進化して幸せになるためには愛する能力を高めなければいけないことなど——を皆に伝えることを言っているのですが、どこから手をつけたらいいのか見当がつかないのです」

「それなら、初めから始めることだよ、はっはっは」

笑われると、僕が大真面目に話していることをイザヤにからかわれた気がして少しムツとしたけれど、イザヤはすぐにそれに気づいて、

「そうムキにならないことだ。私にとって大事でない、などと思わないでほしい。大事だから、今ここに来ているのだ。君の緊張がほぐれる

ように、少し笑わせてみたかっただけだ。ユーモアと愛との結びつきを知らないのかね？ 笑いというものは、愛と同じく、内面の至福と喜びが顕れ出たものだ」

「すみません、少し過敏になっているので」

「構わんよ。君の力になるためにここに来ていると言っただろう」

「馬鹿げたことに思われるかもしれませんが、このメッセージをどのように伝えたいのかわからないのです。それに、体験したことを思い出せなくなることも心配なのです。しかも、人が必要としていることを全部教えてあげられるほど自分が十分に理解していないとも感じています。僕にはまだ準備ができていません。僕自身、疑問だらけなんです。自分がはっきりわかっていないのに、どうやって他の人たちに説明してあげることができると言うのでしょうか？」

「私が手伝うのだから、できる筈だよ」

「僕が言いたいことがわかってもらえないのだと思います。助けていただいたとしても、その後で僕が身体に戻ってきた時に、教えたもらったことを覚えていられるかどうか心配なのです」

「言いたいことはわかるよ。でも、圧倒されているのをみると、君が私をわかっていないようだ。前にも言った通り、そのことは心配しなくてもいい。どんな問題にも解決策はあるし、この時代であればなおさらだ。ところで、話はできるかね？」

「何ですって？ 意味がわかりません。なんで、今僕が話せるかどうかなんて訊くのですか？ 一緒に話しているではないですか」

「わからないかね。メンタルな会話のことを指しているのではない。今、私たちはテレパシーで交信しているのだよ。私が言いたいのは、君が自分の声を使って話ができるか、音声を出せるかどうかだ。今は君が身体に繋がったままであることを忘れないでほしい」

「わかりません。試してみませんでした」

「では、やっpegらん。でも、気を逸らさないように」

そこで、イザヤに言われた通りにしようとしたけれど、その時になって初めて、イザヤに指摘されたことに気づいた。意識していなかったのだから忘れていたが、まだ身体の中にいたのだった。イザヤが僕に声を出すように言った時になって初めて身体を感じたが、ほとんど感覚がなく、僕の言うことなど聞き入れそうになかった。全身が麻痺し、しびれているようだった。しゃべろうと口を開けたが、声が出なかった。自分の身体の中にいたのに、動かすことができなかったのだ。

「だめです」と、頭の中で伝えた。

「ちょっと待ってごらん。少し手を貸してみるから」

少しすると、頭のとっぺんからムズムズしてきて、頭部に広がっていったが、それは柔らかな感触で心地よかった。そのくすぐったい感覚は、徐々に頭の中心から首の方へ降りてきた。ボルテージの低い放電のようだったが、不快を感じるどころかとてもいい気持ちだった。それには、強くなったり弱くなったりする波があって、頭の上部から首にかけて流れていった。このお陰で、他の身体の部分はまだ完全に麻痺したままだだったが、頭部のしびれ感はなくなった。

「これでどうだい？」イザヤが言った。

まだ口を動かすのは大変なことで、音も出せなかったが、今度はなんとか少しだけ動かせた。つばを飲み込むのがやっとだった。

「とてもしんどい」と思った。

「そのままやり続けるのだ」

何の進展もないまま、そのまま5分ほど口や舌を動かし続けていたが、ようやく最後に聞き取れないほど小さい声を出すことができた。それは囁きというよりは、のどを鳴らしたようなかすかな音だった。

「まだ私のことが聞こえるかね？」

「ええ」と頭の中で答えた。

「今日のところはこれで充分だ。また機会を見てこの練習をしよう」

「で、この練習の目的は何でしょうか？」

「頭の中で私の声を聞きながら、君が話せるようになるためだ」

「何のために？」

「私が君に言うことを録音できるためにだ」

「録音ですって？」

「もちろんそうだ。君たちは声を記録する器具を持っていなかったかね？ それを使うのだ。そうすれば、私たちが話すことを詳しく記録しておくことができるし、君がそれを覚えている必要もない。どうだい、君の問題はこれで解決だ」

「録音してどうするのですか？」

「どうするかまで教えなければならぬのかね？ 想像力というものを使えないのかい。君たちの世界では、伝えたいことがあってそれを人に知ってもらいたいと思う場合にどうするのだろうか？」

「本と書くということですか？」

「たとえば、そういうことだ。皆の役に立ちたいと思っていたのだろうか？ この世の仕組みの実相を知ってもらって、幸せになってもらうために愛する能力を発達させてほしかったのではないのかね？ 私もそれを願っているのだ。だから、自己の内面を覚醒させて何のために生まれてきたのかを思い出してもらおう—それは他でもない、愛の度量を大きくすることだが、それによって今よりも幸福になれるのだ—のに必要となる知識を君が皆に教えてあげられるように手伝おう。もっとも、ただ一つの本では不十分かもしれない。何冊か必要となるだろう。だが、物事には順番というものがある。よければ、今日は手始めに題名を考えてみよう。さあ、覚えていられるだろうか。タイトルは『魂の法則』だ」

「えっ！ なぜ『魂の法則』というのですか？」

「それに答えるのは、君がしゃべれるようになって録音ができるようになってからとしよう。後で忘れられてしまっては困るからね。君のトラウマの原因となるのは沢山だ。はっはっは」

「全然面白くありません」

「さて、前もって伝えておきたいことがある。『魂の法則』の中の一つが『愛の法則』だと知っているかね？　これが一番重要な法則だ。宇宙に内包されるものはすべて愛を中心に存在しているからだ。そのため、この法則については話すことが沢山ある。『愛の法則』に関しては、一冊以上書き著すことになるだろう」

「愛の法則」

- 魂の目的は、自身の自由な決断で、無条件の愛の経験を通して、幸福になることである。
- 愛なくして進化はなく、愛なくして叡智はなく、愛なくして幸福はない。
- 愛は、靈的宇宙を調和し躍動させる力である。

*** あなたから見て、人間にとって最も大事な志は何ですか？**

永続的な真の幸福に至ることだ。

*** その幸福に達するための秘訣は何でしょうか？**

愛することだ。だが、これは何も秘密ではない。それぞれの魂は、つまり誰もが、幸せになるためには愛が必要なことを直感的に知っている。進化の行程は初めから終わりまで、幸せになるために愛の能力を高めるという目的のためにある。

*** どのような道を辿ればいいのでしょうか？ つまり、愛において成長したければ、どこから手がければいいのでしょうか？**

道はまず自分から始まり、そして他者へと続いている。要は、他の人びとを愛することができるためには、自分自身を愛さなければならないということだ。

*** 誰もが辿るべき道を知っているのだとしたら、僕たちがまだ目標に達していないのはなぜでしょう？ 僕の印象では、幸福だと言い切れる人は世界にほとんどいないようなのですが。**

たやすく短い道だと思っはならない。自分自身を愛し他者を愛するプロセスでは、最終目的地に到達するために幾つもの段階を通らなければならない。ゴールは、自分を愛するように無条件でどんな人でも愛することだ。

イエスは「汝の隣人を自分のごとく愛しなさい」という簡潔だが深遠なメッセージに、このことを要約してみせた。それは、無数の転生を繰り返して多くの経験を積むこととなる道程だ。

これは二重の修行となる。一方では、愛の感情を発達させねばならず、もう片方では、エゴ（我欲）の一掃に努めねばならない。

前作では、霊的な視点から見たエゴのさまざまな段階——虚栄心・自尊心・自負心——についてと、それぞれの段階でエゴがどのように顕現するかについて説明した。だが、今回は、愛の感情について深めて話してみたいと思う。愛というものが、どのように自己から他者へと少しずつ広がっていくかだ。他者とは初めは一番身近な人たちであるが、最終的には我々と全く縁のない人たちへと向かうのだ。

カップルの愛や家族内（親子間）の愛、人間関係と社会における愛について話そう。また、エゴというものがどのように愛のすきまにつけ入り歪め、人を惑わせて愛と幸福の道から逸らせてしまい、甚大な害を及ぼすのかについても分析するとしよう。

愛を育むにあたっての最大の敵がエゴであるが、エゴは多くの様相を有している。それらをよく把握しておかなければ、私たちは進化から外れてしまい、羊の皮を被った狼のような、愛を偽ったエゴに流されているだけなのに、愛しているのだと思い込むに至ってしまう。

*** でも、自分を愛するとはどういうことですか。**

自由な愛の感情に基づいて行動するということだ。つまり、人生における重要な決断を心で感じることに従って下すことができるように、自分の愛情の欲求と感情とを認めて、それらを人生の牽引力となるように発展させていくことだ。

*** では、他者を愛するというのは？**

他者を自分のように感じることだ。相手を自分自身のように思えると、その人の幸せを自分のことのように喜ぶことができ、その人の痛みを自分のもののように感じるものだ。他者を愛すると、自分に対して願うように、その人にも幸せになってほしいと思い、幸福になる手助けをするものだし、自分の行為によって相手が苦しんだり傷つかないように努めるものだ。

*** 苦しみはどこで生まれるのでしょうか？**

苦しみは他者のエゴ的な行為が原因であることも、自分自身のエゴに起因する場合もある。つまり、他者の利己的な行動で傷つけられて苦しむ時もあるし、我々自身のエゴが相手の行為を誤って裁いてしまい、実際には我々の要求や期待通りに動いてくれなっただけなのに、それを自分の苦悩のせいにしてしまう時がある。

また、自己の感情を抑圧して素直に生きられない場合に苦しむこともあるが、これは、より激しい苦悩の原因ともなる。

*** どうしたら他者の行為が原因となって苦しんでいるのか、それとも自分の姿勢が原因なのかを見分けることができるのですか？**

自分に正直になってみるのだ。正直にならない限り、進歩はできない。現実をありのままに受け容れて、認めた通りに自分を変えようとする代わりに、自分のエゴ的行為や他者のエゴ的行為を正当化したり、自然な感情を抑圧する口実として、現実を歪曲してしまうからだ。

***では、他の人たちが僕たちの行為で苦しんでいるのかは、どうやって知ることができるのですか？ 傷つけようなどと思っていなくても他の人を苦しめてしまう場合もありますか？ このような場合はどうしたらいいのでしょうか？**

原因が、我々自身のエゴ的な行為なのか、他者のエゴによるのか、それとも感情を抑えつけているためなのかを決めつける前に、苦しみがどこから生じているのかを見極めなければならない。

自分の愛する者でも、避けてあげることのできない苦しみというものもある。それらは彼ら自身のエゴが誘因となって人生に現れ出るもので、過去の自己のエゴ的な行為の代償と向き合っているケースだ。このような場合に、私たちがしてあげられる最善のことは、ひょっとすると彼ら自身のエゴ的な行為が原因で苦しんでいるのかもしれないとわかるように上手く気づかせてあげ、他の人に同じような苦痛を味あわせないようにその経験を活かしてもらうことなのだ。

生まれる前に彼ら自身が選んだ、厳しい試練に直面したために出現する苦悩というものもあるのだが、これらの逆境も霊的な学びのプロセスの一部である。このような場合には、そういう経験をしている人を元気づけて、上手く関門を通過できるように勇気と希望を与えてあげて、その試練には意味のあることと、乗り越えられたら霊的に成長できることを気づかせてあげる。

***第三者から、僕たちがその人を苦しめていることを伝えられた場合には、どう対処すべきですか？**

正直にありのままを見るのだ。最初に、その人に対する我々の態度を分析してみて、自分のエゴを認識できるかどうかをしてみる。

もし相手に痛手や苦痛を与えるような我々自身のエゴ的な態度に気づいたならば、そのエゴ的な態度を修正するのは我々の方だ。我々自身の利己的な言動を認識するということは、霊的な学びの一環である。なぜなら人は多くの場合に、他者を傷つけていることも知らずに、利己的な行動を取ってしまうからだ。だから、相手に与えてしまった苦痛を感受するためにも、自分の行為の結果を体験することが必要となる。

その人に対する自分の愛情を抑えているがために相手が苦しむというケースもある。感情を抑制することは、自分自身を傷つけるだけではなく、他の人をも傷つけることになるからだ。これはつまり、愛が与えられないので、苦しんでいるのだ。

相手の苦悩が我々のエゴによるものではなく、その人自身のものであること、つまり、その人の現実の受け留め方が間違っている可能性も検証してみる必要がある。このような場合は、その人にとって物事が思い通りにいかなかったり、我々がその要求や期待を満たさなかったために、その人自身のエゴ的な態度が、不当にも、我々の行動を利己的に見せているのである。

*** この最後のケースでは、相手の欲求を満たすべきでしょうか？ 苦悩を回避してあげるために、その人の期待しているものを与えてあげるべきか、ということですが。**

常識を使って、相手の求めているものが公正で誠実なものなのか、そして実際にそれを叶えてあげることが君たちに可能なのかを判断してごらん。いずれにせよ、強要されるべきではない。なぜなら、何かを要求するという行為自体が利己的であるからだ。少なくともお願い事という形を取ってもらわないといけないし、ノーと答えても根に持たれてはならない。でないと、自由意志の侵害となってしまう。

どんな場合においても、他者を悦ばせるだけのために、したくもないことを義務としてするのはよくない。自分の意志や自由を放棄しても自己成長できないし、相手の成長を助けることにもならないので、無駄に苦しむだけだ。相手のエゴを満たしてやっているだけになる。

たとえたとすれば、ちゃんと歩けるくせに足が不自由なふりをしてる人を背中にしょってやるのと同じで、無益な努力なのだ。独りでできることをやってあげたとしても、それは不必要に骨を折って、その人を満足させているだけだ。

*** でも、好きな人のためには犠牲を払いなさい、という意見の人もいますよ。自分の幸せよりも愛する人の幸福を優先すべき、ということですが、これについてはどう思われますか？**

そういうふうと考えてしまうのは間違いだ。人の幸せというものは、別の人の犠牲の上に成り立つものではないからだ。天が幸福になる権利を放棄しなさいと誰かに言ったとしたら、それは不公平だろう。すべての霊的な存在は幸せになる資格があるが、そのことによって他の人の権利が減ってしまってはならない。そのため、他者のために自分の幸せを諦めることも、自分が恩恵を得るために他の人に犠牲になってほしいと求めることも、どちらも公正ではない。幸せになる権利を損ねてしまうものは、愛とは言えずにエゴなのだ。

混乱してしまうのは、君たちが愛という概念を誤って解釈しているからだ。君たちの愛し方というものは、ほとんどの場合においてエゴまみ

れなので、そのため、他の人が幸せになるためには君たち自身の幸福の権利を放棄すべきだと考えたり、自分たちの幸せのためになら、他の人にそれを断念させる資格があると思ってしまう。

だから、真実の愛の感情とエゴが顕現したまがいものを見分けることができるように、我々がどのように愛しているのかをよく分析してみることが大事である。そうすれば、不必要な自己犠牲や断念をしたり、またそれらを他者に要求したりという勘違いをしなくなる。

***でも、愛する人のためには、時にはある物事を断念することが必要だ、というのも正しいのではないのでしょうか？**

それは、断念という言葉が君たちにとって何を意味するのか、ということによる。愛のためにエゴを放棄することは善いことである。だが、愛によって愛を放棄するのには意味がない。

***あなたの言われることがよくわかりません。わかりやすく例を挙げてくださいますか？**

子どもを持つとか考えている夫婦を想像してごらん。この二人には子どもを持つということが、物的な気紛れを放棄したりレジャーに費やす時間を断念することに思われる。今後は子どもの扶養にお金がかかるし、時間も割かれるからだ。

彼らがこの状況を自己犠牲的に感じるのは、愛よりもエゴが勝ってしまったために、物の所有や安楽さを重視してしまい、愛情を大事にできないからだ。だが、自分たちの子どもへの愛によって、気紛れを減らせれば、失うものはエゴであるので、彼らにとっては良いことになる。

これと全く違うのは、別の男性を愛しているのに、ある男性との間に子どもがいるために、その子のために愛してもいない人と我慢して一緒に暮らして、人生を犠牲にしてしまう女性の場合だ。このケースが、間違っていて、愛によって愛を放棄してしまっているのだ。なぜなら、自分が我慢すれば、子どもがもっと幸せでいられると思いついてしまっていて、自分の自由な感情を棄ててしまっているからだ。

***今お話しくださったようなケースでは、事情の違うありとあらゆる状況があり得るのだろうと考えさせられます。それらのすべてを鮮明に検証して、愛とエゴとを混同することなく、それぞれの場合でどう対処すべきなのかを知るのは難しいだろうと思います。**

あなたは、夫婦の関係について、それから子どもとの関係について話されました。個人的な人間関係で生まれるこのような状況を詳しく分析してみることは、特に僕にとって、そして皆にとって有益だと思います。

なぜなら、これはほぼ全員に関係していることですが、明晰な霊的意識でどう対処すべきなのかがわからないので、多くの人が悩んでいると思うのです。これだけで本が一冊書けそうですね。

そのようなことをはっきりさせようとして、今話しているのだよ。確かに人間の感情的な苦悩の大半が、パートナーとの関係や家族関係（親子間、兄弟間など）といった個人的な人間関係と結びついている。だから、人間関係を集中的に取り扱ってみるのはいいことだ。では、どこから始めるとするかね？

*** 選べるのでしたら、パートナーとの関係からにしたいです。**

それなら、始めたまえ。質問を注意深く聞いているから。

愛の法則から見たパートナーとの関係

*** 人が不幸に感じる最大の要因の一つが、パートナーとの関係であるように見えます。相手が見つからないと悩む人もいますし、自分たちの関係が不幸せなために苦しむ人もいます。パートナーとの関係で、幸せでない人たちがこんなに多いのはどうしてですか？**

それは二人の間に、本物のパートナーの愛の感情というものが存在していないからだ。または、エゴの欠点が愛の感情を抑えついたり、あるいは、その二つのことが同時に起こるからだ。

*** パートナーとの関係では、どうしたら二人が幸せになれるでしょうか？**

パートナーとの関係で完全に幸せになるには、二人の内面が完璧に似通っていて、両想いで、自由な、真の愛の感情が存在している場合に限られる。しかしこのケースは、君たちの世界ではほとんどお目にかかれない。

*** それはなぜでしょうか？**

それはパートナーとの関係において、エゴや必要性が勝ってしまっているからだ。また大半の人が、自分と似た存在をはっきりと認識できるほど愛の能力を発展させていないので、その人に対する愛情を自覚して目覚めさせ、そのために闘う勇気を持たない。

*** 自分と似た存在を認識するというのは、双子の魂のことを指しているのですか？**

そうだ。もともと、双子の魂というよりも相似の魂と呼んだ方が正確なのだが。

*** それは、どうしてですか？**

なぜなら、君たちは双子という言葉から全く同じものを連想しがちで、双子の魂はすべてにおいてそっくりの瓜二つだと思ってしまうが、そうではない。双子の魂、つまり相似の魂は、あえて定義するならば、「霊的な出産」となる同じ創造の時を共にした存在だ。それらは、愛で結びついていられるように同じ瞬間に誕生した、お互いを完全に補い合える魂なのだ。だが同時に生まれても、そっくりな魂であるわけではない。

*** 同じ時に創造されても、そっくり同じとならないのはどうしてですか？**

なぜなら、似通った魂といえども同一の自由意志を共有しているわけではないからだ。どの魂も自分で決断できるため、個々の魂の進化のプロセスが必ず違ってきて、それぞれが独自の個性を持つこととなる。そうして、全部の面において差異が現れてくる。

*** 進化のレベルが同じでない、ということですか？**

似ていることが多いが、全く同じというのは不可能だ。個々が独自の自由意志を持ち、異なる体験をしていくからだ。たいていの場合はあまり大きな差はつかないが、一つがもう片方の魂より進歩が速かったり、一方がある面で他方より成長していても別の面では反対だったり、そのようなことが各々の霊的な人格や進化のレベルの違いとなって現れるのだ。まあ違いがあるとはいえ、似ているのだがね。

*** それでは、カップルとして結びつく人が双子の魂同士の場合は、パートナーとの関係で、完璧に幸せになれるのでしょうか？**

お互いへの愛情が欠点を克服できるほど進化していれば、完全に幸福になれるだろう。相似の魂同志だから完璧だということではない。愛する能力があまり発展していなければ、それぞれのエゴが台頭してきて、お互いの愛情や相似性が発揮できる障害となってしまう。そして、本当に幸福になるのを妨げてしまうのだ。

*** 自分の双子の魂が同時にこの世に生まれ出ていない、ということもあり得ますか？**

そういうこともある。

*** それが本当なら、どうしてそういうことが起こり得るのか理解できません。つまり、同時に転生できない場合は、二つの魂がカップルとして結びついて幸せになる可能性を奪ってしまっていることになりませんか？**

そう言うのは、転生する人生の部分だけを見ているからだ。肉体の命というものは真の命の一瞬に過ぎないので、離れ離れでいるのは一時的なのだと思い出しておくれ。転生して過ごす人生というものは、魂の本当の生の一部に過ぎない。しかも、進化した魂たちは、転生と転生との間隔を空けるものなので、彼らにとっては非常に短い時間なのだ。

*** でも、同時に生まれ変わることはない状況を選ぶのはなぜですか？**

それが、これらの魂たちが——この場合は相似の魂たちのことだが——自分たちの取り組みたい試練や使命に応じて選択したことだからだ。

それでも、まるっきり引き離されているわけではない。転生した魂は、寝ている間に霊界に戻り、霊的次元に残った愛する者たちと多少なりとも再会できるからだ。出会えるのは相似の魂に限られず、同じ時に転生しなかった他の愛する者たちにも会える。

実際には二人がそれぞれ別の次元から協力して、任務を遂行することになるのだ。

*** 生まれ変わった人は、寝ている間のそのような出会いを覚えているのでしょうか？**

大部分の人が自覚してはいないだろう。

*** 肉体を持たない自分の双子の魂と出会った時のことを覚えていられなければ、一体何の役に立つのでしょうか？**

体験したことを意識して覚えていられなくても、その人の内面は元気づけられるのだ。

*** でも、少なくとも転生している者にとっては、そういうふう生きるのはフラストレーションになりませんか？**

愛する者と暮らした後にその人が死ぬのを見て、物理的な次元に取り残されてしまう人のケースと同様、これも難しい試練ではある。だが我々が話しているケースでは、自分と相似の魂が別世界にいることに完全に気づくことはないので、大きな苦悩とはならない。

*** そのことに気づける人はいるのでしょうか？**

敏感な人ならね。意識的にコンタクトすることも可能だろう。

*** それなら、その人はもっと苦しむことになりますね？**

それはその人の進化レベルと、そのような状況を受容する心の準備がどれほど整っているかによる。

それに同時に生まれ変わったとしても、相似の魂同士が永続して一緒にいることはたいそう難しいのだと知っておく必要がある。知り合うまでに、かなり時間がかかることもある。また、出会うことができたとしても、断固として愛情を守り抜く勇気がなかったり、まだエゴの方が優勢であるがために、多くの場合に一緒にいる努力をしないものなのだ。

また、肉体を置き去る時が別々で、時間差があると、一人が霊的世界に戻っても、もう一人が物質界に残されてしまう。だが、この別離期間

の間に、各々が自分の目標を果たすことができると、二人の再会は素晴らしいものとなる。

*** 霊界に戻った時に、自分の双子の魂がまた生まれ変わってしまったとしたら、どうなるのですか？**

転生というものはそれほど素早く起こるものではない。再び生まれ変わるまでに、アストラル次元でかなり長い時間を過ごすものだ。通常、物質界に戻る前に、相似の魂と再会して霊的次元で一緒に暮らす時間があるものだ。

*** 自分の双子の魂が別の次元にいると自覚すると、物質界でパートナーを作る障害となりますか？**

いや、伴侶を失った者が新しい相手と一緒にいるのと同じで、霊的な法則には何の違反ともならない。この世に生きる者は、自分の自由意志で決断できるので、パートナーを持つべきかどうか、自己の人生に関して良いと思うことをしていいのだ。

*** 別次元に残っている魂は、自分の双子の魂が地上で別の相手と一緒にいても、嫉妬しないのでしょうか？**

霊的世界では地上にいる時よりもずっと視野が広いので、嫉妬することはない。霊界の魂も状況を理解していて、相似の魂により幸せになれる決断をしてほしいと願っている。自分もその人との再会を望んでいるのは、もちろんのことだがね。

*** でも、その人はそのパートナーとの関係で幸福になれるのでしょうか？**

それは、二人の類似性による。似ていれば、ある程度幸せにはなれるだろう。だが、満たすことのできない心の領域があることは確かだ。その人と完全に似通っているのは別の次元にいる相手なので、パートナーとの関係で文句なしに幸せになるのは無理だろう。

*** では、両方の愛情をどのように共存させるのでしょうか。言いたいのは、つまり、霊界のパートナーとこの世でのパートナーとに感じる気持ちをどのように両立させるか、ということですが。解決策のないジレンマではないのでしょうか？**

解決策は、状況を理解することにある。いずれにせよ、霊界で待っている、あるいは先に霊界に戻ってしまった霊的なパートナーに対する想

いを苦しめないために忘れようとするのは、とんでもない誤ちだ。感情を否定すると余計に苦しむことになるからだ。

また、地上のパートナーに、相似の魂に対してと同じ想いを抱かなければならないと思込むことも、二番目の人に最初の人と同じ気持ちになれないがために罪悪感を覚えることも間違いだ。なぜなら、愛の感情は完全に類似している時に生まれるもので、そうでなければ無理なのだ。これは誰のせいでもない。

だが確かに、相似の魂との愛を知り、それを体験したことのある大変進化した魂たちは、他のどんな関係でも満たされないことを知っている。別の相手と約束をすることは少なく、再会の時を待つものだ。それに彼らは能力が高く敏感なので、二人がそれぞれ別々の次元に暮らしていても、連絡を取り合うことが可能である。

*** 双子の魂が同時には転生する場合は、いつもカップルになろうとして生まれ変わるのでしょうか？**

それがふつうだが、常にカップルとして結びつこうとして転生するわけではない。

*** 双子の魂は、この世では同じような年齢でなければならないのでしょうか？ それとも、30歳以上離れていることもあり得ますか？**

それはさまざまだ。年齢差がとても大きい場合も、少ないこともあり得る。転生の時期や状況は生まれ出る前に決めるものだが、すべてに理由があるのだ。

*** 歳の差は、カップルになる障害とはならないのですか？**

一方が大人で、もう片方がまだ子どもである場合には問題となろうが、二人が大人になれば関係なくなる。

*** 双子の魂は、絶対にカップルになれない状況で、つまりお母さんと息子とか兄弟姉妹として、生まれ変わることもありますか？**

そう、親子であったり、兄弟姉妹だったり、無数のケースがあり得るものだ。

*** そういう状況では、別の相手が見つけれなくなりませんか？**

もちろんそんなことはない。だが、人生のパートナーとして選んだ人よりも、家族の一員として生まれた自分の相似の魂と、より相性がいいのは確かだ。

*** 双子の魂同士が、同時期に同性として転生することもありますか？**
それほど頻繁ではないが、そういうことも起こり得る。

*** ひょっとすると、同性愛とは、双子の魂が同性として生まれ変わったためではないですか？**

いや、それが要因ではない。親子や兄弟姉妹の間柄になっても、近親相姦になるわけでないのと同じことだ。

*** それが原因でないならば、霊的な観点からはどういう理由で同性愛になるのですか？**

すべてのケースに当てはまる一般的な回答をするのは難しい。それぞれのケースで異なるからだ。しかし、同性愛者として生まれる人が同性愛であるのは、その魂の前世での体験と関係している。

物的な環境を離れた魂には性の区別はなく、性別が決まるのは転生する時である。また、転生時にはどちらかの性を優先したがるものの、進化の必要性から判断して、同じ魂が一つの人生では男性で次に女性になったり、その逆であったりもする。

だから時々、前世での性別と反対の性を選んで生まれる魂が、前世の個性（性別も含めて）を完全に捨て切れていなくて、それが今生の自分の性自認に影響することがある。前世での性別をどれほど自分と同一視するかによって、以下のようなさまざまな状況となる。

トランスセクシュアル（性同一性障害者）は、自分の生物学的な性別と反対の性を完全に自認する人で、自己認識と一致した身体を欲しがる。

ホモセクシュアル（同性愛者）は、反対の性自認をすることはないが、現在と逆の性に生まれ出ている前世と同じ性的指向を持つ。

また、バイセクシュアル（両性愛者）には、現在及び過去の性別と同じ性的指向が現れる。

*** どういう理由で、前世の人格が剥がれ落ちないのでしょうか？**

人格が剥離しない理由は多種多様だが、一般的には、自分の性別をエゴのために利用、悪用して、感情面も含む他者の自由意志を侵害してしまった場合など、魂に根ざした利己的な姿勢による。

*** たとえば、どういう場合ですか？**

男性として転生した魂が極端な男尊女卑者で、女性たちを虐待したケースなど。たとえば、自分を愛してもいない女性を強制的に妻にしてくづくで性関係を持たせたり、生涯にわたってひどい扱い方をして辱めたりなど、全般に女性全員にそのような蔑視の態度で接した場合である。

すると今生では、蔑視していたのと同じ性別に生まれてくることになるが、前世と似た傾向の個性を保ったままだ。克服できなかった気質は、強く魂に浸潤しているからだ。

または、女性に生まれた魂がその肉体的な魅力を利用して、男性たちを制し従わせるために誘惑したとする。すると今生では、自分が搾り取った者たちと同じ性別となって転生するが、前世の人格が根強く残っていて同じ性格のままなので、性的指向も全部または一部が以前のものとなるのだ。

*** そのような状況から、何を学ばなければなりませんか？**

魂は、男女の性別を尊重するために、自分が痛みつけた性別を選んで転生しようとする。つまり、女性を虐待した男性なら、女性に転生して、今度は自分も女性であるので、女性を尊重することを学ぶ。あるいは、男性を搾取した女性なら、今度は自分も男性として転生して、男性を尊ぶことを学ぶ。

性同一性障害や同性愛は、このような状況下で、当人が招いた情態である。その人に、前世の人格が根強く残っていて、性的指向も全部またはその一部分が維持されているのだ。

*** カトリック教会を含む大半の宗教では、同性愛は悪いもので、その尋常ではない性的指向を放棄せよ、との見解です。異性愛の関係を持つことすら奨励しますが、あなたはどうか考えですか？**

同性愛者が、ただ外見を繕うために、異性愛者でもないのにそうなるうとするのには意味がない。自分が同性愛であることを認めなかったり抑圧したりしても、何もいいことがないからだ。そうすることで当人が不幸になるだろうし、選ばれた相手にとっても不幸だろう。自然でないことを無理強いできはしないのだ。

同性愛者は、誰もがそうであるように、ありのままの自分を受け容れて当人自身でいる必要があるし、そのまま幸福を探し求めなければならない。同性愛者であるという状況は、悪いことではない。全くその逆で、その魂にとっては、自由意志と感情における自由の大切さを認識できる、進化の一助となるものだ。

人は、本来の自分と違う人になることや嫌いな生活を強いられると、苦しむものである。それが、その人の試練となる。社会の無理解と拒絶にもかかわらず、自分自身になるために闘うのだ。本当の自分になるのが困難であると、自由意志の尊重をとっても大事にする。そして、他者を強要することは苦痛の主たる原因となるので、何があってもすべきではないと気づき始める。

同性愛と性同一性障害は、虚栄心との関係が深いとつけ加えておこう。虚栄心を克服しない限り、このような状況はなくならないだろう。

*** 双子の魂の話に戻りましょう。カップルとしての幸せが双子の魂の結びつきによるのであれば、今生でカップルとして一緒になれない環境——たとえば血縁関係にあるなどの——を選ぶことは、矛盾していませんか？**

時折、自分に一番よく似た存在がそばにいてくれることを確約する手段として、血縁関係を選ぶことがある。通常、血の繋がりがないと、相似する二人が一緒になる際の物的な障害が多く、一緒になるのが望ましくても、大半はそうはならない。こういう場合は、最善の状況ではないものの、確実な方法をとるのだ。

*** パートナーがいる大半の人たちが、自分の双子の魂とカップルになっていないということですか？**

もう、そう言っただろうに。相似の魂と結びついている地上のカップルは、両手の指で数えられるほどだ。もっとも、もちろんのことだが、それが自分のケース、つまり類魂同士の結合ではない、と認める人はほとんどいないがね。

*** 一体誰が自分の双子の魂なのだろう、と疑問を持つ人たちもいると思います。簡単なことではないと思いますが、どのように自分の双子の魂を識別するのですか？**

君たちが自分の感情に従って行動し、愛する場合にもっと大きな自由が君たちの世界にあれば、より容易になるだろう。だが、そうならないので、可能であり得たことが複雑なことになってしまったのだ。

*** 肉体を持って生きている時に、双子の魂同士がカップルになるのを妨げてしまう障害とは、どのようなものですか？**

それも、もう話したろう。君たちの惑星の人間はまだすっかりエゴに浸りきっていて、愛の能力もあまり発達していないので、相手を選ぶ場合に、愛の感情よりも他の要素を優先してしまうのだ。生まれ出る前に、相似の魂同士がカップルになる約束をしていたとしても、転生すると別の人たちとくっついてしまうのが一般的である。

*** そうになってしまう要因は何でしょうか？ 言い換えると、なぜ、愛のない結びつきが起ってしまうのですか？**

肉体的な魅力に惹かれる場合、物的または精神的な便宜、二人の知的面での類似性、愛される必要性や愛する必要性など、いろいろな要因がある。

*** 具体的にどういうことが明確になるように、それぞれの理由についてもう少し深く説明していただけますか？**

いいだろう。君たちの世界における最大の理由となる、肉体的な魅力または性本能から始めることとしよう。

魂の愛する能力がまだ発達していない時は、意志が本能に多大に影響されていて、パートナー選びという特定の場面で、性本能が感情に勝ってしまうのである。そのため、内面ではなく外見を見て、性本能が反応する相手を選びがちだ。それで、肉体的に魅力的な人は相手が見つかりやすいのに、魅力がない者は、永久に見つからないような目に遭うのである。

このような行動が君たちの世界では大多数だが、それは全体的に言うと、大半の人に愛する能力が足りないためである。また、青年期にパートナー選びが集中しているのも、その原因である。性本能が目覚めるこの時期は、若者特有の未熟さも相まって、より進化した魂でさえも、感情を発達させることよりも性本能を満たしたいと思うからだ。

*** でも、カップルの関係では、相互に性的魅力を感じるものが不可欠だと思います。お互いに性欲が生まれなければ、カップルになる意味などないと思われませんか？**

もちろんそれは必要条件だが、それで充分ではない。

性本能と性欲とを混同しないことだ。二つの意味合いは違うのだよ。生物学的な性本能によって性欲が活性するのは確かであるが、性欲は本能によってのみではなく、感情によっても高められるのだ。

生物学的な性本能は、基本的に、肉体的な魅力と目新しいものに対して反応する。それは、不特定多数との関係を促す、生物学的なプログラムなのである。というのも生物学的な視点では、それが遺伝子の交配と種の繁栄に寄与するからである。

愛情がないのに肉体的な魅力で二人の人が結びつく時は、ひと度性的に満たされてしまえば、お互いに性欲が減少していくのが一般的だ。それは、性本能にとってその関係が新鮮でなくなり、最初の頃のように高まらなくなるからだ。

その関係が続くとどういう結果になるかということ、通常は性欲が減退する。二人の性欲が、完全に本能に基づいたものであったからである。セックスの間隔が空くようになり、僅かになる。そして新鮮でなくなっ

たパートナーに興味を失い、他の新しい候補に関心を持ち始める。このような状況が続くと、初期には性本能の陰に隠れて見えなかった魂の類似性のなさや愛情の欠如が際立ってきて、不幸の温床となり、喧嘩や非難の増加となって表れる。この時になって、カップルの愛が終わってしまつて情熱がないと言い始めるのだが、実は初めから愛など存在しておらず、本能が魅惑されていただけだったのだ。

お互いに愛情があれば、性欲は本能ではなく愛の感情によって養われるので、目覚めれば、なくなることはない。

*** 次に物的な便宜による結びつきを話してください。**

それについては、あまり説明を要さない。つまり、物的な利益に基づく結合である。夫婦の一方または両方が、結婚することで、自分が持っていなかった物的な快適性、社会的地位、成功、名声、富や権力など、物的に有利になる何かを引き出せるとする場合だ。

これが動機となる場合は、先の例よりもさらに貧しい結婚となる。性的魅力すら感じず、伴侶には愛しているから結婚したのだと思わせて、愛情があるふりをするのだが、何の愛情もないのは明らかである。

*** そうすると二人が一緒になる理由は、それぞれ異なるかもしれないわけですね。二人とも物的な利便性が動機であるなら、取り繕う必要はないわけですから。**

全くその通りである。夫婦の動機がそれぞれ違うのは、よくあることだ。一方が物的利益で、もう一方が肉体的な魅力である場合もある。

一例を挙げると、美人が好きな冴えない億万長者が、お金持ちになりたいと思っている魅力的な女性とくっつくケースである。双方ともに愛の感情はなく、自己願望を満たしたいだけなのだが、おそらく二人とも自分の意図は隠して、愛情があるように装うだろう。当初はお互いの希望が叶って比較的満足できたとしても、この関係ではどちらも幸せにはなれないだろう。

*** それでは、精神的な便宜とはどのようなものですか？**

二人のうち的一方が、変えるつもりのない自分の利己的な性格な特徴のために、相手の精神的な側面が便利だと思う場合だ。

たとえば、支配的で自己中心的な人には従順で素直な人がパートナーとして好都合で、気紛れな人にはサービス精神旺盛の人が便利、怖がり家には決断力のある人、怠け者には行動派、といった具合だ。

***でも、表面的に正反対の精神的な側面を持っていることは、悪いことではなく、助け合ういい機会になると思いますよ。たとえば、決断力のある人は、怖がり家のパートナーが怖れを克服する手助けをしてあげられるでしょう。**

問題は、性格の違いがあることではなく、自分のパートナーを、その人に愛情があるためではなく、精神的な便宜のために選んでしまうことである。

怖れを克服したいのであれば、精神的な助けを求めればよからう。もちろん、それをパートナーに頼るのもいいが、そのために相手を選ぶべきではない。

こういうケースでは通常、カップルの二人は、精神的な支配関係が従属関係となる。この関係では一人は、相手から愛情ではなく指図しか貰えないので、隷属している感じになる。他方、相手側となる支配的立場の者、あるいは精神的に依存する側の者も、同様に苦しんでいるのだ。その人のエゴが満たされても、自分に愛がなければ虚しく、その関係に満足できないからだ。

*** 今度は、知的面での類似性について話してください。**

同じ嗜好、趣味、興味を共有する二人の結びつきのことだ。たとえば、同じ社会層、同種の仕事、似たような知的レベル、職業的または物的な期待度が同程度、スポーツやパーティ好きなど同じ趣味で楽しめる、などである。

*** 嗜好や趣味を共有して何が悪いのですか？ 僕はそれはカップルにおいては自然なことで、望ましいことだと思いますが。**

嗜好や趣味を共有することは何も悪いことではない。ここで説明しているのは、パートナーを選ぶという決定は知的類似性に基づいてなされてはいけない、ということだ。そうしてしまうと二人は、感情面ではなく、知的面だけで結びついてしまうからだ。

*** 多くの人が、嗜好や関心の類似性はカップルとしての適性に大きく関係していて、適性がありさえすれば愛情も湧いてくると信じていますよ。たとえば、結婚相談所では、お客さんの理想の相手を見つけ出すために、嗜好・興味・願望などの項目の適性テストを行います。それは、そうすることで二人の親睦の可能性が増えるだろうと考えてのことです。**

そうしても、それは知的な類似性だけのことで、相思相愛になるわけではない。感情というものは確率のことなどわかりはしないし、あらかじめ計画もできない。

各人が頭の中で考える「理想的な相手」という枠組みから外れていたとしても、愛情は、湧く時には自然に湧き起こるものである。「理想的な相手」とは、判で押したように、女性にとっては、背が高くハンサムでロマンチックな男性であり、男性にとっては、セクシーで金髪で情熱的な女性である。このようなものは、想像力をかき立てる頭の中の空想であり、愛の感情とは関係ない。もし、愛の感情が確率で決まるのであれば、相似の魂同士が結びつくことなどないであろう。その結合が偶然に起こる可能性はとても低いからである。

知的面での類似性による結びつきは、表面的に上手くいく時期があるのだが、原因を特定するのが難しい内面の虚無感が生じてくる。頭で判断する外部の目には、幸せになるための必要条件が全部揃っているように映るが、幸福になるのに唯一必要となるもの、つまり愛の感情が欠けているのだ。

*** 次は、愛される必要性で一緒になる人たちのことを話しましょう。**

これはよく見られる理由である。一般的には、それまでの人生であまり愛してもらえなかったと感じる人たちや、(今生の以前で)自分が体験したと直感しているものの、今生で出会えていない愛を懐かしむ人たちに該当する。

愛されたい欲求が大変強いため、人から関心を持たれてパートナーにしたいと言われると、とても感謝して、自分の感情を顧みずにすぐに承諾してしまう。通常、これらの人たちは自己尊重能力が低く、自分に魅力がないと感じ、誰からも愛されることはないと思っている。幸せになる権利などないと思っているのだ。

これらの人たちの多くが、極度の愛情不足、寄る辺なさ、あるいは肉体的または精神的な虐待の状況など、困難な幼児期を送っている。当人がまだ自分の力で、抑圧的な家庭環境から逃れることができていない場合には、その耐え難い家族関係から解放されるための安全弁として、パートナーとの関係を利用することがある。

*** ですが、愛される必要を感じることの何が悪いのですか？ それは自然な感情で、すべての人につきものだと思いますし、愛されたいと願わない人はいないと思いますよ。**

愛されたいと願うこと自体は悪いことではない。確かにそれは、すべての魂にとってふつうのことであるし、幸福になるための鍵が愛にあると自覚していることになるので、ある程度の進化レベルにいることの証拠でもある。

問題は、その愛される必要性が強烈であると、自暴自棄や情緒的に盲目になって、心の空洞を埋めてくれる人を早急に見つけたいという焦燥感が生まれることだ。そうすると相手を選び急いでしまい、愛情が芽生える人ではなく、その場の誰をも自分のパートナーとして受け入れてしまう。また、愛情不足だと、情緒的に盲目となって、パートナーをありのままに見ることができない。その人を愛せる期待感から、相手を理想化してしまうことになる。

こういう人たちの関係も、通常は支配関係や従属関係となりやすい。このような人たちの多くが息詰まる家族関係から逃れて、カップルとなった者たちだ。自己主張の強い支配的なパートナーに当たった場合には、従順になりやすく、相手に指図され卑しめられても容認してしまう。

当人の情緒的な盲目、明晰さの欠如、逃避願望などが、以前の暮らしよりもひどいことはあり得ないと信じさせ、未知なるものを選ばせる。だが、新しい生活も、捨て去ろうとしたものと同じかそれ以下という結果となる。そして、より良いものを知らないためにその状況ですら正常であると許容し、元の家庭においてと同様の服従の役を担ってしまうことになるのだ。

時には、多少なりとも原因を知った上で、パートナーを選ぶこともある。それまでの経験と正反対の性格を持った人、つまり優しく、穏やかで、寛容で心が温かく、自分を大事にしてくれるとわかる人を求める。この場合にはその関係は、父と子または母と子といった関係になり、両親から与えてもらえなかった愛情を相手に求めるので、伴侶はパートナーというよりむしろ保護者の役目を果たす。

苦痛な家族関係から救われた人は、苦しい状況から助け出して守ってくれた相手に感謝し、借りがあるように感じるので、何とかしてその償いをしようとする。そして、その謝恩の感情がカップルの愛だと自分に思い込ませるに至るので、相互依存的な関係ができるのだ。

***この最後のケースでは、少なくとも幸せな結末を迎えますね。**

苦悩は少なくともはなるが、相思相愛ではないので、このケースも幸福ではない。少なくとも一方には、ありがたく思う気持ちしかないの、それでは二人とも幸せにはなれない。一人は愛していないことで不幸であり、もう一人は愛されていないから不幸である。

*** 孤独を怖れて誰かと一緒になる人たちも沢山いると思います。孤独への怖れから相手を探す人たちも、愛される必要性、もしくは精神的な便宜からだと考えられますか？**

時には愛される必要性からであり、時には精神的な便宜からである。

孤独を怖れる人の中には、愛される必要性がなく、精神的な便宜を求めている場合がある。特に歳をとると、老年や病気を心配して、人生の最後に身寄りなく過ごすのが嫌なために、自分の要求を満たしてくれて、暮らしを楽に、快適にしてくれる人を必要とする。

だが別のケースでは、確かに孤独への怖れは、愛される必要性の表れである。

*** 今度は、愛する必要性に基づく結びつきについて、お話しください。**

よからう。このタイプの関係では、どちらか一方、または双方に、充分発達した愛する能力があり、それを表現することで、自己充足し幸せを感じようとする。この人たちも、内面では（前世の関係で）情熱的に愛した経験があることを直感していて、今生で出会えないその愛を懐かしむ人たちであることが多い。

愛する必要性と愛する者を見つける必要性が強くなり過ぎると、愛される必要のある人たちの場合のように、愛を感じたいという欲求が自分の感情までを制覇してしまい、相手に対する気持ちからではなく、愛したいという欲求からパートナーを選んでしまう。

*** でも、愛する必要性があることは何も悪くないではありませんか？ 愛する必要性がなければ、パートナーを見つけようとしないので、愛の感情も生まれないと思います。愛の感情を育むメッセージと矛盾していませんか？**

愛される必要性がある人たちの話をした時にも言ったことだが、愛する必要性を感じるのとは何も悪いことではない。君がまさに指摘した通り、愛する必要性というものは、愛の能力と密接な関連がある。

愛する能力が高い者は、沢山の人を愛することができるが、それは誰にでも恋愛感情を抱けるという意味ではない。カップルとしての愛の感情は、誰に対してでも湧くわけではないのだ。

問題となるのは、そういう感情になりたいという欲求から、感じてもない気持ちになろうと自分を仕向けること、つまり、自分の気持ちを強いることだ。愛の関係における感情は強いることができず、自然に起こるべきものである。感情を強いることは、感情を発達させることと別である。ここで言おうとしているのは、無理な感情を持つようとするのは、幸せになれる代わりに苦しみを招くので、良くないということだ。

愛する必要性に取りつかれている人も情緒的に盲目で、愛と愛する必要性とが見分けられなくなっている。恋をしているのだと自分自身に思い込ませるのだが、実のところは、愛を感じようと奮闘しているに過ぎない。しかも、愛の感情だと思っている自分の気持ちに、相手が応じてくれるのかもあまり気にしない。相手もそうだと信じ込むか、そうでなくても全身全霊でその人に尽くせば愛してもらえると自分自身を納得させる。相手は、自分の溢れ出る愛に抵抗できずに、最終的には愛してもらえろと思うってしまうのだ。

*** 僕は、愛するということは、見返りを期待せずに与えることだと思っていたのですが、お話を伺うと、カップルの愛はその例外となるようです。相手にも応えてもらうという、交換条件があるみたいですから。**

それでも、本当に愛する者は、何の見返りも期待しないというのが真実なのだ。愛する人に感情面で応えてもらうことは強要できないし、両想いだったとしても、その気持ちを認めさせることも、一緒になるように強いることもできないからだ。要は、相手の意思と自由を尊重し、自分の心を捧げてはいても、「否」という返事を受け容れる心積もりが大切なのだ。

そうは言っても、カップルの関係において幸せになるためには、双方ともお互いに愛が報われていなければならない。相思相愛でなければ、どちらも幸せになることができない。

*** これまで、愛情ではなくさまざまな異なる要因でカップルになる例を説明していただきました。肉体的な魅力、物的な便宜、精神的な便宜、知的面での類似性、愛される必要性、愛する必要性などいろいろでしたが、これらの動機は独立したものですか、それとも組み合わせることがあるのでしょうか？ たとえば、ある人が相手に肉体的な魅力を感じていて、同時に愛される必要性も感じている場合もあるのか、ということです。**

ああ、もちろんだとも。事実上ほとんどの場合に、幾つかの動機が混ざり合っている。肉体的魅力は、ほぼすべての他の要素と組み合わせる。たまに無関心な人もいるが、生物学的な性本能はすべての人に備わっているからだ。

実際には、魂の愛する能力次第で、どの要因が優先されるかが決まる。

まだ愛を知らないために、それを評価できない未熟な魂であれば、肉体的魅力、物的便宜、精神的便宜、知的類似性、といった四つの動機が、さまざまに組み合わせられて表れることが一般的である。

より進化した魂の場合は、通常、肉体的魅力が愛される必要性や愛する必要性と組み合うことが多い。

そして、中間層では、肉体的魅力、精神的便宜、知的類似性、愛される必要性、の中での組み合わせが起こる。

また時には、これらの動機が同時に出現せず、特定の関係の異なる時期に生じることがある。たとえば、肉体的な魅力から関係を始めても、それに飽きると関係を維持するために、物的便宜や精神的便宜など、他の動機が際立ってくるのだ。

*** それでは、物事が余計複雑になってしまいます。自分の気持ちを分析して、愛の感情と他の要素とを見分けることは簡単ではないと思います。たとえば、性的魅力が愛される必要性や愛する必要性と混ざった場合は、愛と必要性や欲求とを区別するのが難しいことでしょう。**

君たちの世界では、大多数の人たちにとって困難であろう。それは、君たちにはまだ愛の感情が明確ではなく、確固たるものがないからである。だが、進化の道程はそのため、言わば、経験したことから学んで本物とそうでないものを見分けるため、にあるのである。

*** すべての愛の形が同じとも限らないのではないのでしょうか。パートナーのことを大変慈しみ、とても仲がいいのに、セックスの必要性を感じない人もいます。この場合は、どういうことなのでしょう？**

兄弟や友達に感じるような兄弟愛を相手に感じているということで、恋愛ではなく、カップルの愛とはいえない。感情を混同しているのだ。

*** 自分の感じる気持ちがカップルの愛なのかを、どうやって知ることができるのですか？**

言い争いやいざこざがなくとも、完全には満たされずに、自分たちの関係に何か足りないと感じる者は、まだ真の愛に巡り合っていない。類魂同志でなければ、カップルが申し分なく親和することはないのだ。二人の親和力のなさは、感情面、精神面、性的な面など、あらゆる分野に表出し、埋めることのできない内面の虚無感を生み出してしまう。

人生において、類魂との愛を経験したことのある者であれば、それを簡単に識別できる。愛する者を思い出ただけで、魂が揺す振られ、満ち足りた気分になれるからだ。

人生でまだその湧き起こる感情を体験していない者には、類魂を見抜くにも迷いがあるので、霊的な直感を頼りにするしかない。今生での経験がなくとも、相似の魂同士の愛の感情が損なわれることはないので、

再び転生して過去の記憶が一時的に失われてしまったとしても、拭い去ることのできない痕跡が魂に刻まれて永続するからだ。

この感傷的な直観力が、真の愛であるか否かを見極めてくれるものである。

*** しつこくて申し訳ないですが、兄弟愛と双子の魂との愛をどうして区別しないといけないのでしょうか？ 自分の兄弟や子どもを愛してでは満たされないとも言えるのですか？**

自分の相手のことを兄弟のように思い、パートナーとして見ていない者は、それがカップルの愛といえないことをすでに知っているものだ。つまり、子どもか兄弟のように慈しんではいるが性欲を感じない場合や、性的な関係を持って虚しさを感じたり、その関係に全霊を捧げようとは思わずに終わらせることができる場合、その人の感じている愛は兄弟愛なのだ。

*** では、自分がパートナーのことを兄弟のように愛していることに気づいた場合は、どうしたらいいのでしょうか？ その関係を続けるべきですか、終わらせるべきですか？**

幸せになりたいのであれば、自分自身と相手に対して、自分にある感情に対して正直になって、それに見合う行動をすべきだ。どちらか片方に恋愛感情がないと知りつつカップルの関係を維持することは、当人も幸福ではないし相手も幸せにできないので、無意味である。

たとえば望まない性関係を持つことは、苦しみの原因となるが、相手にとっても欲求不満の元となる。その後味の悪さを避けようとして、セックスをしなくなるのであれば、それは兄弟の関係と、一体どんな違いがあると言えるのだろうか？ 要は、その人はパートナーのことを自分の兄弟のように愛しているので、兄弟との間柄のような関係になるのである。自分の兄弟とはカップルの関係にはなれないので、カップルとして、その関係を継続することには意味がない。

*** パートナーを兄弟のように愛すだけで幸せだし、誰もいないよりはいい、と言う人たちもいると思いますよ。つまり、あるもので満足しているのですが、これは正しい振る舞いでしょうか？**

ここで、正しいとか正しくないとかを話してもしょうがない。それより、真に幸福になれるか否かを話した方がよい。そのような状況で諦めてしまって、それで幸せだと思い込んでいる人たちがいるが、実際には違うので、自分を欺いているのだ。

*** パートナーへの恋愛感情がないことを認めても、まだとても愛着があって、その絆を失いたくないがための精神的な葛藤から、相手と別れるというステップが踏み出せない人がいますが、これについてはどうですか？**

連れ合いに男女の愛を感じないことを認めても、必ずしもその人に反感を持つ必要はないし、またその人を人生から完全に閉め出す必要もない。単にその人に対する自分の感情の種類を認識して、人生が自分の気持ちに見合うものになるように行動するだけのことだ。

友情があるなら、カップルの関係の継続を強いることなく、その友情を続けていけばよい。この現実を認めずに、自分の気持ちに釣り合わない関係を維持しようと無理すると、相手に対しての拒絶感が生まれてしまう。

*** 恋愛感情がないことを認めている人は大勢いますよ。自分としては別れたいのだけれども、相手を傷つけないので、関係を続けていく方がいいのだと言いますが、この点についてはどういうご意見ですか？**

愛していなければ幸せにすることはできないので、関係を長引かせれば、その人を傷つけてしまうだろう。実際は違うのに、パートナーとして愛しているのだと相手に思わせることは、相手を騙していることになる上に、関係を長引かせれば、相手は気持ちに本当に応えてくれる人を見つけることができなくなってしまう。そういう愛情の絆がない状況において、関係を継続させることは、破局を迎えるよりもダメージが大きい。それは世間の目を気にした虚偽の結びつきであり、双方に苦痛をもたらす無理のある関係である。

*** これはカップルの問題なので二人が同意して決断する必要があると考えて、相手が関係の精算に反対ならば続けるべきだと思っている人たちもいますが、的を得ているでしょうか？**

いや、二人のうちどちらか一方が関係を続けたくなければ、解消するには充分だ。パートナーがその決断に合意しているかどうかは関係ない。個人の自由意志の侵害となってしまうので、伴侶といえども、関係の継続を強いることはできないのだ。

その論旨は多くの場合、自分から関係を終わらす勇気に欠け、相手に切り出してもらいたいという期待が反映した言い訳に過ぎない。

*** そうは言っても、恋愛感情がないから関係を終わらせたいと相手に告げると、相手が非常に悪く受け取って、何が何でもその関係を続けさせようとする場合がよくありはしませんか？**

確かにそうだ。現実を認めようとししないのだ。その関係が楽で慣れているので、自分の生活に変化が起こるのを怖れてしまうのだ。未知の良いことよりも既知の悪いことの方がまし、といったところだ。

その人の受けた教育も大きな影響を及ぼしている。伝統的な教育を授かった場合には、カップルが崩壊することは、特に結婚の契約が介在しているケースでは、自分の評判に傷がつく不名誉なことと見なすからだ。

また、愛を装ったエゴ的な感情である執着や所有欲に冒されていると、パートナーのことを所有物だと見なす傾向にあるので、自分の持ち物を失うことを受容できない。幸せではないが、これまで要求が叶っていたせい、自分に属すると考える馴染みのものを手放す気がない。

嘆かわしいことだが、執着があるせいで、愛情の地位の変化を受けられる気のある者はごく僅かしかない。つまりふつうは、パートナーから友達にされることを面白く思わず、立場の変化を拒絶や侮辱だと捉えるのである。相手の自由意志を尊重することができないので、犠牲者を装ったり、言いくるめたり、脅したりして、関係の継続を強要する。挙句の果てには、元のパートナーに多大な肉体的かつ精神的な苦痛を与えることさえあるのだが、それを見ても相手をほとんど愛していなかったことは明らかだ。

多くの場合、元パートナーたちはそうされると、精神的、肉体的に攻撃されないように、一切のコンタクトを断つ羽目になり、一時は自分のパートナーであった人に二度と会いたくないと願うほどになる。

*** 今のお話から、パートナーの暴力的な反応が怖いために別れる勇気が出せない、という別のありがちな状況が思い浮かびます。関係を切れば、命が危ないと怖れる人さえいます。**

そう、嘆かわしいことに君たちの世界では、感情における自由があまり尊重されていないので、多くの関係が愛に基づくものではなく、刑吏と犠牲者とが一緒に暮らす、支配－従属関係となってしまう。そういう場合に、抑圧されている被害者が本来のパートナーに感じる気持ちは、愛ではなく怖れである。

自分から別れを切り出したら、情け容赦なく猛追されると知っているので、恐怖から関係を切る決断を取ることができなくなる。しかも、加害者は多くの場合に、自分の犠牲者に心理操作をし、まだ愛されていると信じ込ませてしまうので、女性の中には別れることに罪悪感を感じる者もいる。

*** 性暴力の件数が増加したことは、家庭内での男性の女性に対する暴力が増えたことと関係しているのでしょうか？**

いや、暴力や乱暴は以前から、今と同じかそれ以上にあったのだが、夫が妻を支配しても法や社会規範で擁護されていたので、女性は従属の足かせを壊す勇気がなかったのだ。現在、性暴力のケースが目につくのは、特に女性を保護する法律が存在している国々において、搾取や虐待は許されないという社会意識が高まって、加害者から逃れる気概のある勇敢な女性たちが増えたからだ。

虐待する側は、引き続き被害者を抑圧するのが不可能だと、拘束しようとして、より過激な行為に走り、殺害に至ることもある。

*** 自分の夫やパートナーに殺されるのを怖れて、関係を切る決意ができない女性がいることは理解できます。そういう状況の時には、どうするべきなのでしょう？**

その関係を継続すれば、生きながらも死んでいることになる。その人の心の中では、そのように暮らすことは死よりもひどいことである。その試みの中で命を失ったとしても、虐待する者の横暴に屈して一生を棒に振るよりは、幸せになろうと自由を求めて闘った方がよい。

誰にでも自由で幸せになる権利がある。自分自身の人生と感情に関して、自分以上の決定権を持つ者は存在しないのである。

*** このような虐待の状況から、霊的には何が学べるのでしょうか？**

このような試練は大変過酷であるものの、感情の自由のために闘おうとする魂が勇気と一貫性を獲得するのに役に立つ。そして、感情における自由の権利を剥奪することは、人に最大の苦痛と不幸をもたらす原因となるので、誰からも奪ってはならないと気づかせてくれるのだ。

*** 中には、恋愛感情はないけれども、自分のパートナーに一度もひどいことをされたことがないので、別れようとは思わない、と言う人もいますよ。口論もしたこともなければ、暴力を振るわれたこともない、という礼儀をわきまえた関係のことですが、これについてはどうですか？**

往々にして、二人の関係を終わらすには、肉体的あるいは精神的な暴力がある、または相手の（麻薬、アルコール、ギャンブルなどの）中毒症により正常な共同生活が台無しにされるなど、正当化し得る不快な原因があるべきだと思われる。

虐待されていないければ関係を切る筋合いはないという意見の人たちは、宗教的な伝統教育を受けていることが多い。そういう教育では、相手の暴力が唯一の離婚の口実として認められるので、双方に夫婦の愛情があるかないかにかかわらず、その関係を一生継続すべきだと感じさせら

れてしまう。しかしながら、それは違う。別れるには、カップル同志が愛し合っていないだけで充分である。

*** そう断言することは、結婚の破棄は聖なる法律を破ることだと考えている人たちをびっくりさせると思いますよ。ほとんどの一神教の宗教では——カトリック教会を含みますが——離婚に反対ですよ？**

多くの宗教は離婚に反対だが、当人の意志に反して関係の継続を強いることは「魂の法則」の中の、「自由意志の法則」に違反することになるのだと言っておこう。

愛がなく空虚なのに、怖れからか、その方が楽だからか、あるいは、離婚すれば婚姻非解消の宗教戒律に違反して神に背いてしまうと信じて、愛情のない夫婦関係を課し続ける人びとが大勢いるのを見ると、大変悲しく思う。結婚を一生続けるように人間に要請するのは神であると多くの人に信じ込ませたせいで、愛のない関係から生まれる苦悩と引き換えに、「天国への切符」を手にする事ができると信じる人もいる。

だが、それは違うのだ。自分の感情に従って生きることを放棄した人には、何の霊的進化もない。神が義務付けるのではなく、その人を強要するのは、当人自身か、社会規範か、教わった宗教戒律である。婚姻非解消を要求するのは神でも高次の霊性でもなく、感情までを売買の対象物とする、エゴにどっぷりと浸かった人間の手による法律であることをはっきりさせておかなばならない。

*** 天の戒めでないのなら、婚姻非解消という概念はどこで生まれたのですか？**

人間の利己的で物質主義的なメンタリティーは、何もかもに値をつけ、ありとあらゆるものの所有権を決め、それを自分自身の命よりも大事にして、そのために殺したり殺されたりしてする。君たちは、すべてが売り買いできるものと決めつけている。不可能でさえなければ息を吸う空気や太陽の光線でさえも独占し、「これは私のだ！」と主張できるほどの野心を持たない者たちに、目の玉が飛び出るほどの値段で売りつけることだろう。

それと同様に君たちは、個人や意志や感情さえも、お金で買えると思っている。結婚と呼ばれる契約書にサインすることで、ごくふつうの商取引をしていると思っているようだ。それによって、ある者は、人の意志と感情を買い取ったと思ひ込み、他の者は、契約によって自分の意志や決定能力、自由と感情とを伴侶に譲ることを義務付けられていると信じ込む。

この利己的な錯乱の極めつけは、神が契約の証人にされてしまっている点だ。そのため、自分自身や他の人たちの幸せが踏みにじられようが、何が何でも契約を貫かねばならないと思込むに至った。そうでないと、銀行の借金を払い戻せないと資産を没収されるように、死後にすべての「財産」を剥奪されることになるからだ。言うておくと、これは全部、人間のエゴによってでっち上げられた大嘘である。

神は、一人ひとりに感情や思考における完全な自由を与えてくれているので、感じることや考えることの自由のために闘うことは、いかなる天の法則にも背くこととならない。どんな手段や状況であろうと、自由でいる権利や、自分自身の人生や感情に関して決める権利を、君たちから奪える者などいやしない。まして、神の名をその口実にすることなどできやしない。

*** これを、婚姻の破棄に傾倒した話に受け取る人もいることでしよう。**

認めがたいかもしれないが、お互いの愛情に基づかない夫婦は、実際には夫婦として存在していないのだ。一生にわたり、署名入りの契約書を維持することができ、世間には仲の良いイメージを作れたとしても、それは表面上の結末に過ぎない。上辺だけの世間体は取り繕えたとしても、それぞれが心の中では実情を知っているのだから、自分自身の人生の虚にされた気がして、苦々しさ、空虚感、悲しみを噛みしめ、不幸であることだろう。さらに、それを誰にも知られまいとすると、独りで苦しむこととなり、余計に耐え難いものとなる。

*** 人には別れたければ別れ、離婚したければ離婚する権利があって、それが神の怒りに触れることはない、と強調するのに一生懸命なようですが。**

それは、このことが多くの人にとって深い悲しみの原因となっているからで、それを変える必要があるからだ。人には誰もに幸せになる権利があり、幸福を妨げる聖なる法律など存在していないことを知るべきである。霊界は全くその逆に、生きているすべての人が幸せになれるようにと願い、幸福への道を発見できるように可能な限りの手助けをするのである。

その道程で出現する障害を取り除く手伝いをしたいのだが、地上の法律は幸福への行く手を阻む巨大な岩のようだ。しかも、君たちはその岩が神によって置かれたものと思込んでしまっている。もうこれ以上長く、この状態を容認しておくことはできない。

*** カップルの関係を合法化するためには結婚すべきではない、ということですか？**

靈的な視点からは、二人の間の相互愛だけが真の結びつきだとされており、署名済みの結婚証書の有無には全く関係がない。

君たちの物質界では、配偶者や一族の子孫を保護するために、たいてい契約にサインを交わす必要がある。たとえば、どちらか一方が死亡した際に遺族年金を受け取れるためや、故人の伴侶が身内の者に家を取り上げられたりしないためであり、これは理解し得ることである。だが、これは物的に有効であるに過ぎず、その以上の価値を見出そうとすべきではない。

つまり、結婚の繋がりを相手の自由を束縛する口実に利用すべきではないし、相手が別れる決意をしたら絶対に拘束したり恐喝すべきでない。靈的な観点からは、自由意志の法則に反する行為となるからだ。

*** 恋愛感情がないにもかかわらず、夫婦の関係を維持しようとする動機の話に戻りますが、別れた場合に物的な支えを失うことを怖れて、住まいと生計を保証してくれる生活を続けようとする人がいますが、そういうケースについてはどうですか？**

実際には物的な利便性を重視する結びつきであることを反映している。当初はそれが結婚の動機でなかったとしても、今は継続の口実となっている。このような人たちは、自分の感情の自由か、それとも安全性と安楽か、そのどちらに価値を置くのかを決める必要がある。

そういう理由から夫婦関係を維持することを決めれば、物的には何の不自由もないだろうが、愛がない暮らしとなるので、感情面では空っぽである。関係を続けるのは、愛の感情を大事にしない物質主義の人であろう。

だが、何にも増して幸せになることを望む人であれば、物的にはゼロからのスタートとなろうが、怖れに打ち克ち、喜んでそうするに違いない。感情における自由を回復することができるからである。

*** 二人の間に子どもがいる人たちの多くが、もう一つの理由として、子どもを守るために別れないと言います。そういう人たちは、少なくとも子どもが成人するまでは、我慢したいそうです。本人の幸せよりも子どもの幸福を優先し、子どもへの愛から正しい行動を取っていると思っています。カップルや夫婦が破綻すれば、子どもに感情的なトラウマを与えると考えて、それを回避しようとしているのですが、これは正しい判断でしょうか？**

いや、そうではない。離婚する時には、子どもと離縁するのではなくパートナーと別れるのであるから、それは誤った結論である。両親が子どもを愛しているならば、一緒にいなくても子どもを愛し続けられる。

「子どものために我慢する」という言い訳は、個人的な幸せよりも家族の結束が優先される伝統的な宗教教育を授かった人たちの間によく見られるものだ。

むしろその関係を長く続けると、反対に、子どもを苦しませてしまうことになる。愛し合っていない二人と一緒に住もうと無理をすると、周りまで感応して不幸せになるので、子どもの情緒には否定的な状況となる。子どもたちは多くの場合、両親の喧嘩や口論に居合わせて、親の不快感や苦悩を感じ取る。そして、これこそが子どもたちに感情的トラウマをもたらすのである。「あなたがいなければ離婚していた」と言う親もいるので、両親が不幸せなのは自分のせいだと感じながら成長する子どももいる。こういうケースでは、親は自分の意気地のなさを子どものせいに行っているのだ。

***でも子どもたちにしてみれば、両親が別れたら、生活が激変しますよ。両親の離婚が、大勢の子どもたちにとってトラウマだというではありませんか？**

子どもが小さい場合は、まだ十分な知識がなく教育の枠付けに縛られていないので、両親の破局自体は何の感情的トラウマともならない。自分の生活が変わっても、双方の親と会うことができ、両親も子どもに対する愛を示し続けることができるのなら、子どもはゲーム感覚で変化を捉える。

幼い子どもを最も苦しめることは、自分が武器にされて離婚の原因となる夫婦喧嘩の渦中に投げ込まれることと、夫婦間の争いやのしり合いや脅し合いを目にしなければならないことである。したがって、それらを回避できるのであれば、離婚する場合でも、子どもたちのトラウマを避けてあげることができる。

***子どもが大きい場合はどうなるのですか？ 大きい子は大半が原因をわかっていて、自分の生活が変わるのを嫌がりますが。**

離婚は多くの場合、何年も我慢した挙句に起こるものだ。自覚のあるなしにかかわらず、その間に子どもたちに伝えられてきたメッセージは、個人の幸せよりも家族の結合が大事である、ということだ。それゆえ、子どもたちはその視点から起きている物事を解釈するようになる。両親の破綻は、それまで正しく善いと信じてきたことと反対に見えるので、否定的に受け留める。現実を子どもたちがを受容できるためには、それ

までの教育を打壊して、今度は、感情の自由と個人の幸福が最も大切であり、何人も絶対にそれらを放棄すべきではない、とわからせてあげる必要がある。

*** 幼児期を通して別の規則を教えられてきた子どもが、思春期近くになって、急にそういうことを受容するのは困難だと思いますよ。しかも、当人自身の親に教わったことですから、父親や母親が理性を失ってしまったとでも考えるに違いありません。**

それは子どもがどれほど成熟しているかによる。他の子よりも理解力のある子どももいる。両親よりも現実を自覚していて、新たな一步を踏み出すように親に助言して、後押ししてくれる子どもたちもいる。最も進化した子どもが一番理解を示し、受け容れるのも上手い。授かった教育よりも、その状況を理解できる進化のレベルがあるからである。

だが、その時に受け容れ難かったとしても、将来大人になって自分も同じような状況に置かれた時に、許容することができるであろう。つまり、将来カップルの関係を持って恋愛感情がないことに気づいた時に、その関係を続けるべきか終わらせるべきかの決断に際して、この世の何を引き換えにしようと、自らに継続を強いるべきでないと明確に自覚できるということだ。両親の例から、自由になるのは悪いことではないと知っているからだ。幸せになれない関係を断つ際も、もっと確信と勇気があり、罪悪感が少なからう。

しかし、その反対の見本であれば——両親が気持ちに反して共同生活の継続を課したならば——当人もその例を真似て、親と同じ不幸な人生を繰り返すであろう。

*** これまで私たちが話してきたことをまとめると、カップルの愛は兄弟愛や親子愛よりも大切な愛であるというメッセージを伝えているような気がしますが、カップルの愛を兄弟愛や親子愛と分け隔てするのは、利己的ではないでしょうか？ 違いを設けることは、無条件の愛の概念と矛盾していませんか？**

どういう根拠でそう言っているのかね？

*** おそらく、イエスの示した手本だと思います。イエスは、カップルの愛についてだけ特別に話したことはないですから。**

情報の大元が、イエスの言葉がほとんど反映されていない教会の福音書なのだから、君にはそれはわからない。だが私が、理解力のあった身近な者たちに、イエスが男女の愛についても語ったことを伝えよう。イエスは彼らに、完全に似通った相互の愛のみが二人を結びつける絆であ

り、カップルになるか別れるかはそれぞれが完全に自由に決めるべきである、という教えを説いた。

この言葉は今では、ふつうの理性がある人にはもっともで、何も特別に聞こえない。しかし、当時の人のメンタリティーは理解に欠け、感情面の自由を尊重することなどゼロに等しかった。一夫多妻制は頻繁であり、大半の結びつきが愛のない取り決められた結婚で、夫婦のどちらか一方または双方が、当人の意志を考慮されないまま強要されて結婚していた。

*** 今日においては、取り決め結婚は無理強いであるとわかっている人が多く、この慣習に反対しています。**

そう考えるのは、ある程度の個人の権利と自由を守るために法整備が進んでいる西洋社会においては当たり前かもしれないが、今日においてさえ、取り決め婚の慣習は多くの国で一般的だ。そういう諸国では、通常「宗教的」性質を帯びた指導者や体制によって奨励され制定された法律が、「神の名の下に」年端のいかない女兒をも大人と結婚させることを容認して、女兒・女性たちへの肉体的・精神的な搾取や性的な虐待を法的に庇っている。そうして、この搾取的習慣に従わなければ、穢れた不純な人であり、神の計画に背いたと思込ませている。それにもかかわらず、女性たちが非人間的な状況から逃れようとする時には、彼女たちを犯罪者扱いして、拷問して残酷に殺してしまう場合さえある。

取り決め婚は制度化された売春の一形態だと知ることだ。それは、表面的には「潔白」であるが、当人が選んでもいない人と一緒にさせて、性的な関係を持つことを強要するのであるから、自由意志、中でも感情における自由に対する重大な侵害である。

*** それにしても、現在では少なくとも西洋の国々では、大多数の人びとが自由とは何かを知っていると思います。そして個人の自由は法律によって保護されて、離婚する権利が認められており、その妨害をする人たちは罰せられる筈ですが、そうではないのでしょうか？**

確かにその通りだ。そして、これは無数の犠牲や闘いを経て獲得された、大変大きな霊的進歩の象徴なのだ。残念なことに、宗教権威者たちはこの動きに抵抗するだけで、またしても、人類の霊的な成長に寄与する代わりに、できる限り邪魔をして遅らせようとしたのである。中でも最も嘆かわしいのは、神の名がその口実に使われたことである。宗教的な慣習やルールは社会に深く根ざすものなので、法的に禁止する力はなくとも、精神的な影響を与える場合があるからだ。

事実上取り決め婚が見られない、君たちの今の時代、現在の社会にあっても、まだ愛のない結びつきが沢山あることを知っておきなさい。しかも、愛の欠如に気づき離婚したいと思った人がいても、先ほど話したような宗教的な慣習のせいで、それがとても困難なのだ。

***カップルの愛は利己的で無条件の愛と矛盾するのではないか、という先ほどのテーマに戻りましょう。それがイエスの教えでないとしても、少なくとも教会はそのように解釈しました。それはイエスが言ったとされている「自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、そのうえ自分のいのちまでも嫌悪してわたしのもとに来るの でなければ、わたしの弟子となることはできない。」という一節（ルカによる福音書14章26節）によるのだと思われます。**

教会はこの一節を、隣人を無条件に愛するためにはパートナーや家族とそれ以外の人たちとを分け隔てしてはいけない、という意味に取ったのでしょう。パートナーや子どもへの愛に囚われたままでは、他者に尽くすことができなくなりますから。僕は、カトリック教会はそのために、聖職者に貞潔を誓わせ独身で通させたのだと思うのですが、間違っているのでしょうか？

君が取り上げたのは、実際にイエスが言ったことの目も当てられない悪訳だ。文中の「嫌悪する」という言葉を「執着をなくす」と置き換えてみれば、彼が言いたかったことがわかるだろう。イエスの意味することは、（彼にとっては）無条件の愛に至るためには、家族内でよく見られる執着心と所有的な愛に打ち克つ必要があるということだ。このような利己的な愛の様相は、往々にして人の自由を束縛し、隣人への無条件の愛の使命を果たそうとする際の制約となってしまうからだ。

それゆえ、イエスの言葉として解釈されていることは、事実にも全く反している。パートナーとの愛を経験したことの無い者は、無条件の隣人愛を体得できないと言っておこう。パートナーへの愛の感情は、人が愛のために闘う時に最も強いものである。そしてこの感情が、人生を生きていく上で、支えとなってくれるのだ。

イエスのように、他者のために尽くす使命を果たす場合には、内面の力が不可欠だ。イエスは、何を愛しているか、誰を愛しているか、なぜ愛しているかに確信があったので、内に力を秘めていた。霊界から派遣される本物は皆、類魂との愛を感じ経験したことがあり、その愛から、任務を成し遂げるための力を得ているのだ。この感情を否定すれば、虚しい限りで、勇気と意志力に欠け、そのようなミッションにつきものの障害に直面すると意気消沈してしまうのだ。

*** 僕はそういう存在たちは神への愛に支えられていて、それで充分なのだと思っていました。**

神への信心は力を与えてくれるが、人間の進化段階にいる者は自分と同じ者、つまり類魂の愛を必要とするのだ。人に幸せをもたらし、あらゆる面で満たしてくれるものをなぜ拒絶せねばならぬのだ？ 一体、何が問題なのだ？

パートナーとの愛を放棄する者は、進化するどころか、魂が進化の道程で滞ってしまうことを告げておこう。この件に関する君たちの偏見、つまり、男女の愛を放棄すればさらに進化できて隣人愛の能力が高まると考えることは、人間の意志を服従させるために教会が作りあげたもので、「魂の法則」に反している。なぜなら、感情における自由の邪魔をし、幸せになることを阻んでいるからだ。

*** 隣人を助ける仕事に集中するには、パートナーが邪魔になる場合があるのではないですか？**

仕事の邪魔になるのは、パートナーがいることではなく、執着心のせいだ。どちらか一方が他方の自由を束縛できる権利があると思ひ、自分の所有物だと見なして拘束したり、他の人たちをパートナーの注目を奪い取った敵だと見なす場合である。これは、自分と似ていない相手と一緒になった場合に、よく起こることである。類似性に欠けていることから無理解となり、人生の意義に関する意見の相違が出てくるのだ。

類魂同士のカップルでも、エゴ的感情が介在するとそういうことになり得る。それはほとんどが執着心であるが、怖れなどの別のものもある。一般的には、愛する者が苦しむことへの怖れや、危険を伴う使命に身を奉じる場合にその人を失う怖れである。

だが、パートナーが似通っていて、怖れやその他のエゴの形態を克服している場合には、何の障害ともならない。全くその反対に、一緒に転生できれば、二人が同じように集中して共に使命に従事するので、より深い取り組みとなる。両者共、お互いの愛に支えられ励まされ、それによって、決意して進むことにした道のりの辛さも和らぐのだ。

*** でもイエスには存命中、誰もパートナーがいなかったようですが、隣人を愛し使命を果たすには支障がなかったのではありませんか？**

このことは以前に話したであろう。イエスも皆と同じだ。彼にも相類の魂はいるものの、同時期に一緒に生まれてはこなかった。だがそれで彼女とのコンタクトがなかったわけではない。イエスのような進化段階にいる存在にとっては、愛する者が同時に転生していなくても、それは決定的な障害とはならない。彼らは高い能力と感性を持っているので、

物的な次元から比較的簡単に身を解き放つことができ、霊的な次元で類似する存在たちと出会うことが可能なのだ。

*** でしたら、特定の人たちを他の人たちよりも愛することは利己主義にならないのですか？**

君は類似性の相違に過ぎないものをエゴだとしている。似ている者を愛する方が、似ていない者を愛することより常に簡単だ。類似性に差がある存在たちも同じ強さで愛することができるのは、大変進化した魂だけだ。私は、無条件の隣人愛に達するためには、初めに、類魂との愛を経験する必要があると言っておく。その愛が他者への愛を養う力であるからだ。

したがって、他者を無条件に愛することを望みながら、パートナーとの愛を抑制するか否定する者は、絶対に真の隣人愛には到達できないのである。内面を潤してくれる源がなければ、他者に愛を与えて少しでも感謝されない目に遭えば、たちどころに空になってしまうからだ。

進化の十段階目に到達するには、一段階目から始めて、中間レベルを超えなくてはならないのだが、君たちは、一段階目もよくわからないまま第十レベルに着きたいと思っている。双子の魂のように、似通った者への愛を否定している現状で、自分と似ていない者を、一体どうやって愛するつもりだろうか？

*** ですが、最初から真の愛に出会えてそれを見分けるのは、そんなにたやすいことはありません。**

見分けるのが簡単でないからこそ、恋愛感情がないことを自覚したら、自分に方向転換を許してあげなければならない。本当に悲しいことは、愛のない結びつきではなく、愛がないと気づいてからも解放を阻む地上のしがらみを作って、無理やりそれを継続させようと頑張ることだ。

*** 若者の方が、誰と一緒にいたい、いたくないかを決めるのは自由だとはっきり知っていて、続けたくない関係であれば、それほど悩まずに断てると思いますよ。**

そう、その通りだ。今の若者は、特に西洋諸国において、それほど抑圧的な教育を受けていないので、より自由である。特にもっと性的な自由を謳歌していて、ある人と性関係を持っても、その人と生涯共にすることを義務付けられるわけでない、と知っている。このこと自体はいいことだ。

若者の問題は、望む時に関係を切れるかではなく、真の愛をどうやって見つけるかである。大多数が愛とは異なる理由で、一緒になってしま

っているためだ。彼らの人生にはより大きな自由があるのに、感情を育む好機として利用されていないのだ。

***では、どういう理由で一緒になるのでしょうか？**

特に青年期に多いのが、肉体的な魅力と知的興味の類似性による結びつきだ。魅力的であることと一目置かれることを何よりも重視するので、性的魅力のある人や、有名だったりお金を持つ人がパートナーに望まれやすい。

肉体的な魅力のある若者は、そのありがたい身体のお陰で候補者に欠かないことに満足していて、自分も肉体美で相手を選びがちである。このような関係は、通常、はかないものである。性本能が満たされるや相手に興味を失い、より新鮮な関係を求め出す。だが愛のない性行為は、感情ででしか満たすことができないものをセックスで満たそうとするので、感受性の強い者の心に虚無感を生み、そのため、多数の若者が深いうつ状態に陥るなどの代償を支払うことになる。

一方で、魅力がない若者も同じものを求めるが、自分にはない肉体美しか評価されないのが、望むものを手に入れるのが難しく、虚しい努力に失望する。自分の外見にコンプレックスを抱き、引け目を感じ、パートナーを見つけられる可能性はほとんどない、と思うものだ。ルックスのせいで、コンプレックスを持って自虐的になると、よりスリムになりたいとか魅力を増して好かれない、などの願望で沈み込んでしまったり、拒食症や過食症などの重い摂食障害を招く。

***若者はもっと自由な時代に生まれているのに、なぜそうになってしまうのでしょうか？**

今は性的にはより自由であるが、まだ感情の自由がないのだ。だから、感情の抑圧に打ち克つ必要がある。

君たちの教育の仕方は、以前として物質主義的で、精神性に欠け、子どもの感情面における教育がまだ不十分である。愛の感情を発展させながら幸せを追求せよ、と教えることが一度もないし、愛に価値を見出すことも、人生を霊的な視点で捉えることも教えない。

反面、子どもの頭脳や知性を伸ばそうと一生懸命で、将来職業に就くために必要な知識を与えている。学校の授業教育とはそういうものだ。学校外では、家庭で経験することも、マスメディアや交友関係が教えることも、幸福は虚栄心を満たすことで獲得できる、というものにつきる。つまり、他の者よりも秀でている肉体的魅力、知性、成功、名声、権力、お金などの表面的な資質を重視するように教育している。

多くの若者が、満たされにず虚しく思える人生から逃れる手立てとして、気紛れや快樂の充足、娯樂、愛情のないセックス、ドラッグなどに逃避している。感情で満たされるべきことを快樂と娯樂で埋めようとするが、愛がないので心が沈む。大勢の若者が苦しんでいるのは、虚栄心を満たす願望に取りつかれているか、愛の感情に対する感性が抑圧または否定されているせいだ。人生の意義を見出す必要があるのだ。

現代の若者たちは、人生には気紛れや快樂を満たして楽しむ以上の意味があると理解する必要がある。人生を真に充足させるためには、完全に自由に、感情と靈性とを育てて味わう必要があるのだ。こうして初めて、幸せになれるのである。

*** 若者たちが消費主義、世俗主義、不特定多数とのセックスに傾倒する原因は、昔の道徳観を失ってしまっていて、靈的に後退してしまったからだと考える人たちがいますが、これは本当ですか？**

いや、すでに話した通り、内面の虚無感から逃れるために物質主義へと走るのだ。過去においても、物事が今以上によかったわけではない。以前の若者たちが今日のような行動を見せなかったとしたら、それは今よりも価値観が高かったからではなく、もっと抑圧されていたせいと経済的に困窮していたからだ。

宗教的な潔癖主義は性的な自由を押し潰し、人目を忍ぶ行為に貶めた。かつての若者たちは、感情的にも性的にも自由がなく、宗教的な厳格さの前ではあらゆることが罪だとされて、抑圧されて怯えながら暮らしていた。以前は性的な関係はほぼ完全に禁じられており、夫婦の間でなければ認められなかった。また、大半の結婚が愛のない強いられたものだったので、性体験は多くの人にとって耐え難く、トラウマを伴うものであった。

社会的な体面を維持する外側の顔と、安全弁代りにタブーや禁制だらけの生活へと逃れる隠れた顔との二つを持ち、二重生活を送っている人も大勢いた。二つのモラルで行動するやり方は、現在に至るまで続いている。特に抑圧的な教育を受けた年配の人は、人から言われることを気にして、二つの顔を持つのに慣れている。

愛の法則から見たカップルにおける不実

* カップルにおける忠実と不実についてはどうお考えですか？

義務に対して忠実になることもできるし、愛情に対して忠実になることもできる。霊的には、愛情に対して誠実であることしか価値がない。

* それは、はっきり言うというのでしょうか？

パートナーとの関係で二人に愛情も類似性もない場合は、気持ちではなく、強制された約束のように、義務感から誠実であろうとする。だが、本当の愛があれば、忠実であろうとして努力しなくても、自然にそうなれるものだ。

君たちは、司祭が判事の目で署名をした結婚と呼ばれる契約は重視しているが、夫婦の間に愛が存在するかどうかは軽視している。だから、夫婦に愛がない場合であっても、あらゆる婚外交渉を——そこに真の愛が存在しようとも——非難する。そして、夫婦関係における不義をとにかく言うが、霊的に存在する唯一の不実は、感情における不実であると知らねばならない。

別の人に恋愛感情を抱きながらもその気持ちを断念し、それが正しく善いことで天の掟と合致すると自分に言い聞かせるか、あるいは人から言いくるめられて、生涯にわたって愛のない結婚生活を送る人もいる。そういう人は、司祭が結婚式の日に厳かに言った「神が結び合わせたものを引き離してはならない」という誓いを守るために自己を犠牲にしたので、極めて不幸であるのだが、他人からは申し分のない道徳心とふんだんな徳を持った聖人のように見なされる。

しかしながら霊的な視点では、愛の感情に対しての忠誠心しか霊的な価値がないので、違った見方をされる。そういった人たちは、彼らの社会規範や慣習上は、非の打ちどころのないイメージであるが、自己の感情に対して不実であるため、霊的進化においては停滞してしまっている。そのため、霊界に戻れば無意味な自己犠牲を払ったことに気づくだろうし、その次の転生では、今生勇気がなくてできなかったこと、つまり感情のために闘うべく、戻る必要があるのだ。

一方、自己の感情をおざなりにし、自由に愛して幸せになろうとする人を非難することに悦びを覚え、強いられた結婚のしがらみに囚われて不幸になると満足するような、他者の感情を抑え込んでしまう者たちは、以後の転生においては、彼ら自身が、同じように利己的な者たちの抑圧的な態度の犠牲者となろう。

その一方で、自己の感情のために闘って愛する者のそばに居るために、無理解・屈辱・恐喝・肉体的または精神的な虐待を受け、所属する社会や共同体、そして家族から不貞・不実・不道徳とされた人が、実は真に感情面で成長をしている人なのである。その人が、「魂の法則」の「愛の法則」と本当に調和している人であり、物質界で苦勞して獲得した真の幸福を、靈界で味わうことができる人なのである。靈界に行けば、もう何の障害もなく、感情を自由に表現できるからだ。

*** まだ理解できません。例で示していただけると、よりはっきりすると思います。**

よかろう。愛していない男性と結婚しているある女性が、別の男性と愛し合っていて、その人と一緒になりたいと思っているとしてみよう。そして二人の男性が共に——この場合は夫と愛人ということになるが——、その女性に性関係を求めているとする。この場合、君たちの世界の貞操の観念では、愛人と性関係を持つことは、夫に不貞を働くことになるので、悪いことだとされる。だが、夫とは性関係を持ち愛人とは持たないという反対の決断をすれば、彼女が愛しているのは愛人であり夫ではないので、自分の感情に対して不実であることになってしまう。

*** さっぱりわかりません。それなら、婚外関係を持つのはいいことなのですか？**

思っている以上にわかっている筈だ。だが、疑問が残らないように説明しておこう。靈的には、地上の契約には人間が付与する効力以上の拘束力はないのだ。つまり、婚姻契約の履行のために——いかなる他の理由であろうと——誰かを愛するように強要されることも、その人への忠誠を強制されることもないのだ。

実際には存在しない愛情があるふりをして、相手を騙すことが間違いないのだ。自分の気持ちに正直になって、その通りに行動するのが公正だろう。先の例においては、妻は夫を愛していないのだからそれを夫に説明して、隠すことなく愛する人と心の通う関係を築くために、愛のない関係に終止符を打つのが、理にかなっているだろう。

一緒に婚姻届を出した相手やパートナーになる約束をした相手に恋愛感情がないことを知りつつ、便宜や必要上、または罪悪感や世間の反応を怖れるがために、関係を維持している人もいる。そのことについては、もう充分話したであろう。

一方、誰を愛しているかを自覚しながらも、怖いのか楽だからか、愛する者と一緒になるために闘わず、苦しまずに済むようにその想いを抑圧して否定する方を選び、現世的に快適な関係に甘んじている者もいる。

だが、どうしても、類魂との相愛という本質的な要素が欠けているので、充足できないのである。世間体を繕った生活をしているが、内面は虚しく、苦悩を押し殺している。

自分の気持ちに正直になって、心の想いを反映させた人生を生きることだ。そうすれば、不毛な苦しみを避けることができる。愛の感情のために闘う勇気を持つのだ。それが唯一、努力し甲斐のあることだ。

***でも、自分の気持ちのために闘おうとしても、事情があってその目的を遂げることが不可能だということはありませんか？ 先ほどの例だと、もし夫が別れることに承知しなくて、関係の維持を妻に強いたらどうなるのですか？**

実際のところ、男性側が関係を断つことを認めないために、元夫や元パートナーに殺害されてしまう女性がいますよ。あるいは、自国の法律で離婚が禁じられていて、夫を捨てた妻に死罪が言い渡される場合などはどうしますか？ そういう女性にはどんな選択肢があるのでしょうか？

確かに多くの困難に直面することだろう。それは、残念ながら君たちの世界では、特に弱者の感情面での自由が、全くと言っていいほど尊重されていないからである。

だが過去の時代とくらべれば、感情における自由はもっと大事にされるようになり、今では多くの国々の法律でも権利として採択されている。西洋諸国においては、離婚は権利として法律で認められており、性暴力から守ってくれる法規もある。それ以外の国々では、確かに我慢のならない状況で、まだまだ改善する余地があるがね。

しかし、全世界を敵に回そうとも、闘う価値はあると言っておこう。愛の感情のために奮闘することは、霊的進化と幸福の基盤となるので、それに勝る動機は存在しないのである。愛のために闘うことを決意した者は、愛する類魂に再会する時に、至福という一番大きな報酬を得て、思う存分、愛を感じ味わうことができるのだ。人間の利己的な足かせのせいで、その試みにおいて肉体の命を失ってしまったとしても、またそのために物質界で成就できなかったとしても、今生で蒔いた種は霊界で褒美として刈り取ることができると確信すべきである。

反対に、自分の感情を抑圧して否定して、そのための努力をせず、我慢して愛のない関係を保つことを自分に課した者は、勇気がなかったことですでに苦しんでいるが、今後の転生では、今生でペンディングとなった課題を克服しに戻らなければならない。

パートナーとの関係におけるエゴ的感情

*** 自分の双子の魂に出会っていながら、それを大切にできず、他の人たちと性関係を持ちたいと思ったり、実際に不義を働いてしまう場合もあるのでしょうか？**

その通り。確固たる愛がなかったり、それを慈しみ育む努力を怠ったり、エゴ的な感情を介在させてしまった場合に、そういうことがありがちだ。

愛にあまり敏感でない魂たちは、未発達のアの感情よりも生物的な性本能の方が強いので、魂の幸せよりも肉体を満足させることに熱心だ。この段階においては、性欲は基本的に、肉体的な魅力と目新しさに対して芽生える。そして肉体が充足すると、その関係に対して興味を失い、新たな関係を追い求める。この時期においては、特定の人をえり好みすることがない。

魂がアの感情を発達させていくにつれて、性欲が満たされても心の虚しさを感じるので、ただの性的な関係には飽き、それ以上のもの、つまり愛し愛される関係を求める。そして、ここで問題となってくるのが、魂の類似性だ。と言うのも、それがなければ、内面の充足感は得られないからだ。そうして、アの感情のため、パートナーとの関係で幸せになるために奮闘し始める。

魂はこの道程において、無数の恋愛関係を経験し、すべて——本能、愛情、エゴ的感情——を味わい、体験の幸・不幸の度合いに応じて、少しずつ自分の感受性と愛する能力を磨き上げていく。こうして、エゴ的感情を排除していき、アの感情を育てていく。回を追うごとに、自分の感情がより明確になり、気持ちに従って生きる場合に、自信を持つことができるようになる。また、他者の感情における自由に対しても、だんだんと尊重できるようになる。

*** パートナーとの愛情を邪魔してしまうエゴ的感情の代表的なものは何ですか？**

いろいろなものがある。執着心が主なものだが、そこから独占欲、犠牲者意識、嫉妬心、恨みと悔しさ、恋愛感情の強迫観念、恋愛における罪悪感、愛することへの恐れ、感情的混乱などの他のエゴ的感情が派生する。

*** これらのエゴ的感情がそれぞれどういうものなのか説明してくださいますか？**

もちろんだ。執着心から始めよう。これについては以前に説明しているが、ここではもっと深く見てみよう。

—執着心について

執着心は、一般的には「所有的な愛」として知られる。執着に苦しむ者は、カップルの関係であれば、パートナーから意志や自由の一部を譲るよう強要されても当然だと考えており、同時に、自分も相手の意志や自由に関する権利を得ていると思っている。

執着心の二つの側面を、能動的な執着心と、受動的な執着心とに区別してみよう。

能動的な執着心は、愛する者は自分に所属しているので、自分がその人に関する特定の権利を持つと考える人に見られる。それは、他者の意志を所有したいという欲望となって顕れ、自分が望むことをさせるためにその人の人生をコントロールしたがる。一言で言えば、能動的な執着心がある人は、パートナーの意志に自分の意志を強要する権利があると思っている。自分の望みを叶えて悦ばしてくれる人といたがり、そうするのがパートナーの義務の一部であるので、相手に要求する権利があると思いついでいる。

受動的な執着心は、カップルの関係ではそうすべきだと思い、自分の自由や意志を相手に侵害されることを許容してしまう人につきものである。受動的な執着を患う者は、自分自身の自由や意志を放棄して、パートナーの満足と悦びに身を捧げる傾向がある。

伝統的な男尊女卑的教育は、男性の能動的な執着心を承認し、女性に受動的な執着心に馴染んで生きるように教えているので、執着心を二つの側面から増長させている。

男尊女卑の夫婦関係では、夫は妻を支配する権利があると思いついでいるので、能動的な執着心から行動し、自らの意志を強要して妻の自由を制限する。一方、妻は義務として、自分の意志と自由の一部を夫に譲り渡してしまうので、受動的な執着心で行動する。

*** 一般的には、男性が能動的な執着心から行動し、女性が受動的な執着心から行動する、ということでしょうか？**

そうではなく、その反対のケースも多い。同じ人に能動的・受動的な執着があることもあるし、同時に二人共に、その両方があることもある。能動的・受動的な執着心があるかどうかは、各魂の進化レベルと関係している。

能動的な執着心は、愛をあまり知らず、愛するより望んだり必要とすることの多い、虚栄心の段階でより顕著に見られる。パートナーとの関係でも、相手が自分の願望や欲求を満たしてくれることを求める。そういう虚栄心の段階の魂が男性に転生すると、男尊女卑の教育を利用して自分の高圧的な行動を正当化し、女性になった場合には、別の強みを使って支配的になる。

受動的な執着心は、通常は、愛される必要性があり、より愛する能力の高い、自尊心の段階で見られることが多い。相手を悦ばせば愛してもらえると思ひ、愛する能力が大きいためにその関係に尽くしてしまい、極端な場合は、自己の自由と意志まで放棄してしまう。

*** 執着心は、どうやって克服するのですか？**

能動的な執着心は、愛することと所有することは別物であると気づけた時に乗り越えられる。本当に人を愛するのであれば、人生のどんな場面においても、その人の意志と自由を大事にすることから手がけねばならない。自分自身の自由や意志を尊重してほしいと望むようにだ。

受動的な執着心は、人を愛しても、自分自身の自由や意志を断念することには繋がらず、相手に好きになってもらうために、それらを放棄することは意味がないと理解した時に越えられる。本当に愛してくれる人なら、自由や意志の放棄を引き換え条件とはしないからだ。愛する見返りとして君に犠牲を強いる人は、君を愛してはいないし、今後も愛してはくれないだろう。本物の愛の感情というものは自然に湧き起こるもので、君がすることに条件付けられるわけではないからだ。

— 独占欲と犠牲者意識について

自分の願望や欲求を満足させるために他者の気を引こうする欲望を、独占欲と呼ぶ。独占欲に支配されている人は、いつも自分のことだけを考え、他の人たちを強要したり義務付けて関心を引く。このような人たちはパートナーとの関係では、愛情の絆がある伴侶から目にかけてもらうのは当然の権利だと主張して、ほぼ独占的な奉仕を要求するので、しばしば相手の自由や意志を侵害する。そして、気にいるほどの関心を引き付けられないと、犠牲者のふりをして気を引こうとする。

犠牲者意識は、憐憫の情を引き出しながら相手の関心を自分に向けようとするとする人に特有のエゴ的感情で、同情してもらうことによって、相手を思い通りにしたり、利用しようとしている。犠牲者意識は、相手の自由意志にはお構いなくその気を引こうと強いるので、一般的に独占的で

あり、独占欲との関係が深い。自己成長しようと努力せず、他者に自分の試練や責任を果たしてもらおうとするので、臆病者でもある。

これは大変巧妙な人心操作の手口で、コントロールされる側は、往々にして気づかずに意のままになってしまう。犠牲者意識は罪悪感を弄ぶ場合が多く、要求を満たそうとしてくれない場合に、相手が罪の意識を持つように仕向けるのだ。

たとえば、他者の注意を集めようとして、自分の病気を逆手にとることがある。痛みを偽ったり大げさにしたりして、責任を逃れたり、他の人に代りにやってもらうおうとする。

当人の不快感の主な原因でもないのに、自分が鬱的なのは幼児期に愛されなかったせいだとするのも、同情を引いて独占欲を正当化するのによく利用される口実だ。

パートナーとの関係では、いつも望みを叶えてくれるサービス精神旺盛な人を相手に選びやすい。いつも肉体的あるいは精神的に具合が悪いふりをして、自らパートナーに依存することで、常時世話をしてもらって、全責任を押しつけようとする。だがこのような態度は、しまいにはパートナーの息を詰まらせ、疲弊させてしまう。ニセ犠牲者に独りではやっていけないと思込められて、詳細に至るまで相手を満足させて悦ばせることに追われるパートナーには、事実上独自の生活がないからである。

犠牲者のふりをする人たちは、彼ら自身で不快感を募らせ、改善する気がない。それを、注目を集めるための武器として利用するからだ。

*** 独占欲と犠牲者意識はどのように克服すればいいですか？**

他者の人生をコントロールするのをやめ、その自由意志を尊重することだ。誰に対しても何も要求したり押しつける権利がないこと、ましてや相手との愛情の絆をその口実にしてはならないのだと気づくことである。同時に、いつもよその人に解決してもらおうとしないで、臆病、怠け癖、安楽さを克服して、自分で課題に立ち向かう必要がある。

一 嫉妬心について

嫉妬心は、自分のものだと見なす人を失う怖れから怯えることだと定義できる。カップルにおける嫉妬心は、相手を所有物と見なして自分にだけ注目するよう強いる、能動的な執着心を抱いた、所有欲が強い独占的な人に特有だ。そのため、パートナーが他の人たちに関心や愛情を示したりすると、激怒する。

嫉妬心は、パートナーへの恒常的な不信感や、自分に不実かもしれないという強迫観念として顕れることが多い。この強迫観念から、浮気の

可能性を回避するのを口実に、相手の人生を徹底的にコントロールしようとする。自分の伴侶と交友する人たち、特にパートナーとしてライバルになる可能性があると思なした人たちを目の敵にする。

また嫉妬心は、攻撃欲、独占欲、犠牲者意識、恨みなどの他のエゴ的感情も増長させて、パートナーの人生を操るためにも使われる。交際中に嫉妬深かった人は、関係が破綻すると、恨みがましいことが多い。

嫉妬深いのは、愛の感情が貧弱であることの反映である。第一に、相手の幸せに関心を持たないからだ。パートナーを大いに傷つけることなど構わず、自分の支配欲を満たすことだけを考えている。第二に、二人の関係を保つには愛情の絆だけで充分だと信じていない。そのために無理強いしたり脅したりする。本当の愛があれば、愛の感情を信頼し、第三者の介在を怖れたりはしない。三角関係になるとすれば、それは両者の愛が乏しかったか、存在していなかったことの顕れだ。

***嫉妬心はどう克服するのでしょうか？**

嫉妬というのは、愛の感情が存在せず、能動的な執着心しかないことを表している。嫉妬心は、愛の感情がないことを認識し、自分の能動的な執着心を認めることで、克服する。乗り越えるには、相手を所有したいという欲求を放棄し、その人の感情面の自由を尊重せねばならない。真の愛は自由であり、強要できず、自然に湧き起こるものである。二人の結びつきは、関係を維持するための義務や努力を必要とすることなく、この自発的で自由な相互愛の感情に基づいていなければならないのだ。

一恨みと恨みつらみ（悔しさゆえの恋愛の逆恨み）について

恨みは、我々に被害を与えたと見なす人に対する敵意として特徴づけられる、エゴ的感情である。人は自己愛や感情が傷つけられたと感じると、自分に痛手を与えた相手害しても、それが正当化されると思う。相手に損害を与えれば、スッキリすると思うのだ。つまり、仕返しや報復の願望が存在している。

人が恨みに駆られて行動すると、自分に危害を加えた人だけでなく、世の中全体を敵に回す傾向にある。恨みの感情がその人の意志を支配してしまうと、他の人たちから向けられるあらゆる言動の裏に、自分を傷つけるという隠された意図があると思ひ込んでしまう。恨みがましい人は、極度な人間不信になりやすいのだ。

恨みの一種に恨みつらみがあるが、別れることを決めたパートナーに対する反感は、このケースにあたる。

失恋を根に持つ人は、自分に所属していたものを失ったと考えるので、感情的に傷つけられたと感じ、その喪失を受け容れるのが難しい。別れた相手が苦しむことを願い、苦痛を与える行動をとりやすい。自分を犠牲者だと思い、不幸の原因だと見なす相手を傷つける権利があると思うのだ。つまり、「僕を苦しめた仕返しに、君を苦しめてやる」というのがモットーとなる。

恨みつらみを持つと、犠牲者意識、名誉毀損、裏工作、恐喝、脅迫、強制、攻撃など、復讐に有効な手段はすべて利用する。

そして、暴力や脅迫を行ったり、ありもしない虐待を受けたと告発して、共有していた財産を相手から奪い取ろうと考えるなど、元パートナーに損害を与える行動をとっても正当化できると思い込んでいる。

共通の子どもがいる場合には、子どもを最後の切り札として使い、別れた伴侶と子どもとの関係を阻害しようとしたり、悪いイメージを作り出して子どもと上手くいかないようにする。

元伴侶が新たな関係を築くと——特にそれが当人たちの別れの原因になったと見なされれば——新しい恋人も恨みつらみを抱く人の攻撃の対象となる。

***でも、自分のパートナーに捨てられれば、誰でも気分が悪いものではありませんか？**

人は破局によって、悲しみ、失望、欲求不満、孤独感、郷愁などを感じるが、そのように辛く感じるのと、相手が苦しむのを望んでわざと行動することとは、全く異なることである。

根に持つ人も、愛の感情が貧弱であることの反映だ。真に愛する者は、相手が理解することのできない決断をした時でさえも、絶対に自分の愛する人を傷つける行動をとらない。それが恨みつらみとなってしまうのは、感情における自由を尊重することがまだできていないからだ。感情における自由は、誰と一緒にいたい、いたくないかを決める権利を各人に与えているのだ。それが尊重できれば、別れることになってもそれほど苦しむことはないし、他の人たちもそれほど苦しめはしない。

***恨みつらみは、どう乗り越えたらいいですか？**

すべての解決策は同じこと、つまり、執着心の克服と感情面の自由の尊重、に根ざしている。能動的な執着心と嫉妬心のところで言ったことだが、誰も誰にも属さない、ということを確認する必要がある。伴侶に対する所有権などは存在しないので、相手に代わって決断する権利はないし、ましてや、その気がない相手に関係の継続を要求するなどできな

い。それゆえ、相手に被害を与える行動は、どうしても正当化することができない。

—恋愛感情の強迫観念と妄想について

恋愛関係における強迫観念は、目標とした人を獲得、または所有したいという満たされぬ願いを反映している。願望が簡単に叶えられる場合は、それが達成されるや、興味を失う。だが困難であると、それは一種の挑戦となる。欲望は煽られ、満たされないと、強迫観念に変わる。大概の場合、これは当人の本当の気持ちを表してはおらず、性的もしくは愛情面の欲求不満や必要性が投影されたものだ。そのため、強迫観念は現実性に欠いている。

強迫観念は、自己の気紛れを満たすことに没頭して長く暮らしてきた、移り気な人たちに特有なもので、願望が達成されないと、我を見失ってしまう。

また、自分の感情を表すことが苦手な自己抑制的な人たちも、恋愛感情の強迫観念になりやすい。願望の対象となる人に魅了され、その人について妄想を抱く。それは現実に則さないものなのだが、願望を強くし、相手を獲得できれば幸せになれるという期待を膨らませる。

*説明を聞く限りでは、ドン・キホーテがトボソ村のドゥルシニア嬢に抱く気持ちを思い出しますが。

それは、妄想や恋愛感情の強迫観念がいかなるものかを示すいい例だ。

妄想は、気持ちよりも頭を働かせるものなので、自分の考えることが感じていることだと信じ込むに至る。感情をないがしろにしているので、相手も自分を想ってくれているのかは気につけない。拒否されるのが怖く、それを認める気がないので、正直に行動できない人である場合が多い。

どんな対価を払ってでも、そして必要とあれば相手の意志を無視してでも、願望を抱いた人を獲得するのが目的である。そのため、堂々と自分の意思を伝えることがなく、相手に嫌だと言う機会を与えずに、欲しいものを手に入れるために狡猾に立ち回る。

自分が肉体的に美しい場合は、誘惑すれば相手の意志と感情を曲げることができると思っている。頭がいい場合は、相手の弱みを研究し、その知識を使って、相手を口説いたり褒めたり、欲求や気紛れを満たしてあげて、手に入れようとする。このようなやり方で相手を獲得できない場合、その人の魂が鈍感ならば、恐喝、脅迫、強制、暴力など、相手の自由意志をさらに侵害する手段に訴える。

***望みの人を手に入れたらどうなるのですか？ 二人とも幸せになるのでしょうか？**

いや、しばらくの間は望みのものを獲得できたという満足を感じているが、現実が期待したほどのものでなかったと見るや、大きな失望を味わい、急速にその関係に幻滅していく。以前は神や女神のように思えた、今やパートナーとなった相手は、ごくふつうの平凡な人として目に映るので、次第に興味を失っていく。

その関係が上手くいかないのを相手のせいにして責めるが、本当は、幻想だけで愛の感情がなかったことが不満の原因なのだ。それなのに、他の人が自分のパートナーに関心を寄せていると思うと、今度は所有欲を出す。それは、相手を苦勞して獲得したトロフィーだと見なし、自分に所属していると考えているからだ。

そうすると、自分たちの関係が幸福でないにもかかわらず、相手がそこを抜け出して別の場所で幸せになることも許さないので、自分が生きることでもできず、相手を生かすこともできない。

それはまるで、親に欲しいおもちゃを買ってもらえないと地団太を踏むのに、手に入れるとちょっと遊んだだけで飽きてしまう、我がままな子どもようだ。別の子どもがそのおもちゃを欲しがると、また興味を示すのだが、それはもう一度惹かれたからではなく、自分の所有物だと見なししているものを他人に譲りたくないからなのである。

***恋愛感情の強迫観念はどう克服したらいいですか？**

能動的な執着心、つまり愛には所有権がつきものだという概念を克服する必要がある。自分が愛しても相手がそうでないのなら、無理やりそれを変えてみせようとせず、その現実を受け容れるべきである。人の感情とは自由なものであり、強要はできないし、またするべきではない。そうしても自分と相手を苦しめるだけだ。

自己抑制的な人に強迫観念がある場合は、臆病と抑圧に打ち克ち、拒否を怖れて自分の考えを隠してしまわずに、常に正直に気持ちを表明する勇気を持つことで乗り越えることができる。そうすれば、自己の交友関係も本物となり、好きな人に対して幻想や妄想を抱かずに済む。相手に応えてもらえれば、その人との関係も自然なものとなるし、嘘をついたり裏工作をする必要もない。また、相手にその気がなくても、つき合えたかもしれないのにチャレンジしなかったせいで駄目だったのではないか、という考えに囚われることなく、心穏やかに新たなページを開くことができる。

—恋愛における罪悪感について

これは人が、感じていない愛情を持つと無理をしたり、自分の気持ちを抑圧するなどして、自分自身の感情の自由を強要した場合に起こる罪悪感である。受動的な執着心を患う人によく見られるものだ。

恋愛における罪悪感が起こるケースの一例としては、カップルの一方が他方に恋愛感情を抱いていないことに気づいたものの、一緒になって年月も経ってしまったために、相手を愛して関係を維持することを義務付けられていると思う場合である。つまり、そうするのが自分の義務だと思って、伴侶に対してパートナーへの愛を覚えようと努めるのである。それには、相手を性的に満足させる、世話を焼く、一緒にいる時間を作るなど、パートナーに対してすべきであるとされる行為が含まれる。こういうことを全部するのは、相手を愛していないことに罪悪感を抱いているからで、自分に愛がないことを何かで埋め合わせすべきだと思い込んでいるからだ。

恋愛における罪悪感が起こる別のケースは、ある人に恋をしたものの、同時に自分自身の道徳観から見て、それを不適切であると判断した場合である。その例としては、すでにパートナーがいる人を愛してしまった場合、または当人にパートナーがいる場合だ。この場合は、愛すべきではない「不適切」な人を愛してしまったことで罪悪感を抱き、不道徳、あるいは禁断だと見なすその恋心を抑圧したり、断念したりする。こうして自分自身で不幸になる道を選ぶ。

***すでにパートナーがいるのに、別の人に恋をしてしまった場合は、一体どうすべきなのでしょう？**

その人が好きなようにすればいいのだ。だが、幸せになりたいのであれば、感情のために闘うべきである。

***それは、それ以前の関係を切って、愛する人と一緒にいるべきだという意味ですか？**

愛のない関係は、愛が欠如しているという時点で、すでに壊れているのだ。ただそれを認めて、それに従って行動すればよい。前にも話したろう。伴侶を愛していないのであれば、正直になって、それを伝える勇気を持つことだ。そうしてから、正式にカップルの関係を終了させることだ。これは、他の人を愛しているか否かとは別問題だ。

ましてや別の人を愛しているのであれば、自分の本当の気持ちを認めて、愛している人に伝え、相手もそう想ってくれているのかを見てみればよい。そして、相手がどういう決断をしようと、それを受け容れることだ。二人が相思相愛であり、カップルとして一緒にいる意思があるのなら、誰にも何にもそれを妨げられないし、妨害すべきでもない。まし

て、罪悪感を持つ必要などない。霊的には罪悪感を持つ理由は何もないからだ。

***でも前述のような状況では、罪悪感が芽生えるのがふつうだと思います。どうやって、恋愛における罪悪感に打ち克つことができるのですか？**

罪悪感を持つてしまうのは、君たちがカップルの愛を所有的または執着的なものだと誤解しているからで、所有権付きの結婚や婚姻の不解消など、同じように誤った道義上のルールを作り上げてしまったからだ。

罪悪感に打ち克つためには、愛の感情は、自由で自発的なものなので強要できないしすべきでもないということと、どんな粹づけも意味を持たないということを理解する必要がある。人は誰でも、好きな人を自由に愛する権利を持つ。誰のせいでもなく、自分自身ですら、感じられない気持ちを抱いたり、感じている気持ちをなくすように自分に課することはできない。我々はまたもや、感情における自由の尊重、という同じ原点に辿り着いたのだ。

前述のケースでは、当事者の感情面の自由を尊重すべきであり、ありもしない犯罪行為に仕立てて不当に罰してはならない。人生をまるごと変える羽目になろうとも、真の愛の気持ちを持つことで、誰一人として罪悪感を覚えるべきではない。罪悪感という感情は、打ち克つことができなければ、愛の感情を存分に感じて味わうことを阻む障害となり、そこから湧き起こる幸福を享受できなくなる。

一愛することへの怖れについて

その名が示す通り、これは、苦悩の原因になるだろうと思って、愛を感じることに怖れを抱くことだ。

これは、別れた相手に苦しめられたとか、第三者に恋愛関係を壊されてしまったなど、過去にトラウマ的な経験をした人たちによく見られるものだ。

また、幼少期から感情を抑圧する教育を受けてきたために、感情面での自由が制約されてしまった人たちに見られる。このような人たちは、自由な気持ちを持つと、なんらかのお仕置きを受けるのではないかと怖れている。教えられた行動規範から見て自分の感情が正しくなければ、良心の呵責を覚えるように自己規制してしまうこともある。

愛することを怖れる人は、自分をさらけ出すことで傷つけられるのが怖いので、人と交際する時に心を許さないことが多い。そのため打ち解けにくく、あるがままの姿を知るのは困難だ。無理解、拒絶、恐喝、脅

迫、裏工作、中傷、攻撃を恐れ、自己をさらけ出さずに感情を隠すか押し殺しておけば、誰からも危害を加えられないと思っている。このため、感情的に孤立する傾向にある。被害を避けるには、それが最良の策だと思っているのだ。

*** でしたら、危害を加えられないためには、感情的に孤立するのがいいのですか？**

そうではない。感情的な苦しみを怖れる気持ちから、外部の情緒攻撃から守ってくれそうな鎧に身を隠しても、その鎧自体が、人に愛の想いを伝えたり、他の人たちの愛を受け取れることを阻んでしまうので、幸せになれなくなるのだ。この場合は他人ではなく、自分で自分自身を傷つけているのだが、それで辛い苦しみが軽減されるわけではない。

*** 孤立してしまうと、どうして苦しむのか具体的に説明してください。**

よかろう。感情的に孤立している人が自分の類魂に出会ったとして、相手が気持ちを伝えて親しくなりたいたいと思ったとしてみよう。通常このような場合は、双方がそれぞれ感情を表明して、相手に愛を覚え、二人は幸せに感じるものだ。

だが孤立してしまっている人は、恐れと不信感から、与えられる愛を感じ取れず、それと同時に、自分自身の愛の感情を抑圧してしまう。そして、そのことで苦しむのだ。またその人の類魂も、愛を伝えることができず、愛されていると感じられないので、苦しむことになる。

おそらくその人の類魂は、何が起きているのか理解できず、混乱してフラストレーションを覚えよう。そして、自分の気持ちに罪悪感を持ったり、感情を表現するのを怖れるに至る。好かれていないと思って、その人とパートナーの関係を築こうとするのをやめてしまうことさえある。

こうして、愛への恐れと不信感に由来する感情的な孤立のせいで、一緒になって幸せになれた筈の二人の類魂たちは、お互いに別々の道を通り、幸福を味わえないまま歩いていくのだ。

*** でも、これまでの恋愛関係で悪い経験がなくても、愛することや恋することを怖れる人もいますよ。そういう場合は、どうしてでしょうか？**

感情的トラウマは、前世からのものである場合もある。過去の状況を覚えていなくても、そのトラウマを乗り越えていなければ、それが魂に深く浸透していて、その後の転生に持ち越され、恐れとなって顕れる。

愛することを怖れている人たちは、自分たちは幸福とは無縁であり、本当に愛してくれる人などいるわけがないと思っているので、生き甲斐

がない。暴力的な飼い主に長い間いじめられた挙句に逃げ出せた、野良犬のような気分である。ある日この犬は、感受性が高く可哀相に思い、家に置いて愛情深く世話をしてくれようとする人たちに出会い、中の一人がなでようとして近寄るのだが、虐待を怖れるあまり、その手が愛撫ではなく乱暴をするのだと思い込み、より良い生活をあてがってくれようとした人たちから、震え上がって逃げ出してしまふ。これと似たようなことが大勢に起きている。怖れのせいで、人生で幸せになるチャンスを失ってしまうのだ。

*** 孤立主義と愛することへの怖れは、どう克服しますか？**

まず、自分が怖れを抱いていることと、そのせいで孤立してしまうこととを認めること。自分に自身の感情を自由に表現することを許し、それに従って生きるために闘う勇気を持ち、人生での決断の際に他者の意見に左右されず自己の感情を信用することで、怖れを乗り越え、孤立に打ち克つことができる。

どんなに困難な状況に思えようと、決して感情を放棄してはならない。また、抑圧してもいけない。それが、幸せになるための唯一の方法だからだ。もう一度、愛への希望と信頼を取り戻すことだ。

*** けれど、愛の感情のために果敢に努力したにもかかわらず、愛する人と一緒になるという目的を果たせなかった人や、他の人に妨げられて強要された関係を断ち切ることができない人もいます。前にも、性暴力についてや、感情における自由の権利を守ろうとして殺されてしまう女性のことを話しましたが、そういう人たちは闘いに負けてしまったのでしょうか？**

愛の感情のために闘う時に、失敗することなどない。人間の無理解とエゴのせいで、物質界で幸せになることができなかつたとしても、霊界でその報酬を受け取ることを疑ってはならない。気持ちに正直に生きる努力において示された勇気は、進化の一つの成果であり、永久的に魂のものとなる。

愛の感情が明確で、それに対して勇敢であるのは、これまでの転生で体験した試練において、自分自身の力で勝ち取った大変価値のある霊的な資質だ。魂は以後は永久に、この資質を持ち続けることになる。そしてこれによって幸せになり、惨めな目に遭った過去の罨にはまらないで済むのだ。

—感情的混乱について

感情的混乱は、人が心がない気持ちを持とうと無理をしたり、本当の気持ちを抑圧したり、あるいはその両方の場合に起こる情動的な状態である。その状態に長く留まってしまうと、本当の気持ちと強要している気持ちとの区別が上手くつかなくなってしまう。これは、そういう人たちにありがちな混乱のことであり、感じていることと感じなければならぬことを混同し、気持ちが義務と入れ替わってしまうことだ。

自分がない想いを無理強いする人は、その義務感によって疲労し虚しくなり、苦しむことになる。愛の感情は強要できず、自発的に生じなければ、存在しないからだ。

また、本当の愛情を抑圧することで苦しんでしまうこともある。そういう気持ちになるべきではなく、その権利もないと思うからだ。しかし、感情的混乱から生じた自己欺瞞によって、自分が不適切な感情を抱いてしまったがゆえの良心の呵責から苦悩しているのだと思い込み、それが不幸の原因なので、感情自体を排除する努力をすべきだと考える。

感情的混乱は、感情における自由を断念してしまった人によく見られる。自己の感情を放棄する要因の一つに、禁制的な道徳律に従った教育を授けられ、それを自分の中に取り込んでしまったことがある。この場合、その人の感性は、その道徳規範に強く規制されてしまっている。また、愛情の断念を強要された経験など、感情面に関連した何らかの辛い状況を人生で体験したせいである場合もある。

*** 感情的混乱が具体的にどのようなもので、どう表れるのかが理解しづらいです。もっとはっきりするように例を挙げてくださいますか？**

いいだろう。教会で結婚式を挙げて、何年も婚姻生活を続けている人を例にしてみよう。

その間にその人が、実際には自分に恋愛感情がなかったこと、またその結婚で幸せでないことに気づいたとする。この人が感情における自由を大事にするなら、すぐに伴侶を愛していないことに気づき、それを伝えて離婚を求めることだろう。

だがこの人が、結婚とは一生継続するものであり、解消はありえないという宗教的な教育を授けられていたとしたら、義務感と他の人たちの否定的な反応への恐れから、無理してその関係を維持しようとするだろう。

「結婚した相手を永遠に愛すること」が道義上の義務であると信じ切っているので、伴侶を愛するように自分を仕向ける。愛していないことを相手に気づかれないように、あらゆるサービスで悦ばせ、愛のために

多大な犠牲を払っているのだと自分を信じ込ませようとするが、自己犠牲に感じ、義務と見なしていること自体が、実際は愛がないことを表している。真の愛を感じる者には、相手への奉仕が犠牲とはならず、好きでやる行為になるので、それに悦びを覚えるものである。

別の選択肢は、伴侶の態度が悪いことにして破局を正当化するやり方だ。こうすれば、伴侶が決別の責任を負うことになり、当人は義務を怠ったことから免責される。つまり、「私は彼を愛しているのだけれど、構ってくれないし愛されていないと感ずるので、もう一緒に暮らしていけないわ」、または「こんなことをされたから、もう許せないの」と弁解するのだ。

もう一つのやり方は、伴侶の生活を不可能にして、相手に別れの決断をとらせる方法だ。このやり方では、愛し続けなければならない義務を公式に怠ったのは相手となり、当人は結婚の破局に関して免責される。世間の目には伴侶が悪く、自分を犠牲者に見せかけるが、事実は全く反対である。

こうして、その精神的な葛藤の状況は、明らかに「伴侶を愛していない」のが原因であり、それには「別れる」という単純な解決策があるのに、感情的混乱のせいで、自分や他者に苦悩を引き起こす複雑な騒動へと発展させてしまうのだ。つまり、愛の感情が自分がないことを認めようせず、臆病で、宗教的な道德律を破れなかったために、事実を偽装してしまったのである。

*** 感情的混乱はどのように乗り越えますか？**

自分に完全に正直になって、真の愛の感情と抑圧的な教育のせいで獲得された義務的な感情とを区別できるように、自分を掘り下げたことだ。自分自身の感情がはっきりしたら、他者の意見に左右されることがなく、授かった教育のあらゆる禁制や偏見のしがらみからも解放されて、気持ちに従って生きる勇気を持つこと。感情における自由の権利を侵害するものは、霊的視点からは誤った規則や見解であるので、配慮する価値がないのである。

愛の法則から見た子どもとの関係

*** 人類が霊的にもっと速く進歩できるように、社会レベルで適用できる方策がありますか？**

ああ、子どもたちを愛し、肉体的にも精神的にも傷つけないように気をつけることだ。絶対に彼らに、屈辱的な思いをさせてはならない。霊的な観点からは、幼児への虐待は、最も重い犯罪の一つであると忠告しておこう。

子どもたちが自由でいられるようにしてあげなさい。思い思いの気持ちを表現でき、好きに遊べて、遊びながら学べるように。

愛されて育てられる世代の子どもたちがいれば、君たちの世界は急速に変化するだろう。愛には世の中を変える力があるのだ。君たちには世界を変えられなくても、愛を知ることができた次の世代が変えてくれるだろう。

*** どうやって子どもと接すればよいのかがわかる、助言がありますか？**

君たちは、子どもであったことがないのかい？ 彼らの身になって考えてごらん。君たちが子どもだった頃の、良いこと、悪いことを思い出してみるのだ。人からされて嫌だったことを思い出したら、それを繰り返さないようにして、良かったことは手本とすればよい。

私は、肉体的な危害だけではなく、精神的な嫌がらせも問題としている。認める人はほとんどいないが、君たちの世界には、自分自身の子もさることながら、子どもたちを精神的にいじめる人たちが沢山いるのだ。彼らは、自分自身の問題にどっぷりと浸かったまま、子どもたちを傷つけていることに気づく感受性のかけらも持ち合わせていない。子どもは所詮子どもであり、大人と同じようには物事が理解できないためにもっと鈍感であると考えて、何の配慮もせずに接して、自分たちのフラストレーションをぶつけている。

しかしながら、それは全く違うのだ。子どもたちは、大人よりも肉体的・感情的に敏感で傷つきやすいので、できる限り丁寧に、愛情深く扱ってあげることに重点を置くべきである。子どもたちをそのまま丸ごと受け容れ、愛してあげなさい。

条件付きで、子どもを愛してはならない。自分の子どもを愛せずに、自慢するためだけに利用する人がいる。その子が他の子とくらべて何らかの能力に秀でていると、頭がいいと鼻を高くするが、能力がなければ過小評価をする。すると、子どもの自尊心に甚大な影響を及ぼしてしま

う。自分の子どもを本当に愛する者は、顔が可愛かろうとなかろうと、頭が良かろうが悪かろうが、積極的であろうがなかろうが、その子をおるがままに愛するものである。

***子どもを教育するには体罰が必要だ、という意見の人もいます。これについてはどうでしょう？**

それなら、その人たちは、仕事の出来がまずかったと上司に見なされれば、時々たたかれても構わないのだろうね。

***本当は、そうされて面白いとは思わないでしょうね。職場における暴力ということで、上司を訴えるのがふつうだと思います。**

面白くないのは、たたかれるのが好きな人などいないからだ。大人をたたくことが犯罪行為となり許し難いのであれば、ずっと力が弱く身を守ることができない子どもをたたくことが、どうして許容されるのだろうか？

自分自身に望まないことは、他者にしてはならない。子どもという、もっとか弱く無防備の者が相手であれば、なおさらである。

親の中には、子どもが他の子をぶった時に、今駄目だと禁じたばかりのことと同じことで罰する——つまり、子どもをぶつのだ——者がいるが、それを目にするのは悲しいものだ。禁止されたことと同じことをする大人を見る子どもは、一体何を学ぶのだろうか？ 一番強ければ、暴力で自分の規則を押しつけても構わない、ということに他ならないだろう。

絶対に子どもをぶってはならない。その子のためだとか、教育のためだとか、紀律を教えるためという言い訳を利用してたたくことは、なお、良くないことだ。

体罰を用いる者は、教育を施しているのではない。自分に教える能力がなく、子どもを扱う、こつや忍耐、優しさ、繊細さに欠くことを示しているだけである。性暴力や虐待に対して闘うのならば、幼児虐待に対しては、それ以上の力が注がれるべきだ。

***それにしても、今日では幼児虐待は多くの国で法的に罰せる犯罪とされているので、虐待の証拠を示すことができれば、それをした人を処罰できる筈です。**

そう、特に西洋ではね。そして、これは大きな進歩だ。

問題は、多くの場合、子どもが虐待を受けたという証拠を示すのが難しい点だ。虐待の証拠がそれほど明確でないことがあるからだ。

大人が虐待を受けるケースなら、自分自身で身を守ることもできるし、実際に暴力を受けたら、告発することもできよう。だが、子どもは守ってくれる大人を必要とするし、しかも家庭環境で虐待が起こる場合には、保護してくれる筈の人たちが加害者なのだから、一体誰に守ってもらえるだろうか？

加えて、君たちの社会は依然として、軽い体罰に非常に寛容だ。自分たちがされたら嫌なのだろうが、多くの人たちが、たたいたり、ぶったり、お尻をはたいたりすることは、許容範囲内だとしている。子どもにすることを自分がされたらどう感じるだろうかと、一人ひとりがよく考えてみることだ。そうすれば、子どもたちに対してもっと心配りができるようになるだろう。

*** 体罰を用いないのが理想的なので、それを制限するのは賛成だけど、とても反抗的な子どもがいて説明しても駄目な場合は、「強硬手段」を探る必要、つまりもっと断固とした方法で対処しなければならないよ、と言う人たちもいます。これに関してどうですか？**

子どもの教育を言う通りにさせることだと考え、言葉や肉体的な暴力で怯えさせて、怖れによって意に従わせようとする者は、自身が無能で霊的に未熟なことを表している。愛、感受性、理解力があれば、常に別のやり方を見出すものだ。だが、それがなければ、どんな口実でも、自分の悪癖を引き出すのに好都合だとされる。

*** でも、幼児を虐待する大人の多くが、彼ら自身も子どもの時に虐待を受けていたというのではないですか。きっと、手本とすべきものがなかったのでしょう。**

そういうケースでは、虐待された時に感じたことと、粗雑で屈辱的な扱いをされて受けた胸の痛みを思い出し、自分自身が嫌だったことを自分の子や他の子どもに繰り返さないように努めることだ。

幼少期に、多かれ少なかれ、肉体的もしくは精神的ないじめに遭ったことのある人は沢山いるが、それは君たちの世界のあらゆる分野で、エゴがまだ幅を利かせているからだ。実体験から学ぶことができ、苦悩の経験を覚えている人たちは、自分の子どもや幼児全般に、自分たちが味わった苦痛を回避してあげようと努めることだろう。

*** 強硬手段に訴えずに教育するには、他にどんな方法がありますか？**

強要しなくても子どもが自然に学ぶには、遊びを通して教えるのが良い。どんな価値観や知識でも、遊びながら教えることができるものだ。

子どもが悪いことをしたら、それが良くないことだったとわかるように、まずは一緒に話し合うべきだ。内省を手伝ってあげるには、「君がしたことと同じことを誰かにされたら、どういう気持ちかい？」という簡単な質問で充分だ。たとえば、その子が他の子をぶつたとしたら、「君もぶたれるのが好きかい？」と訊いてみるのが、反省を促す役に立つ。もめごとの解決には対話と内省とを優先し、自身の行為のどこが問題だったのか自覚できるように援助をし、してしまったことを償える可能性を提供してあげることだ。

実のところ、世の中の新潮流には、上記の思想に沿って実施されている教育もあるのだが、それには、今よりも子どもたちに目をかけてあげる必要がある。

***昔とくらべて今の教育の質が低下したと考える人たちもいます。新しい教育手法が手ぬる過ぎて、子どもたちが学ばず、先生たちを馬鹿にして、授業に集中しない、とのことですが、どう思われますか？**

それは完全な間違いだ。確かに、特に厳格な人たちの中には、かつての教育を懐かしんでいる人はいる。そういう人たちは大概、勉強には血の滲む努力が必要だと思っているのだ。

過去の教会運営の学校は、毅然とした紀律をもって教えるという評判だったので、一部の親にとっても重宝されていた。だが「紀律をもって教える」こととは、実際には、怖れや脅しや体罰などで、学校生活を辛くして、生徒たちを強制的に服従させるものであった。そのため、生徒は子どもというよりも、怯えた小さな徴兵みたいで、顔には幼児特有の自発性や感受性や喜びの微塵も見られなかった。しかも、神の名の下に、そのようなことが行われていたのだ。

だが、そういう教育では、もっと従順で言うことを聞く子どもにすることは可能だが、それでもっと賢くできるわけではないし、より幸福にも、より自由にもさせられない。怖れが染みついて育った子には、大人になると欠けているものが多い。幼少期のトラウマを乗り越えられないと、気持ちの表現が困難になったり、自尊心が低下し、感情的な問題を抱えやすい。学校で必死に暗記させられた歴代の王様の名前をまだ覚えていられたとしてもだ。

また、昔の生徒の方が現在よりも優秀で、習熟度が高かったというのも疑わしい。以前は、内容の暗記には力が注がれていたものの、論理的な思考は重視されていなかったからだ。授業内容が適切なものであった

かどうかもおぼつかない。教育に向けられる資金も今より少なかったし、義務教育の期間も短かった。

現在の教育は、生徒の思考力と推察力を伸ばし、暗記を少なくして、論理的に考えさせようとしている。また、学習到達の比率が高く落ちこぼれが少ない国は、紀律に基づく教育モデルを採用した国ではなく、全く逆に、斬新な教育モデルを適用した国であった。他の国々とくらべて、教育への人的・物的な投資が多いことが、その差である。世界で最も良い教育モデルを有するフィンランドが、いい例である。

*** より効果的でもないのに、紀律正しい教育の方がいい、という親がいるのはなぜでしょうか？**

いいかね、多くの場合、問題は子どもにあるのではなく、親にあるのだよ。というのも、自分の子どもの気持ちもわからなければ、その子の愛情の必要性も理解できない親が沢山いるのだ。要は、感情に関して、全く無知なのだ。扶養し、病気の時に医者に連れて行き、物的な必要を満たし、学歴になる有名校で勉強させることができたなら、親としてできることは全部したと思っ込んでいる。だが、決定的な何かが欠けている。それは、自分の子の感情面に気を配ってあげる、ということだ。

自分自身の子どもを煩わしく思い、一緒にいる時間をあまり作らずに、愛情も理解も示してあげない親が大勢いるのは、嘆かわしいことだ。そういう親は、子どもといるのがむしろ鬱陶しく、その子のやること成すことに我慢がならず、気にかけてやろうともしない。しかも、一部の親には、子どもの価値を学校の成績ではかる傾向が頻繁に見受けられる。中には、子どもの成績が悪かったり、病気になった時にしか心配しない親もいる。

そうすると、あまり愛されていないと感じた子どもたちは、親の注意を引こうとする。成績が下がれば親が関心を持つことを知っていて、勉強をしなくなる手段に訴える子どももいる。それどころか、感情的に大変傷ついて、勉学も含めて、すべてに対して興味を失う子どももいる。

親は、子どもへの無知と関心のなさから、勉強に怠惰なのが問題なので、もっと強制的に勉強をさせる威圧的な先生がいる、紀律を課す学校に行かせるべきであると思う。しかし、問題となるのは学校ではなく、親たちの関心のなさなのである。

*** 大人になった時に自力で生活できるように、子どもに勉強してほしいと望むことのどこが悪いのですか？**

勉強してほしいと望むのは何も悪くはないが、子どもを愛するかどうかそれが左右されてはならない。

頭の良さや成績がいいことだけしか評価されなければ、子どもたちは自尊心の問題を抱える上に、勉強のストレスに押し潰される。あるがまま無条件に子どもたちを愛してあげて、幸せになれるように彼らの気持ちに配慮してあげるべきだ。

また、大人が子どもの自由や自発性を大いに制限する、無意味な規則に慣れさせようとすると、子どもたちはそのような規則を不当に思い、反抗する。子どもに遊びを禁止したり、ずっとじっとしているように命じるのは、馬鹿げている。そういう見当違いは、理論で納得させられないので、親は強要したり強制したりするのだ。

*** でしたら、その子自身や他の人たちに害が及ぶことでも、子どもに好き勝手をさせてあげるのがよいのでしょうか？**

全部は駄目だよ。常識を使っておくれ。

何事にもそれをすべき時期がある。子どもの自由度と責任は、大きくなって能力が高くなるにつれて、増やしていくべきだろう。いろいろな危険に気づいていない幼児には、見張りをつけずに、外で独りで遊ぶわけにはいかない。安全を確認しないで道を横切るなどの、無分別な行動をとってしまうかもしれないからだ。

その子にとって、そして他の人にとって危険なことを、段階を踏んで教えていかねばならない。他の子どもたちを大切してぶたないこと、侮辱しないこと、そして宿題をすとか遊んだ後におもちゃを片付けるなど、年齢に応じた責任を果たすことを教えないといけない。つまり、子どもの年相応以上でも以下でもないことなのだが、いつもその子の自由と感性を尊重して大事にしてあげて、理解を示し、愛情深く、また忍耐強く接することだ。

*** でも、限度はどこにあるのですか？ たとえば、子どもが学校に行こうとしなかったり、宿題をしない場合は、強要すべきですか、それとも放任すべきですか？**

常識を使ってほしいものだ。

力づくで強要してやらせるのではなく、子どもと対話し、学ぶことの大事さを教えて、やる気を起こさせるのだ。宿題を一緒にする時間を作って、楽しくとつきやすいものにしてあげれば、力で押しつけるよりはずっといい反応を示してくれるだろう。

*** どうやって、必要なのに退屈で面倒なことを、子どもに学ばせることができますか？**

それを面白いものにして、一緒にしてあげてあげる。そうすれば、子どもは関心を持ってもらっていると感じるし、自分のしていることを手伝ってもらっていると思うので、続けていく気になる。子どもたちは遊んで楽しむものだが、ゲームを介せば、うんざりさせずに多くの物事を教えることができる。そうなれば、学習が楽しいものとなるので、自分から進んで勉強したいと思うようになる。

*** 家庭内、家族においては、どのように教育するべきでしょうか？**

子どもと一緒にいる時間を作ることだ。一緒に遊び、その子に関すること——問題や心配事など——について会話を持ちなさい。

質問があれば、いつでも応じられるように心を開いていなさい。子どもたちは世の中を発見している最中なので、学ぶためには、何でも尋ねる必要があるのだ。君たちには明白なことかもしれないが、彼らにとってはそうではないので、馬鹿にされたと思えば萎縮してしまう。子どもに対しては、とてもとても辛抱強くあることだ。

また可能な限り、遊ばせてあげなさい。子どもにとって遊びは命であり、遊ばせてあげなければ大きな弊害を被る。彼らへの君たちの愛情を目に見える形で——言葉によってや、キスしたり撫でたり抱きしめてあげて——示してあげなさい。子ども自身の人格が自由に形成されるように見守り、自分たちがそうであってほしいと望む資質を押しつけてはならない。丸ごとあるがままに愛してあげて、子どもが少しずつエゴを削り取って、制約のない感受性と情緒を育ていけるように助けてあげるのだ。それから、子どもたちとは何の関係もない、大人である君たち自身の問題や心配事で、彼らの生活に波風を立ててはならない。

*** ですが、子どもに対してあまりにも寛大だと、その子が要求の強い我がままになって、我を通そうとして、癲癪やヒステリーを起こすこともありますよね。そういう場合は、どうしたらいいですか？**

確かに親の中には、怠慢であったり気が弱いため、あるいは子どもの文句を聞きたくないために、危険なことまでを許してしまい、どんな気紛れでも満たしてしまう者がいる。すると、その子は要求の強い我がままになって、小賢しく親の意志を曲げようとする。

そういう時には、子どもの脅しに負けない、毅然とした態度が必要であるが、暴力的または攻撃的に応じてはならない。子どもが横暴に振舞う時ほど、その言い分を聞いてはならない。そういう態度をとると無視されて、要求したものが手に入らないとわかれば、じきに諦めるだろう。

対話をして内省させ、自身のエゴ的な言動に気づけるように、子どもを助けてあげなさい。

*** 将来親となる人々へのアドバイスがありますか？**

こどもが愛してもらえ、生活のあらゆる面、特に感情面を気にかけてもらえることを確信して生まれてこれるように、愛をもって子どもを設けなさい。この世に生まれる子どもたちが愛と共に受胎するなら、世界の苦悩は著しく減少することだろう。

*** 過去の時代と比較すれば、現在は事情が良くなっていると思いますよ。僕が言いたいのは、今の親たちの方が子どもの必要性を認識しているということですが、間違っていますか？**

ある程度進歩したのは確かだ。過去の時代では、大半の子どもたちが、両親に知識と配慮がなかったために、この世にやってきていた。つまり、両親が切に望まないまま、生まれてきていた。今日のような性教育も手段もなく、男女は避妊の手立てがないまま性関係を持ったので、偶発的に生まれてしまっていたのだ。生物学的に可能な限りの数の子どもを産んだので、多くの場合、子どもたちの生まれ出る環境も物的に貧しかった。

子どもに対するほとんどの親の心配は、死なないでほしいということだけで、感情面への配慮は無きに等しかった。生まれ出るには最適な環境とは言えなかったが、魂にとっては、物質界に転生することで学んで進化することが欠かせないので、どんな機会であろうと提供されたものはすべて利用したのだった。親や子となったそれらの魂の感性は、今ほど発達していなかったので、子どもたちが情緒的・感情的に構ってもらえなかったとしても、感受性が鈍かったために、その苦しみも緩和されていた。

今日では、特に西洋の多くの国々において、状況が変化している。親の意志がないまま、偶発的にこの世に誕生する子どもの割合は減少した。大半の子が、両親の子どもを持ちたいという意欲と意識によって、妊娠する。より経済的に恵まれている西側諸国では兄弟の数も少ないので、子どもの生存と物的な心配りは親から保証されている。飢えも渇きも寒さも、また栄養失調や不衛生から生じる病気も体験せずに済むだろう。

だが、まだ重要なことが欠けている。それは愛のために、愛情をもって子どもを宿すということなのだ。まだ多くの子どもたちが、愛とは異なる動機によって、設けられている。

***親が子どもを持つとする時の、愛とは異なる動機とはどのようなものですか？**

家系を存続させなければという一種の義務感や、老後に子どもに面倒を見てもらえるという便宜上の理由から、子どもを作る場合が多い。

ある程度の年齢がいてもまだ子どもが欲しくない夫婦の場合は、それによって人生を変える必要が生じるために、そうする気になれないからだ。だが、生物的な妊娠能力は年齢と共に低下していくので、「時期を逸してしまう」前に、世間と同じように、やはり子を作ることになる。

また、二人の関係が壊れる恐れがある場合に、伴侶を捉まえて夫婦関係の継続を強要するためや、上手くいかない関係を救おうとする必死の試みとして、子どもを設ける場合もある。

***愛がないまま受胎した子どもは、どういう結果になりますか？**

愛がなく生まれ出る子の多くが、虐待、無理解、無配慮、冷淡という形での両親の愛の欠如に苦しむ。現在誕生している子どもたちは、無数の転生経験から得た学びの成果として、過去の時代よりも進化した繊細な魂なので、非常に傷つきやすい。そのため、感情面への無配慮や精神的な不快感に対する彼らの苦悩の度合いは、過去よりも大きいのだ。

親がいくら、問題はいつも悪い態度をとる子ども側にあるのだと信じ込もうとしても、西洋の子どもたちの大半の苦しみの原因は、両親から愛されていないということだ。愛がないがゆえの苦悩のせいで、感情的なトラウマや肉体的な病気を引き起こしてしまう子も中には沢山いるが、大半の親がそれに気づかない。だから親は、子どもが感情的に良好な状態にいるかどうかをもっと認識して、敏感にならねばならない。そうすれば、今、子どもたちを打ちのめしている、苦しみの多くが回避されよう。

愛の法則から見た隣人愛

*** これまで、パートナーとの関係や子どもたちとの関係など、個人的な関係を集中的に見てきましたが、無条件の愛というのは、そういう個人的な関係よりも、もっと奥が深いものだと思うのです。**

もちろんだ。愛に限度はない。もっと沢山の人を愛することのできる魂の能力が増すにつれ、血の繋がりがあのかどうかにこだわらずに愛せるようになる。最終目標は、分け隔てせずに、創造の全存在を包括する無条件の愛に行き着くことだ。

イエスが「汝の隣人を自分のごとく愛しなさい」、「汝の敵を愛せよ」と君たちに伝えた時には、このことに言及していたのだ。

*** 進化するのは、どうしてこんなに骨が折れることなのでしょう？ イエスが言ったような、無条件に愛せるようになる進化レベルに、もっと早く辿り着く方法はないのですか？**

これは、これまで我々が話してきたことの中核である。

イエスのレベルまで進化するためには、エゴを排除して愛の感情を発展させることに大変な力を注がねばならないのだが、それは、たやすいことではないのだ。一度きりの人生での仕事ではない。何千もの転生、何十万年もの歳月がかかる。しかも、すべての魂がこの目的のために生まれ変わってきているにもかかわらず、一度肉体を持つや、何のために生まれてきたのかを思い出せないでいる。

大多数の人びとは、肉体生があるところまでしか意識を向けておらず、物的な福の神が笑っている限りは、物欲を満たすことに人生を費やしている。そして、実存に関する内省はどれも無意味なたわ言であり、時間の無駄だと考える。彼らは、気ままな生活をやめたくないの、何の変化も起こしたくないのだ。

物質主義的な科学教育の下で知性を発達させて、自身の心の危惧を回避しようとする人たちは、存在に関わるあらゆる疑問を嘲り、無益だと見なしている。

また、霊性と宗教とを混同している人もいる。特定の儀式を模倣しさえすれば、「天国」での特権的な地位を獲得できると考えて、宗教というたやすい方の道に引き込まれる。そして、神も喜ぶだろうと自分を偽ることによって、霊的な努力を宗教的な熱狂に置き換えてしまうのだ。

実存に関する疑問を、心の中ではっきり自覚できる人たちも、確かに存在する。目覚めが起こるのは、人生でひどい逆境を体験しながらも、諦めずに説明を見出そうとした結果である場合が多い。人生の意義について、宗教や物質至上主義の科学がもたらす、偏った不完全な説明では納得しなかったのだ。しかし、質問に対して満足のいく答えが得られないので、絶望してしまう。

無関心、無知、不信感、熱狂や絶望から大多数の人びとが人生の真の意味を見出すことができずにいるというのが、以上の総合的な結論である。したがって、人生を理解しないまま生きており、そこから学べないので、人生において進化することができない。つまり、エゴをそぎ落として愛の感情を育む努力が、ほとんどなされていないということだ。

*** 僕が理解したところでは、仏教では、人間の諸悪の根源が願望であり、願望をなくすことで心の平安と魂の成長がもたらされると教えているそうですが、これに関してはどうお考えでしょうか？**

その願望がどこに由来するもので、区別する必要がある。利己的な願望と愛の感情に裏付けられる願望とは、異なるものである。

利己的な願望を排除することとすべての願望を捨て去ることを混同し、自身の意志を放棄しなければ霊的な進歩は望めないとの結論に達する人もいる。これは大きな勘違いなのだが、他者を意のままに操ろうとする者たちにつけ込まれる要因となる。

君たちが仏陀と呼ぶ者は、人間の諸悪の根源がエゴであると見抜き、霊的に進歩するにはエゴを根絶すべきであると知っていたので、人が幸せになるために心から排除すべき衝動などの、利己的な願望のことを指していたのである。しかし、いつものことだが、歳月の経過と共に仏陀の言葉と教えも誤って解釈されてしまった。霊的な進化が不十分な者にとっては本物と偽物とを見分けるのが困難なので、スピリチュアルな様相を呈しているだけで、歪曲された教えを正しいものだと思い込んでしまうのだ。

*** 具体例がありますか？**

性に対する姿勢である。多くの宗教で教え込まれているように、性的な願望は、それが願望であるがゆえに、進化しなければ排除すべきものだと考えて、どんな状況でも自身の性願望を抑圧せねばと躍起となる人がいるが、これは大きな誤ちである。性的な願望は男女の愛の表れとし

て目覚め、幸福をもたらしてくれるので、それを拒むのは間違っているのである。

よく理解している者なら、闘って克服していかなければならないものは、情欲や色欲から生じる性的願望、つまり、利己的な性欲であると気づくであろう。悪癖が顕現した欲望としてではなく、性欲を愛の感情と一致させることに進歩があるのである。したがって、エゴ的な性欲の表れである情欲や色欲を排除することと、性欲すべてを不潔だと見なす純潔主義とが同じであると思っはならない。

性欲がパートナーへの愛の反映、愛情の表れであることは、前にも話したろう。純潔主義は神聖なものではなく、偏見と抑圧に満ちている。他人をとやかく言う者ほど、先入観と鬱積したものを隠し持っているのである。

***先ほど、霊性と宗教とを履き違える人がいると言われましたが、霊性と宗教とはどう違いますか？ 同じことだと思っている人がいます。**

同じではないよ。霊性は、魂独自の資質と能力で、回を追うごとに強く進化の後押しをしてくれる。進化とは、自由に愛する能力を発達させていくことを意味し、そうすることによって、感情、感性、意識、理解、叡智、幸福の、より高度な段階へと徐々に達していけるのだ。それは、いろいろな理由があるが、自分や自分を取り巻くものの存在意義を知り、自分と他の創造物たちや神との絆を深め、自己を内包する宇宙の仕組みを、それを司る法則も含めて、知るためである。

宗教とは人間が創った階層構造を持つ組織で、一連の教義上の信念の周りにしがみついている。これらの信念は、的を得ていようがいまいと議論が認められず、権威者の見解次第である。つまり、その階層構造で一番権威を持つ者に、皆が信じるにふさわしい真の信仰を決める権力があるのだ。

***隣人愛は、大概の一神教の基本を成すものですし、神を信じる人たちも世界には沢山いるのに、どうして、こんなにもエゴだらけで愛のない世の中なのでしょう？**

そのことは前にも話した筈だ。多くの宗教では、愛という言葉は死語に等しく、人を惹き付ける呼び水として使われているだけで、実践して見せることも、手本を示すこともない。しかも、愛は、それより重要視されている他の多くの規則や信仰の陰に、隠されてしまった。だが、これらの規則や信仰は、愛そのものやや「魂の法則」と矛盾するものなの

だ。たとえば、議論の余地を与えることなく、一連の教義を信者に押しつける者は、信仰の自由を妨げるので、自由意志の法則に違反する。

宗教は、人間のエゴと結びついた現象である。少数の者の利己的な便宜によって、人の霊性が操られているからだ。過去の時代においては、支配的な宗教の権威者たちが自らの信条を力づくで課し、それに従わなかった者たちは抹殺された。彼らの権力は非常に強かったので、異議を唱えることは不可能だったし、しかもそれは命懸けであった。現在では勢力が弱まったとはいえ、宗教はまだ多くの国々で、人の自由を弾圧するくびきとなっている。

*** 人が愛に向かって進化する上で、宗教が障害になると言われるのですか？**

愛に向けて進化する上で障害になるのは、人間のエゴであると言いたいのだ。エゴは大変巧妙に人の霊性に忍び込み、それを歪めて操作をし、その霊性とエゴが混ざって出来上がったものから、宗教が生じる。

多くの宗教の起点が、真の霊的な教えを説いて人びとの心に浸透させることができた、高次の存在たちの活動にあったことは話したろう。だがその教えは時間の経過と共に、目立ちたがり野心家の未進化の魂たちによって、彼らの権力と富への野望を満たすために、偽造されて歪曲されてしまった。本物の「魂の法則」は、エゴによって突き動かされたそのような者たちの影響を被り、儀式や式典で飾り立てられ見せかけの霊性で覆われた、「エゴの諸法」に置き換えられてしまった。

*** 本物の「魂の法則」が「エゴの諸法」に置き換えられてしまった例を示してください。**

そうだね、君たちの世界では、「霊的裁きの法則」を利己的な「漏斗の法則」と入れ替えてしまった。つまり、自分たちには許容間口を広くし、他の者には狭くしているのだ。

人は、自分が得することは公平だと思い、他者を得させることは不公平だと思ふ。同じことでも、それをするのが自分自身なのか、それとも他者なのかによって、違う目で見ると。君たち自身の利己的な言動は正当化するくせに、他人であれば、同じことをしていても熱烈な批判をする。そして、影響力の強い者の規則が、他の者たちに強要される羽目になる。

たとえば通常権力を握っている者たちは、法外な給料、不相応な年金、税金の免除など、他の者たちが持たない特権を享受しているが、その一方で、他の市民にはずっと厳しい規則を守るように強いている。

君たちは「愛の法則」と「富と成功とを充足させる利己的な法則」とを入れ替えてしまったために、個人の興味や物的な願望を満たして、成功や名声、気紛れで便利な快適な生活を手に入れようとするのが良いことだと理解し、そのためには仲間を苦しませようが意に介さない。そして反対に、そのようなものがほんの少しでも奪われてしまうと悪いことだと思うのだが、それは違うのだ。

きちんと理解してさえすれば、良いことをするというのは「愛の法則」と調和した行動をとるということで、悪いことをするとは「愛の法則」と反する行為、一般的には苦悩や不幸を引き起こすエゴ的な行為、を意味するとわかる。

さらに「自由意志の法則」は、「強者の法則」に置き換えられた。それはつまり、一番強い者が一番弱い者に自分の好き勝手を押しつけている、ということである。

だから、君たちの世界では、発言者が重視されるのだ。その人がどういう役職、タイトル、身分なのかが見られ、話の真偽は問いただされない。質素な者は本当のことを話しても聞き入れられず、権力者、有名人、成功者、その他人間が発明した地位やタイトルに昇りつめた者は、何を言おうと一目置いてもらえるので、好き勝手が言える。そのような有名人の多くが、一般人を操り狂信的にさせる偽りのメッセージを発信しているのだが、なおかつ、他の人びとよりも優れていると見なされている。

「強者の法則」が幅を利かせ「自由意志の法則」が軽視されているのは、宗教の権威者に関しても明らかだ。自らを霊的に進化していると見なす者たちが、実は最も不寛容で理解がなく、頑なで、規則や儀式を厳密に守ることだけに熱心だというのは、なんたることか！そして従わない者を強く非難し、他者の行為や行動を安易に告発するのだが、自身の利己的な悪癖を直すことには力を注がない。霊的な美德とは、他者の考えに対する寛容と理解ではなかったのかね？彼らのどこにその美德があるのかね？

***でも僕は少なくとも今日では、大勢の人たちが、そのような利己的な態度や教会の中で霊性が操作されていたことに気づいて、真の霊的な知識を探し求め始めていると思っています。**

それは肯定的なことだが、知るだけでは不十分だ。真実を見分け、虚偽と区別することが必要だ。なぜなら、霊的な知識を多少なりとも身につけていたとしても、それらがすべて本物だとは限らないからだ。最も大事なものは、愛の感情とエゴについて自分が学ぶことを実践に移すことだ。そうしなければ進歩もあり得ない。

私が言っておきたいのは、特定の靈的な知識を得ることと靈的に進歩することとを混同してはならない、ということだ。愛の感情を発達させて前進するのに役立つべき学習知識が、上品に取り繕って靈性を装ったエゴを野放しにするために使われたら、教会の高位神官が陥ったのと同じ罠に落ちてしまう。

*** それは、どういうことですか？**

さまざまな出処の靈的な知識を知りたがり、それらを勉強することに非常に熱心な人たちが沢山いる、ということだ。しかし知り得た知識を、利益をあげるためや名声・ファンの獲得や自己顯示の手段として利用して、他の人たちより優れていると思えば、実は、愛の感情を育む代わりに、自己の虚栄心の奔放を許すことになる。だが、自分自身を見失うだけに留まらず、それを真似て後に続く者たち混乱させて、カオスをもたらし、他の人びとを靈性の道から逸脱させてしまうことが、もっと罪深いのだ。

イエスは正にこのことを告発し、当時のユダヤの聖職者たちを「盲人たちの盲目の導き人」と称したのである。それゆえ、他者に布教しようと勇む前に、最初に自分自身をよく見ることが非常に大切となる。なぜなら、初めに自分を見ないせいで自己のエゴに気づかず、エゴを排除しようと努めない者は、奉仕の行為において、他の人びとの手本になる資格がないからだ。

*** その点について、具体例を出していただけるとありがたいのですが。**

君に話していることについてのたとえ話をしよう。

とある靈性の学校の教室において、一人の先生が百人の生徒の集団と共にいた。進化の過程の一環としてのさまざまなエゴの段階——虚栄心（見栄）、自尊心（プライド）、自負心（尊大）——と、それぞれの段階でエゴがどのように顕現するかを学んでいた。全学習の最後のまとめとして、先生は、「虚栄心の最大の特徴は自分が主役になりたがる傾向で、他の人以上になりたいと思うことだ。自尊心の最大の特徴は、あるがままの自分を知られるのを怖れることだ。自負心の最大の特徴は、この中では一番謙虚であるとはいえ、まだ完全に謙虚になりきっていないことだ」と述べた。

先生はこの説明の後に、これまで学んだことに照らし合わせて、自分が以上の三つの段階のどこにいるのかを考え、各自それを紙に書くようにと生徒に指示を出した。次に、その紙を回収箱に入れるように各生徒

に伝え、教室の進化レベルを全体的に分析するために、数を調べてみようとした。

用紙の数を確認して結果を調べた先生は、生徒たちに、「君たちのうちの80人が虚栄心の段階で、19人が自尊心の段階にいる。自負心の段階にいるのは、たった一人だけだ」と告げた。

その結果に驚き不満を覚えた生徒たちは、皆でひそひそ話をし出し、お互いに、自分自身にどういう評価をしたのかと尋ね合った。そして意見の一致をみて代表を選び、その生徒が先生に、アンケート結果に納得しかねる旨を表明した。「先生、僕たちはお互いに各人が紙に何て書いたのかを尋ね合ったのですが、先生が仰る結果と一致しないのです。というのも、あなたは自負心に相当する人は一人だと言われましたが、少なくとも10人がそう自己評価しているのです」

それに先生は、「納得できないのなら、君たちが数を調べてはどうかね」と応じた。そこで生徒たちが用紙の入った回収箱を引き受け、数え直したところ、80名の生徒が自分を自負心の段階だとしており、19の白紙回答があり、一人が虚栄心の段階だと見なしていた。

結果が明らかになると、生徒の代表が次のように発言した。「先生、ご覧になりましたか？ 僕たちの言った通りでしたよ。お伝えした通り、僕たちの大半が自負心の段階にいるとしていますよ」

すると先生は「確かに君たちの回答結果は合っているのだが、それが本当の結果ではないのだ」と返答した。

代表になっていた者は「仰ることがわかりません」と言った。

それに対して先生は、喜んで答えた。「今すぐに君たちに説明しよう。自負心と回答した80人は、本当は、自己顕示が好きで他の人以上になりたがる段階の虚栄心のレベルにいるのだ。自負心が一番上のレベルだと知り、最後ではなく何でも一番になりたいので、自己を上級レベルと同一視した。白紙で出した19名は、実のところ、自分を知られる怖れが特徴的な自尊心の段階にいる。白紙で提出したのは、自分を知られるのが怖いからなのだ。唯一虚栄心に投じた人が、実は、自負心の段階にいる者だ。確信が持てない場合に一番下の段階を選んだので、全員の中では最も謙虚な人である」

*** 謙虚さに欠けるのが自負心の特徴ではありませんでしたか？**

謙虚さの欠如はすべての段階で見られる。虚栄心でも、自尊心でも、自負心でもだ。他の二つよりも進化が遅れている虚栄心の段階では、最も顕著なのである。

だが、真に謙虚になりきることは非常に困難なのが実情である。自負心の段階にいる魂たちでさえ、まだ尊大のエゴを完全に抜け切れてはいない。自負心とは謙虚さに欠けることだと言ったのは、他の欠点を克服しており、これが越えるべき主な欠点として残っているからである。一方、虚栄心と自尊心には、謙虚さの欠如の克服に取り組む前に、乗り越えるべき他の欠点がある。

謙虚さに欠くことを自覚しているだけで、自負心の段階に到達したと知っている人たちがいるが、それは尊大であることを率先して自覚したいからではないのだ。単に、自負心が自尊心や虚栄心よりも進んだレベルであるがゆえに、自分を他の人たちよりも上位の、霊性進化の最上階にいると思いたいだけなのである。他の人たち以上になりたがり、誰の下にもなりたくないというこの特徴こそが、虚栄心独自のものである。

*** まだはっきり理解できていないので、前述のお話の教訓を正確に説明していただけるといいのですが。**

あの話で明らかにしたかったのは、自分自身のエゴを認めることは非常に難しいということだ。だから君たちは、改善のための真の努力をするよりも、エゴが見えないようにごまかすのに一生懸命だ。

だが、それでは君たちは否応にも停滞してしまう。自分のエゴを認めようとしなない者は、それを克服できないからだ。

君たちは、手を差し伸べてくれて、君たち自身にどういうエゴが顕れるのかを教えてくれる人たちの助言を、嫌がって受け容れようとしなない。耳に心地よい賞辞ばかりを貰いたがるが、真実は聞こうとしなない。君らを褒めてくれる人たちのことは称えるが、成長できるようにと本当のことを言ってくれる人たちのことは非難する。これでは、前進は困難だ。

*** でも、僕たちは霊的な覚醒の時代を生きていて、他の人たちのために何かをしたがっている人が沢山いるのではありませんか？**

今日では、霊性を目覚まして、他の人たちのために何かをしたいと言っている人は大勢いる。それ自体は善いことだ。しかし、他者を助ける以前に、自分自身をよく見つめ、それをしたいのは他者を助けるためなのか、それとも他者から称賛や認知されたいためなのかを知るべきである。

もし後者であれば、何もしない方がよい。まず自分自身を眺めて、自分の力がどこまで及ぶのかを見てみる必要がある。人びとを助けるのは簡単なことではなく、大変な修練が必要となる。能力がなければ、些細なことでも嫌になるし、他者を助ける代わりに混乱させてしまうことになる。

***あなたの言葉からは、各人にはそれぞれの愛する能力があり、全員が他者のために同じことができるわけではない、というふうに理解しますが、本当に隣人を愛したいと思った場合に、人が最初になければならないことは何でしょうか？**

第一歩は、自分自身のエゴを認め、他の人に対してエゴ的に振舞うことを避けようと強く決意することだ。この経緯をなくしては、もっと進歩した段階へと上れない。自己の内面を掘り下げ、エゴ的な部分を認識しようと努める者はめったにいない。そのため、道程の最初の箇所で行き詰ってしまい、それ以上は一步として進んで行けないのだ。

必要とされる霊的な援助を受けながら、正しいやり方で、他者を助ける役目を開始する人たちは存在する。だが、往々にしてその人たちは、その立場が心地よいので、授けられるもので満足せずにもっと貰いたがり、自分の能力以上のものを欲しがるのだ。

しかし、内面の能力とは、一朝一夕に向上するものではない。大変な努力と長い進化の時間を要し、多くの転生でたゆみなく、エゴを排除して愛の感情を発展させていくことが求められる。だが、このような個々の努力を多くの人が避けたがる。皆、魔法によって、杖で触られるだけで、天才的な力を持った魔法使いにしてほしいのだ。そして愛だけで自分を満たすことをやめ、他者の称賛や感嘆を求め、野心を持ち、願望が現実だと信じ込むようになる。

そうなると自らのエゴによって、エゴが招いている思考を霊的なガイドからのメッセージだと勘違いし、人の注目を浴びたいがためにしていることを、他者への奉仕だと思いついてしまう。霊的に進化することはどうでもよくなり、そう見せかけるだけになる。

この危険性を、よく認識できている人もいるが、エゴはとても巧妙かつ示唆的に、我々を言いくるめるものである。そのことをよく自覚していないと、霊的に進歩していると思っても、実際には自分のエゴを増長させているだけになる。隣人愛を育む上で、特に邪魔になるエゴの形態があるので、それと闘わないでいると、隣人への愛の試みを、隣人を利用する試みに置き換えてしまうことになる。

***隣人愛を育む上で邪魔になるエゴの形態には、どんなものがありますか？**

邪心、妬み(嫉妬心)、野心、偽善、主役になりたがる傾向、傲慢である。

*** それらを今見てみるができますか？**

よかろう。

*** では、邪心について話してください。**

邪心や悪意は、わざと痛手を与えようとする意思や意図を持って行動する者を、定義する時のエゴ的感情である。当人はそのことを意識していて、他者を苦しめることに満足や快感を覚える。悪巧みをする人は、見つからないように、最大限の弊害を与える策を練ることに知恵を働かせて、偽善をも増長させている。邪心は、妬みや野心といった他のエゴ的感情で培養されるので、悪巧みをする人は、同時に妬み深く野心家であることが多い。

*** 妬みについて話してください。**

妬みとは、自分が欲しい何かを持った人たちに対する嫌悪や反感として顕れる、エゴ的感情である。その何かとは、物的な所有物であることも、物的・知的・霊的な資質である場合もある。

つまり、相手の持つ富（物的な所有物）を妬むことも、美貌（物的な資質）や知性（知的な資質）、善良さや愛する能力（霊的な資質）を妬むこともあるのだ。

妬みは、他の人以上になりたいという願望から生まれるので、虚栄心に際立って見られる。他の人以上になろうとするので、常に自分を他人と比較することになる。嫉妬心に囚われた人は、妬んでいる相手を蔑んで損害を与え、批判するためであれば、どんな策でも弄することができる。嫉妬深い人は他の人たちの不幸を喜び、他の人たちが喜んでいるのを見ると残念に思う。

*** 霊的な成長のさまざまな段階で、妬みは同じ形で顕れるのでしょうか？ 微妙な違いがあるのでしょうか？**

多少の違いはある。

物的な物事に対する妬みは、虚栄心の初期の段階から虚栄心の進歩した段階までの特徴であることが多いが、霊的な資質に対して目覚める妬みは、虚栄心の進歩した段階から自尊心、あるいは自負心に至るまで見られる。

虚栄心の進歩した段階にいる者は、物的なものも霊的なものも妬む。自尊心のある者は、特に霊的なものと愛情に関するものに嫉妬する。

*** 妬みは、虚栄心（見栄）のある人に具体的にどう顕れますか？**

見栄っ張りな者は、自分にはない財産や資質を所有する人を妬む。

嫉妬深い見栄っ張りは、妬んでいる相手の悪いイメージを創り出すために、人前でその人を侮辱し、悪口を言い、批判する傾向にある。つまり、自分がその相手の被害者なのだとの人たちに信じさせるためや、その人への攻撃を正当化したり隠蔽するために、事実を曲げてしまうのだ。暗示や操作、犠牲者のふりや嘘と偽りで、妬んでいる相手を貶めるという狙いを果たそうとする。

その方法で目的が達せられないと、言葉の暴力、脅迫、恐喝、強制、さらには肉体的な暴力などの、もっと直接的な手段に訴える。理があるのは自分だと自分自身を納得させ、自己の憎悪や反感を正当なものだと信じている。何よりも自己の願望を満たすことを優先し、他の者に及ぼす損害は気にかけない。

***では、自尊心（プライド）のある人にはどう顯れますか？ 具体的に何を妬むのでしょうか？**

プライドの高い者は見栄っ張りな者とは反対に、物的な所有物を持つ人を妬みはせず、愛情が絡む物事を妬みやすい。プライドの高い者が妬む最大の要因が、愛情に関するものなのだ。まだ愛する対象に出会っておらず不幸に感じていれば、他の人たちの間に存在する愛の感情を妬むことがある。

例を挙げてみよう。嫉妬深いプライドの高い者が、ある人に恋をしたとしよう。もしその人が気持ちに伝えてくれず、他の人を愛していたとしたら、嫉妬深い者は、自分が欲しいものを相手を持っていると思い、愛の受け手を妬む。つまり、自分の愛が奪われたと思うので、自分の競争相手だと見なした人に対する反感が目覚める。

プライドの高い者は、愛情への嫉妬に囚われると、自分の本当の感情を知られまいと懸命になる。他の人に自分の気持ちを隠し、その裏で欲しいものを手に入れようとするが、拒絶されるのが怖いので、はっきり意思表示をすることがない。愛していると思っている人を獲得するために、ライバルと見なす相手よりもいい点数を稼ごうとする。褒め言葉、礼儀正しい態度、ほのめかし、魅力、説得などを駆使する。

だが、欲しいものを手に入れるのが不可能だと、自分の殻に閉じこもって、悲しみ、憤り、無力に浸る。孤立し、その状況から立ち直るために差し伸べられる援助を拒む。一方、もっと感情について知っていて、その知識を使って感情を痛めつけることができるので、虚栄心のある人よりも相手に深い傷を負わせられる。

たとえばカップルの間に不和を生み出し、自分の愛の対象となる人に、その人が実際にはパートナーから愛されていないと思わせるために策を練ることもある。二人の間に疑いの種を蒔ければ、それを利用して、後

釜に座ろうとする。嫉妬で盲目になり、愛すると思っている人の自由意志を侵害していることなど意に介していない。相手の意志も、その人が自分ではなく別の人を愛していることも尊重できていないからだ。

*** 妬みはどのように乗り越えますか？**

初めに、自分が妬んでいることを認めること。自尊心のある者は、虚栄心のある者よりもエゴ的感情をよく理解しているので、妬んでいることを自覚できる。

残念ながら、妬みは、君たちの世界で頻繁に見られるエゴ的感情である。しかも、大多数の者は妬んでいることを認めたがらないので、停滞してしまうのだ。自己の悪癖を認識しない者は、それを修正することができないのである。

妬みを克服するには、他の人たち以上になりたいという願望を放棄する必要がある。他者の持ち物を所有したいという欲望を放棄し、幸福になれるかは自身の資質と感情とを覚醒できるか次第で決まるので、人から何も奪う必要はないと気づくことだ。

邪心や妬みも、大なり小なり他者を拒絶すること——毛嫌い、嫌悪、恨み、憎悪に至る——であり、隣人愛とは正反対の一番邪悪なエゴ的感情を培養するので、幸せになる代わりに不幸の主原因である心の病気になるやすい。望むものを手に入れるのが不可能だと、憤り、無力感、悲しみが生まれる。

*** では、どうやって邪心を克服するのですか？**

これは理解や自覚によって解決するのが難しいエゴである。邪心を患う者は、自分が痛手を与えていることを完全に自覚しながら行動しているからだ。邪心のある者は、苦悩を生み出すことに執念を燃やしている。他者にしたことを自分が身を持って苦しんでみるまでは、改悛の情を持ち始めることがない。

こうして気弱で無防備な状態になった時に、かつて自分が犠牲にした人たちから利他・無条件の愛の行為を受けると、思考回路が覆り、決定的な変化を遂げさせる一打となる。常に計算づくで動くことに慣れているので、自分がこっぴどく痛めつけた人たちが復讐のチャンスがありながら、赦してくれて手を差し伸べてくれるのが理解できないのである。

彼らの邪心が溶解して、過去の自分の犠牲者たちへの揺らぎない忠誠心にとって替わるのは、この時である。彼らが恩赦にも救済にも値しないと知っていたにもかかわらず、赦してくれて、助けを求めた時に救ってくれたからである。

*** 今度は野心について話してください。**

野心とは、所有または支配したいという強力な願望である。

野心の対象が物的な形態であれば、強欲や貪欲の形で顕れる。つまり強欲や貪欲は、実際には野心の変種なのである。

領土や人に対する権力欲や支配欲も、野心の別の異形である。

野心家は、何でも人の上位に立つことを狙い、誰にも主導権を握られたくないの、嫉妬深い人でもある場合が多い。

野心家は、手に入れていくもので絶対に満足せず、飽くことなき所有欲を益々募らせていく。目標としたものを獲得するにつれて、幸せになれると思っているが、目指すものを得るとそれで納得せずに、常にそれ以上のものを欲しがる。そうして、もっと過度で獲得困難な目標物を探し出す。

*** でも、世界平和や飢餓の撲滅など崇高な目的を野望に抱く人たちもいますが、正しい行為ではないのでしょうか？**

それらは野心ではなく、大望である。野心と大望という言葉のここでの意味づけの違いは、野心は崇高な概念に基づかないとしていることだ。

野心家は、利己的な考えで動き、行動する際に良心の咎めを感じにくい。自分の持っているものでは決して満足せずに、所有したい、支配したいという熱意は留まることがない。つまり、野心は飽くことを知らず、過度になっていく。野心家は倫理的・道徳的な紀律を全く尊重せず、目的は手段を正当化すると考えているので、自由意志を大切にできない。そのため、往々にして自分の見解を人に押しつけ、失敗を認めがらない。

見込みが外れると激怒し、目的を達するために、さらに攻撃的で有害な手段に訴える。つまり、自分の欲しいものを正当に手に入れられなければ、不当な手段で獲得するのだ。だから、他の人たちに損害を与えずに野心を満たすことは難しいのである。

*** 野心はどう克服しますか？**

所有したいとか支配したいというような強力な願望では幸せになれるどころか、自分自身に動揺と不安を生み、他者にあらゆる苦悩を与えると気づくことだ。行き過ぎた野心は、極度に有害なエゴが現れ出したものである。過度の野心に支配された人は、人類に最大の弊害と苦悩をもたらすが、同時に、自分自身でも大きなカルマの負債を負う。

人類の最大の犯罪者は、この物質界の所有者になろうとして、思いのままに政治や国際金融の糸を操ってきた権力者たちである。世界支配を渴望し、自分たちの富と権力を増やせるのであれば、何百万という人た

ちに苦悩や死を引き起こす決定にも躊躇しない。だが彼らは、自分たちが生み出した苦悩が全部、靈的次元に戻った際に、自らの身に降り注いでくることに気づいていない。

一生懸命獲得したものは全部、一切合財、物質界を去る時に失うことになり、靈界に移った時に待っているものは、カルマの巨大な債務である。そして、他の人びとに与えたあらゆる苦しみを、自分の身を持って味わうことから返済していくのだ。彼らの魂は犯した罪を全部修復し終えるまで苦しみ続けるが、それには大変長い時間がかかるので永遠に思えるほどである。

*** 次は偽善について話してください。**

偽善は、それ自体がエゴ的感情というより、虚栄心の顕れである。それは、いいイメージを与えようとして、実際には違うもののふりをする事だ。偽善者は靈的な進化を望んではおらず、褒め称えられたいために、そう装っているに過ぎない。自己変革をしようと思わず、世間体を繕っているだけなのだ。それゆえ偽善は、靈的進化の大敵である。自己のエゴの改善や排除の努力をせずに、エゴを隠して、偽りの慈善のイメージを人に与えるからだ。狡猾に行動して、他者のためになる本当に善良な人だと思われようとするが、実際には自分自身のエゴを満たすために行動する人たちである。

偽善的な態度は、政治においてよく見られる。特に選挙の時期にはそれが顕著で、候補者は誰もが投票してもらおうとイメージ作りに熱心で、市民の状況を改善しようと望んでいるふりをする。だがひと度権力に就くや、自分自身や恩がある者への利益を優遇する。

これは政治に限ったことではない。あらゆる分野で、本来の自分とは異なった顔をして、他者を利用する傾向にある。他者を愛するふりをしてしながら、その外見的な善意の陰に、人から認められたいとか、名声・富・権力への願望など、利己的な目的を隠している人が大勢いるので、偽善は人類愛の大敵である。

*** 本当に善意で行動している人と、ただそう見せかけたい人とをどう区別したらいいですか？**

善意の人は正直に利他の精神で行動し、言うことと行うことが一致している。偽善者はふりをしていて、言ったことと全く別のことを行うなど、常に矛盾している。これで違いは明らかだ。

たとえば、謙虚だと自慢しがちであるが、本当に慎み深い者は、他者のために良いことを行っても自慢したりしない。それを行うだけで充足できるからである。だが偽善者は、何らかの見返りを貰えない限り、誰

のためにも何もしない。偽善者はいつかはミスを犯し、その利己的な目論見が露になる。その時に、化けの皮が剥がれてしまうのだ。

*** 偽善を乗り越えるためには何をしたらいいですか？**

最初にそれがあることを認め、打ち克つ努力をしなければならない。また、生涯にわたって芝居を続けるのは疲弊することで、虚しさを生み、それゆえ不幸になると気づくことだ。霊界では自分を偽ることは不可能で、人は見せかけたいと思うようにではなく、それぞれがあるがままに見られるので、霊的な視点からも無駄で無益な努力である。

偽善は他の人たち以上になりたいという願望から生じるので、虚栄心と主役になりたがる傾向との関係が深い。その願望を手放せれば、偽善を克服できるかもしれない。

*** 次は、主役になりたがる傾向についてお話いただきたいです。**

主役になりたがる傾向については前にも話したので、ここではあまり取り扱わないことにしたい。繰り返しになるからだ。

要約すると、主役になりたがる傾向は、注目の的になって注意を引き付けたいという願望である。これは虚栄心の段階で一番強く見られるもので、名声や成功、他者からの称賛や賛辞への願望となって表れる。

この傾向は自尊心と自負心の段階でも表れるが、その場合は、愛情不足や愛されたいという願望が原因であることが多い。自尊心や自負心のレベルにいる人たちが自己顕示欲が強いと、傲慢になる。傲慢な人は、他の人たちに勝っていると感じていて、優越的、高圧的に行動する。

*** 人から好かれたいと思うのは別に悪いことに思えませんが。**

好かれたいのも悪いことではないが、それが正しいやり方ではないのだ。何かの見返りを期待して行動する人は、それが得られられないと失望したり怒ったりするので、他者のためだったのではなく、利益のためであったとわかる。本当に愛する者は、人から認められる必要もなく、人のために行動するだけで満たされる。

それに、私たちを好きになるかを決めるのは我々ではなく、相手の意志次第であることに思い至らなければならない。相手にしてあげたことへの感謝の意として、私たちに対する好意を要求することは、その人の自由意志を侵すことになる。

*** 主役になりたがる傾向と傲慢とは、どう克服すべきですか？**

謙虚になる練習をすることだ。

***では謙虚さとは正確には何でしょうか？ 定義できるものですか？**

謙虚さとは完全に正直に包み隠さず率直に行動でき、自己の美德を自慢せずに自分の欠点と過ちとを認められる人に特有の、靈的資質であると定義できる。靈的に人の役に立つためには、謙虚さという資質を伸ばすことが欠かせない。謙虚でなければ、自画自賛や自己崇拜に陥ったり、自惚れたり傲慢になってしまう。

***謙虚さに欠けると、どうして自画自賛したり自惚れたり、傲慢になったりするのですか？**

他者の支援に関心のある人がどんどん皆の注意を引き付けていっても、当人が謙虚でなければ、きっと自分自身に陶醉して失敗することだろう。大勢の人びとの注目的的であると感じれば、必ず主役になりたいと思う気持ちが暴走する。自己のエゴをよく内省してみなければ、他の人よりもすごく、勝っていると思い込んでしまうのだ。

この時、何よりもこの人の動機となっているのは、もっともっと沢山の人たちからの注目・称賛・賛辞を獲得したいということだ。もっとも良識的なやり方で大変巧妙にやれば、靈的な内面を把握する能力の大きい魂にしか最初は気づかれないかもしれないが。

また、より高い靈的な素質を示す人たちを自分のファンを奪うライバルだと思わせて、その人たちへの妬みが芽生えることもある。比較されることによって当人の欠点が歴然とする場合は、狡猾かつ悪意を持ったやり方で、その人たちを卑下しようとする。

往々にして、自分の直属の特権的なポストに、十分な能力はないものの言うことはよく聞く従順な部下を配置する。こうなると、人の役に立ちたいという動機は二次的になり、より多くの信奉者を獲得する抗弁として使われるだけとなる。

こういうことが起こるのは、謙虚さを育まなかったからである。つまり、完全に正直に包み隠さず率直に行動せずに、欠点（主役になりたがる傾向、傲慢と妬み）を認めることもなく、自分の徳だと思っていることを自慢するからである。

***そういう見方をするなら、隣人愛や人助けは不可能に思えます。主役欲に囚われることなく求められる謙虚な状態に達するのは、非常に難しいです。一体、エゴの罠に陥ることなく、隣人を愛したり、人を助けることなどができるのでしょうか？**

もちろんできるとも。心からそう望み、自分自身のエゴを見張って、エゴが顕れた時に気づいて、意思を支配されないように頑張るなら可能となる。

自惚れたり思い上がったらずに自分自身の能力をわきまえて、それ以上のことをしようと望まないことだ。人助けをしようとする場合に、皆より目立ちたいというのが目的であってはならない。また、他の人たちが行っていることと競い合っても比較してもならない。単にそれが誰かの役に立つかもしれないことだけで、満足して行動すべきである。これが、無条件の愛に向けて確実かつ安全に歩を進める秘訣である。

「愛の法則」から見た十戒

※（注） 十戒とは、モーゼに率いられたイスラエルの民がエジプトから脱出した後、シナイ山で神から授かったとされる10の戒律で、旧約聖書では、申命記5章と出エジプト記20章に記載されている。プロテスタントやカトリックなど宗派の違いで多少内容が異なるが、「愛の法則」では、スペイン・カトリック教会の教義の十戒をとりあげている。

スペイン語版、カトリック教会における十戒

1. すべてに優先して主なる神を愛せよ。
2. 神の名をみだりに唱えてはならない。
3. 祝日を聖なるものとせよ。
4. あなたの父と母を敬え。
5. 汝、殺すなかれ。
6. 不純な行為をしてはならない。
7. 盗んではならない。
8. 偽りの証言をしたり嘘をついてはならない。
9. 不純な考えや願望を抱いてはならない。（元来存在しない）
10. 人の財産を欲してはならない。

イザヤの十戒

1. 神と隣人とを自分のことのように愛しなさい。
2. 神の名を、利己的な目的を正当化するために使ってはならない。
（霊性で商売をしてはならない）
3. 少なくとも週に一日は休日として、仕事を休むためにとっておきなさい。
4. 君たちの人生を取り巻くすべての人たち、特に最も傷つきやすい者である子どもたちに対して、慈愛、尊重、理解を示しなさい。
5. どのような形であろうと、いかなる理由であろうと、絶対に命を絶ってはならない。
6. 望まない性行為を誰にも強いてはならない。
（感情の自由を尊重せよ）
7. エゴに突き動かされて、他者に損害を与えてはならない。
（公共の益・社会の正義・富の公平分配を促進せよ）7・8・10の統合
8. 自由意志を尊重せよ。
9. 霊的裁きの法則を尊重せよ。
10. 個人的または集団的な争いごとを平和に解決せよ。

旧約聖書の申命記と出エジプト記に書かれてある十戒
(括弧内は、原典のヘブライ語訳からのイザヤの解釈)

1. わたしのほかに何ものをも神としてはならない。(唯一の神)
2. 自分のために、偶像を造ってはならない。
(神のように崇めるために偶像を造るのはやめなさい)
3. 神の名をみだりに唱えてはならない。
(神の名を、欺くために使ってはならない)
4. 土曜日を心に留め、これを聖なる日とせよ。
(6日間は働いてすべての仕事をし、7日目はいかなる仕事もしてはならない)
5. あなたの父と母を敬え。
6. 汝、殺すなかれ。
7. 姦淫してはならない。
(売春してはならない)
8. 盗んではならない。
9. 隣人に対し、偽りの証言をしてはならない。
10. あなたの隣人の家——妻、奴隷、牛、ろば、すべて——を欲しがってはならない。

***十戒（モーゼが神から与えられたとされる10の戒律）の元となったのは何ですか？ 神自身が口述したのでしょうか、それともモーゼが発案したか、誰か別の人間が作ったのでしょうか？**

神自身ではない、そうだとするのは言い過ぎだろう。しかし、君たちが十戒と呼んでいる最初のものが、高度に進化した存在たちによってモーゼに伝えられたのは確かだ。高度に進化していたがゆえに、彼らを神の使者だと考えてもらっても構わない。

***それらの存在は、どんな目的で十戒を伝えたのでしょうか？**

その時代の人びとに、霊性とはいかなるものかという基本的な概念を与えるためだ。だが高次の存在は、何かを要求したり義務付けたりすることがないので、戒律というよりは助言であったと言った方がよい。それゆえ、それを十戒と名付けたのは間違いなのだが、君たちが聞き慣れているのなら、引き続きそう呼ぶことにしよう。

***真実であるものが少しでも残されたことに感謝します。**

とはいえ、改ざんや改変、加筆などの標的にならなかったわけではない。

***そんなことだと思っていました。で、改ざんされたものはどれで、されなかったものは何ですか？**

もしよかったら、一つ一つ見てみよう。歪曲されているものは、後世のもので歴然としているので、君たちにもわかることだろう。旧約聖書に書かれた内容と、カトリック教会で公認された十戒とを比較すればいいだけだ。

***では、最初の戒律から始めましょう。カトリック教会によると、それは「すべてに優先して主なる神を愛せよ」ですが、これは何をいわんとしているのでしょうか？**

これは良い戒律だが、エホバがモーゼに十戒を与えたとされる申命記（モーゼ五書の一書。十戒は旧約聖書では、申命記と出エジプト記に記載されている）では見当たらない。

これはむしろ、当時の律法学者に「すべての戒めの中で、どれが第一のものですか」と問われたイエスが、「第一の戒めは『イスラエルよ、聞け。われらの主なる神は、ただ唯一の主である。心をつくし、魂をつくし、意志をつくし、力をつくして、主なるあなたの神を愛せよ』であり、第二は『自分を愛するようにあなたの隣人を愛せよ』である」と答えたことに由来する。

しかし、申命記においては、「あなたはわたしのほかに何ものをも神としてはならない。また自分のために、偶像を造ってはならない。上は天にあるもの、下は地にあるもの、あるいは地の下の水中にあるもの、いかなるものの形も造ってはならない。それらを拝んではならないし、それらに仕えてはならない」となっている。

*** どちらが本物なのですか？**

両方とも霊的に高次のものだ。モーゼのものは、その時代に頻繁に見られた多神教と偶像崇拜に対する風刺である。神が唯一の存在であること、そして、偶像を崇拜しても主たる神には届かないし霊性とも無関係であると伝えたのだ。つまり、「神のように崇めるために偶像を造るのはやめなさい」と告げている。

イエスのものは、神が唯一であることを認めた上で、より高度な要素が付加されている。それは、「神と隣人とを自分のことのように愛なさい」ということで、「愛の法則」の要と言えよう。

*** 二つとも正しいのだとしたら、何が問題なのですか？**

私には、何の問題もないよ。カトリック教会の十戒が申命記にも記載されていて、エホバが——ヤハウエと呼ぼうが構わないが——モーゼに告げた通りのものであると頑なに信じている者にとって、問題となるのだろう。でも、実はそうではないところに近世のペテンがあるのだ。

旧約聖書に書かれていることに的を絞って見るならば、第一の戒律はイエスのもので、モーゼのものではない。

*** ではどうして、そのように変えたのでしょうか？**

申命記の戒律では、「神のように崇めるために偶像を造るのはやめなさい」と人に告げている。しかしながら、よく観察すると、カトリック教会はこの掟に背いている。彼らは、多くの聖人や聖母、またイエス自身のあらゆる種類の、おびただしい数の像を崇拜することに力を入れているからだ。ルターのような宗教改革者にも気づかれたこの矛盾をなくす策の一つが、この戒律自体を削除して、他の体裁を繕えるものにすり替えてしまうことだった。

*** なぜカトリック教会は、聖像を崇拜するようになってしまったのでしょうか？**

これもすでに話したことだが、コンスタンティヌス皇帝以後のカトリック教会は、それ以前の宗教の慣習と儀式とを採り入れたのだったが、それらの宗教では神々への偶像崇拜が一般的だったのだ。この風習は口

一マ帝国のさまざまな地域において根強く残り、コンスタンティヌス帝が布告した強制的な改宗をもってしても、簡単に一掃できなかった。

しかも教会にとっても、この習慣を排除することは得策ではなかった。というのも、偶像やそれらへのお供え物を崇めさせておけば、人びとの気を逸らせておくことができ、真の霊的な価値観を問われることも、それに相反する彼らの利己的なやり方が問題視されることもなかったからだ。

こうして、過去の男性神の数多な偶像は、聖人やイエスのものに替わり、女性神の偶像は聖女や聖母のものとなった。除外されたものは、新しい宗教の聖像にするのが不可能だった、動物の像のみであった。

私の話が意外だとしたら、もっと時代が近い、似たような現象を見てごらん。アメリカ大陸が征服されて先住民は強制的に福音化されたが、いまだに、先コロンブス文化の神々への崇拜と祭りが続いている。今では、かつての神々の名が、教会の聖人の名前に置き換わっているだけなのだ。

以上のことが、ユダヤ教徒が偶像を崇めない理由の一つになっている。他方、カトリック教会もユダヤ教会と並んで、十戒を正式に認めると宣言しているにもかかわらず、信者は偶像を崇拜しているのだ。

*** 霊界が儀式についてどう思っているのか、もう少し深く教えていただけないでしょうか。というのも、人間が宗教を信仰するのは、祭りが神聖と見なされている影響が大きいと思うのです。**

儀式というものは、それを執り行うことで神に近づけると勘違いした人間が発明したお遊びに過ぎないのだが、実際には、真の霊性に人が近づくことを阻むカモフラージュにされている。

祭式は、人間社会の慣習と感受性の度合いに応じて、時代ごとに変化していった。過去の時代においては、人間を拷問したり生贄にすることで神々が満足すると信じられていたために、儀式というものは身の毛のよだつ行為であった。のちに人間の生贄が動物の生贄に取って替わり、今日でもこの習慣はさまざまな地域社会に残存している。イエスのお陰でキリスト教の社会では動物を捧げる風習はなくなり、それほど残酷でない儀式に置き換わった。

しかしながら、神や霊性の導き手たちが彼らの援助と引き換えに、祭式や捧げ物を要求したり必要とすることなどないと知っておくことだ。彼らは、この習慣を進化の乏しい人間にありがちな特性だと思っており、捧げ物をすることで命が奪われたり、苦しみや痛みが生まれることに悲しみを覚えている。そして、それをする者たちが自らを騙してしまっていることを悲しく思う。それというのも、人間や動物を犠牲にするよう

な残酷な儀式は「愛の法則」に反するものなので、実際には意図したこととは反対に霊的な債務を負うことになるからであり、無害な儀式でも霊的な観点からは無意味であるからだ。

また、聖地とされる場所に巡礼する必要もなければ、それを要請されることもない。願をかけて長期間絶食するといった馬鹿げた行為も、自分を鞭打つことも、健康を損なうリスクがありながら誰の得にもならない、苦痛を生み出す無意味な肉体的なせっかんも不要だ。求められるのは、前進したいという意志のみなのだ。

これまでに何度となく繰り返してきたが、もう一度言っておこう。霊的な向上に役立つのは、エゴを排除し愛の感情を育むことにおける我々の進歩のみである。そしてこれには、日々の努力が欠かせない。それゆえ、霊性の道に近道など存在しない。つまり、多くの人びとが望むように、自己努力をせずに目標に達する、手段も儀式も存在していないということだ。儀式というものは、偶像崇拜やお祈りを繰り返すのと同じように、霊的な視点からは意味のないものだ。

***特定の儀式やおまじないによって、霊的な力を獲得できると約束する人もいますが、そういうこともあるのでしょうか。**

そんなことはもちろん、愚か者だけが騙されるでまかせだ。前に説明した筈だが、テレパシーや透視力といった能力が発達するのは、愛における霊的な向上が見られる時だけだ。だから、そのようなことを実践して、超人的な能力を獲得できる者などいやしなない。

***しつこく聞いて申し訳ないのですが、魔術やおまじないについてはどう思っていますか？ 効き目があるというのは本当ですか？ つまり、ブドゥー（黒魔術）や呪いのように危害を加えることが目的であっても、人が願い事をする時には、ある種の霊の協力を得られるのでしょうか？ また、何か根拠があるのでしょうか？**

まじないも魔術も、霊的な実習とは見なせない。まじないとは、儀式と同様お遊びであり、宝くじに当たりますように、という他愛もないもののこともあるが、時にはゾツとするものもある。他者に損害を与えようとして願をかける場合などは、利己的な意図が明らかである。

確かに中には、悪い目的を持った人間の要求に応じようとする、ネガティブな存在がいる。彼らも似たような悪い意図を持っていて、特定の人に害を及ぼそうとするのだ。

だが、そうは言っても、それが成就されるとは限らない。人に危害を加えたい霊や人間がそう望むだけで、誰でも好きな人をいじめることが許されるとしたら、それは、肉体を持って生まれた者たちの自由意志を

侵害することになる。ネガティブな存在たちに、好き勝手に人を痛めつける能力があったとしたら、皆がメチャメチャにされてしまうだろう。

しかし、すでに話したことだが、彼らが影響を及ぼすことのできる範囲は限られている。ネガティブに感化することができるのは、そのような悪い影響を甘んじる低波長の者たちか、恐れや自己暗示によって、そうなると信じてしまう者たちなのだ。したがって、このような悪い靈に感応しないように防衛するには、各自の人生に対する姿勢が一番有効である。人を傷つけないように気を配りながら、善い意図を持って行動する者は、自動的にこのような影響力から身を守ることができる。

それよりも、魔術で他者を不幸にしたいと思う者の方が、この手の行為の被害者になりやすい。悪霊たちは、誰にも危害を与えることができないと、悪いことを企んで自分たちを呼び込んだ者自身に影響して、餌食にしてしまうのだ。

他者に黒魔術を使った者は、原因と結果の法則において、将来人から呪われることになる。そうして自分自身で、他人に及ぼした忌まわしい行為の結果を体験することとなる。

*** それでは、誰かに呪われているため、または悪霊に苦しめられているために気分がすぐれない、と言っている人たちをどう思われますか？**

ほとんどのケースが事実ではない。気分が悪いのは本当だろうが、それは呪われているからではなく、自分自身の感情的な問題や利己的な行為が原因となっている。また、靈に嫌な目に遭わせられるかもしれないと信じることで怖くなり、悪霊という恐ろしい存在を自分の想像力で創りあげてしまう人もいる。そしてそのことによって、自分の力を失い、精神的にも落ち込んで、自己暗示によって不快になってしまう。不快感の原因が何であるのかを突き詰めて考えるよりも、それを人のせいにした方が簡単なので、そういうことになるのだ。

*** でも、実際にネガティブな靈の影響を受ける場合もあるのでしょうか？ 悪魔に憑かれてしまった人とか、悪霊に支配されてしまった人もいますか？**

悪魔は存在しないので、悪魔に取り憑かれてしまった人はいない。記録に残る「悪魔憑き」のほとんどが実際には、強い心理的錯乱がある精神患者で、極度のトラウマ状態を経験したことや、狂犬病などの伝染病の犠牲となったことによる。

だが、エゴ的な感情が起こるとネガティブな靈の影響を引き付け、それがより一層助長されることになるというのは本当だ。人からかけられた呪いが効いたのではなく、自分自身で招いた状況なのだ。

さまざまな要因で、大なり小なり憑依的な霊に左右される人がいるのも確かである。その理由としては、悪い霊との交信を望んだためとか、彼らに感化されやすい弱点——たとえば麻薬を常習しているなど——があるとか、極端にネガティブな利己的な態度をとったせいである。

他に、過去に悪いことをしたせいで、その復讐をしたがっている霊にさいなまされる場合もあるが、通常その影響力はかなり限定されている。一般的には、被害者となる人に否定的な思考を起こさせるだけで、その人に取り憑くことはない。

霊媒となる才能がある人は、その資質ゆえに霊界との交信が取りやすく、コンタクトも強いものとなるので、ネガティブな霊にもっとはつきりと邪魔されやすい。でもそれは低俗な本能や邪悪な行為に引きずられた場合だけで、ホラー映画に出てくる悪霊に取り憑かれるケースなどは全くの作り話だ。

***では、そのような場合には、どうしたらその影響を振り払えるのでしょうか？ いわゆるエクソシスト（悪魔払いの祈祷師）は、悪霊の影響を払う特別な力があるのでしょうか？**

もう説明した筈だ。ネガティブな存在に悩まされるのなら、それは通常は、我々がその霊を呼び込むような態度をとってしまったことを反映しているのだ。だから、肯定的な態度に変わることで、つまりエゴによって生まれた悪習を断つことが、その影響からの解放に繋がる。何か特別な儀式やまじないを行うことで振り払うのではない。君たちがエクソシストと呼ぶような祈祷は、無益なだけでなく馬鹿げている。

***エネルギーを通すことで被害者のエネルギー体を綺麗にすることは、ネガティブな霊の影響を払う役に立つのでしょうか？**

エネルギーを流す人が良いパイプ役であり、その能力を利己的な目的に使用しないのであれば、助けになれる。高次の霊たちがその人を通して活躍するので、悪い影響を振り解いてあげることができるからだ。

だがそれをしてもらっても、否定的な態度を変えようとしなければ、その効果も一時的なものだ。したがって、ネガティブな存在たちの影響を振り解くのは他人に頼るのではなく、自分次第なのである。

***自分の態度が悪くなくても、ネガティブな霊がいる雰囲気を感じ取れる敏感な人もいますか？**

そういう人もいて、疲労や倦怠を感じるが、不快感は長くは続かず、その場所を離れば消失する。つまり一部で信じられているように、低

波長の霊たちが頻繁に出入りする環境にいたからというだけで、悪い霊に憑かれて苦しめられることなどない、ということだ。

時折そのような悪い雰囲気は、肉体を持った者自身のエゴ的感情によって生じている。繊細な人であればそれを感じ取って気持ちが悪くなるが、それも一時的な感覚であるものだ。

*** いわゆる「超常現象」を発生させることのできる霊がいるというのは、本当でしょうか？ 物が動いたり、照明や機器が独りでに点滅したり、ビデオや録音で捉えた声や残像などがあって、そのような現象に遭遇した人たちはとても怖がっているようですが。**

そのような現象はあるが、悪さをしようとしているためとは限らない。

時には、まだ生きていることを知らせたいために、肉体を持った者と交信したがっている霊に過ぎない。そういう場合は、少し前に亡くなった霊であることが多い。この物理的な生にまだ執着を残して、住んでいた環境や人間関係を捨てたくないために、まだ生き続けていることを知らせたくて、近親者の注意を引こうとする。彼らに話しかけたり触ろうとするのだが、肉体を持つ者との交信やコンタクトの可能性に限界があるので（肉体を持つ者の感受度による）、その存在に気づいてもらえない。そこで彼らにとっては、物質よりもエネルギーを扱う方が簡単なので、電気で動く機器に干渉して、電球やテレビやラジオを点けたり消したりする。また、そこに霊媒体質の人がいる場合には、その人のエネルギーも借りて、物体を移動させることもある。

こういうことは、何が起きているのかわからない人たちを大変怖がらせてしまうが、実際には邪悪な意図はなく、注目を集めたいだけで、肉体を持つ人たちの間に引き起こす怖れには気づいていない。

***すでに肉体のないこのような存在たちに状況を把握してもらって、霊的次元で自分の道を進んで行ってもらえるように手助けすることはできるのでしょうか？**

それは君たちによるというよりは、彼ら次第だ。なぜなら、霊的な次元では、その移行に必要とされる援助が得られるのだが、時々、物的な世界との繋がりを断ち切り難しい場合があるのだ。そういう場合、支援する魂たちは、彼らが自分自身の意志で歩み続けることを決めるまで、見守っている。

また、そのような境遇の存在たちは思考を読むことができるので、声に出さずに頭の中で話しかけてみることも有効だ。彼らの置かれた立場——つまり、もう肉体的な生を終えたこと（中にはあまりに混乱していて、自分が肉体を離脱したこともわかっていない者がいるのだ）——や、

その場所に永久的に留まっているのは不可能なことを説明し、霊的な世界の仲間や愛する者たちに助けを求めらうべきだと諭すのだ。

何よりの助けとなるのは、彼らを亡くしたことによる悲痛や悲嘆の感情を避けることである。というのも、準備不足の者は、それが原因で、留まってしまうからだ。肉体を失った者は、愛する者たちが自分がいなくなったことで悲しみに暮れているのを見ると、哀れに思い、その状態で独りにさせてしまうのを辛く感じるものだ。だから、喪失感と悲しみを乗り越えることが、彼らを心置きなく立ち去らせてあげることになるのである。

*** 仲立ちをしてくれる霊媒や予知能力者を通して、死んでしまった家族と交信できるでしょうか？**

故人は、人の最も敏感な時を選んで別れを告げたがるものなので、コンタクトは、夢の中やはっきり意識できる体験として、自然に起こり得る。コンタクトが自然に起きないのであれば、あえてそれを強いる必要はない。

たまに、故人との交信を強く渴望するあまり、それを利用する者の手に落ちてしまうことがある。事前に一定額を支払うことで、死者との期待のコンタクトを取ってあげると口約束されるのだが、大概それは偽物であり、ただの演技に過ぎないのだ。

愛する故人からの連絡の形跡がすぐになくても、心配には及ばない。死というものは存在しないのである。連絡がなかったとしても、他界した人は、そのまま霊的な次元で生き続けている。

君たち自身の準備が整っていないために、連絡が取れないこともある。たいていの場合、君たちはあまりに悲嘆に暮れていて、愛する故人が伝えたいと思うことを受け取る余裕がない。そういう時にコンタクトがあっても、喪失感が増して、別れ難い思いをズルズルと引きずり、辛くなるばかりだろう。だが、悲しみを克服すれば、切望することが叶うかもしれない。

睡眠中は皆、身体から離れられるので、愛する者たちがいるところへ赴くことができる。敏感で感受性が高ければ、その経験を覚えていることが可能となろう。

*** では、手相見やタロットや同様の手法で、未来や過去を言い当てられると言う人や予知者のことをどう思われますか？**

未来は白紙である。いわゆる「アカシックレコード」と呼ばれる、個人の過去の記録や未来の可能性にアクセスすることは可能だが、それはとても制限されている。肉体を持った者は、当人の進化のために有益と

なる場合に限り、特別に自分個人の記録を見るのが許されるが、他人のものにはアクセスできない。

アクセスは通常眠っている間に起こり、その体験は夢として記憶されたり、予感となったり、深くリラックスしている状態でビジョンとなって現れることもある。しかし、それができるのは自分が望んだ時ではなく、霊的世界がそうした方がよいと判断した時だ。

人は大概、好奇心や欲心や利己的な関心から、自分の過去や未来のことを知りたがるが、霊的なガイドたちは、君たちのそのような動機を満たすために、この知識にアクセスさせてくれるのではないと、はっきり伝えておこう。

それなのに、他人のアカシックレコードに入り込めると言っている人たちの数の多さには、全くびっくりさせられる。その多くが、事前に一定額を受け取っているのだが、いい加減にカードを並べたり、適当に本のページを開いたり、生贄にした動物の臓物の形状を読み解いたり、あるいは他のゲームや多少不快な儀式をするだけで、いともたやすくその人の過去や未来を知ることが可能だとする。もちろんのことだが、このようなことはすべて嘘だ。

***でも、予知者の中には、言い当てられる人もいますよね。**

ほとんどの場合は当たらない。当たるように見えるのは、透視力を持つと自称する者が狡猾で、クライアントを持ち上げるのが上手く、その人から情報を引き出して返答したり、お客が聞きたいことを言うのに長けているからだ。お客を満足させれば、今後もセッションの代金を払ってくれる顧客となるからだ。

だが一体誰が、自分の運命や未来が、適当に並べたカードに書かれていると信じられるのだろうか？ カードを切り直してもう一度引いたら、違うカードが順番を変えて出てくるのではないだろうか？ そうなってしまえば、その人の将来も変わってしまうということかい？

常識を使って判断すれば、たとえばタロットというものが、ただの遊びに過ぎないことがわかるだろう。カードを並べるだけで、未来を占ったり過去を透視できると信じる人は、ゲームのモノポリーが得意なだけでエコノミストだと思ひ込んだり、飛行機のビデオゲームが上手いだけでパイロット気分になる人と同じである。

それゆえ、そのようなゲームと霊性とをごっちゃにしてはならない。根拠のないことを信用してはならないのだ。これらはすべて霊性とは無関係なのだが、しっかり意識していないと虚偽と真実とを混ぜてしまい、迷信と霊性とを見分けられなくなってしまう。

*** ごく一部だとしても、言い当てることができ、正しかったとわかるケースはどうですか？ たとえば、人の個人的な出来事を詳しく言い当てられる場合は、どう説明できるのでしょうか？**

確かに霊媒能力を持つ人もその中にいるのだろうが、その能力を間違っ
て使用しているようだ。霊媒能力というものは、霊的な授かりものであり、いたずらに用いてはならない。利益を目的にすべきではなく、ましてや職業にしてはならない。

過去を言い当てた時のお客の反応が面白いので、そういうことを生業とする人たちに、進化の乏しい霊たちが寄り付くことがある。その場合は、カードを読んで当てているのではなく、そのような霊たちがお客の信用を得るために、彼らに正しい情報——その全部が正しいとは限らないのだが——を提供しているのだ。

また、霊媒能力を持つ人の中には、下心があるわけではないのだが、無知であるがゆえに世間のエゴに翻弄されて、自分の本当の能力と俗世間で学んだ技法とを混同してしまっている人もいる。こういう場合は、あまり進化はしてはいないものの、悪い意図を持たない霊たちが介入しやすい。

*** 占星術、つまり、天体が人生に及ぼす影響についてはどうお考えですか？ 星座占いや星座カードは？ 生まれた日付けと時間がわかれば、その人のだいたいの性格や、人生で起きる出来事をあらかじめ知ることができるというのは本当ですか？**

創造の万物は相互に網の目のように結びついているので、天体が発するエネルギーの光が、他の天体やそこに住む生物に影響するというのは本当だ。そして、地球からの距離によって重力の強さが変わるのと同じように、それらの天体の近くに行けば行くほど、その影響が強くなることも確かである。また、天体の配置によって、特定の霊的な仕事がやりやすくなることもあるので、進化した魂は、霊的次元の任務に取り組むために、より好都合な時期を選ぶことがある。

しかし、それはあくまでも影響力に過ぎず、決定的な要素ではない。マラソンの選手が、いつも適度な気温と湿気を望むのは、それが、いい記録を残すための大切な条件だと知っているからだ。しかし、いい天気だから良い選手になれるわけでも、悪い天候のせいで劣ったランナーになるわけでもない。天候の及ぼす影響は、選手の記録を調整するのに限られるが、これと同じことが天体についても言える。進化した魂は、生まれる時の天体の配置がどうであろうと進化しているのであり、そうでない魂は、天体の位置が良くても進化した魂にはなれないのだ。

転生することになる魂の誕生が二週間早まるか遅れるかによって、その人が違う人生を送ったり、異なった性格になるなどということが、どうして信じられるのかね？ 魂の人格や成長というものは、無数の転生を経て獲得した霊的な学びの結果である、と何度も言わなかったかね？ 人生で出会う試練は、生まれる前に自ら選んで準備をしたもので、それを乗り越えるかは個人の意志次第だと言っているのに、どうして誕生の日付によって、その人の人生の出来事が決まってしまうと思えるのだろうか？

もう一度、はっきりさせよう。未来は白紙だ。人の未来が誕生日で決定されているのなら、どこに自由意志の余地があるのだ？ 二次的なことばかりに注意を向けていると、本当に大切なことを見逃してしまう。

*** そうですね、では十戒の二つ目を見てみましょう。「神の名をみだりに唱えてはならない」ということですが、これについて教えてください。**

これは申命記にも記載されているが、訳に誤りがある。ヘブライ語を逐語訳すると、「神の名を、欺くために使ってはならない」となる。つまりこの掟の問題は、戒律自体が間違っていることではなく、その意味の解釈の仕方であり、そうなったのは、もともとのヘブライ語の翻訳を改変してしまったためである。このことは前にも話したかもしれないが、とても重要なことなので、ここでも掘り下げて見てみることにする。

多くの人々は、「神の名をみだりに唱えてはならない」ということは、世間で一般的に使われる下品な表現の中で、神の名を用いてはいけないことだと思っている。そして、誰かがそのような表現を口にするのを聞くと、発言者でさえ文字通りの意味で言っていないことを考えてみようとせず、神への冒瀆だとして腹を立てる。しかし実際には、そのような言い回しは通俗的で粗野であるかもしれないが、無害なもので、霊的には何の問題ともならない。

しかしながら、この戒律が真に意味するところは、「**神の名を、利己的な目的を正当化するために使ってはならない**」である。人類はこれまでにもこの掟を平然と破ってきたし、今も破り続けている。

最もひどい残虐行為も神の名において行われてきた。その中には、聖なるものへの儀式に人間を生贄に捧げることから、異教徒の殺戮、宗教戦争や十字軍、改宗の強要、異端者の迫害・拷問・殺害などや、宗教権威のエリート層を肥やすための搾取、信徒を操るための教義の改ざん、人びとの間に不和や争いを生み出すことまでが含まれている。このようなことすべてに、大変有害な利己的な意図があるのだが、人間が神の名のもとに犯したのである。これは本当に由々しきことで、霊的には致命

的な結果をもたらす。本当は自分たちのエゴのせいなのに、神がそのようなことを命じたと皆に信じ込ませるのはペテンである。

聖典でさえも改変し、神がイスラエルの民に他民族の殺戮を命じたと信じさせようとするのは許しがたい。また、神、あるいは神の遣いとされるモーゼが災いを招いて、兄弟であるエジプト人を殺し、イスラエルの民をエジプトから解放するようファラオに迫ったとすることも看過できない。もし、それが本当であるなら、神とモーゼは、そこら辺の人殺しや暗殺者、人類の殺戮者などと同じように残酷で、命を粗末にするのだと認めないわけにいかなくなる。

*** 話が逸れてしまいますが、モーゼやファラオのお話で好奇心が刺激されてしまいました。実際はそうでなかったのなら、本当に起きたことは何だったのでしょうか？ エジプトの災いについては、宗教でも絶対に確かなこととされていますが。**

当時は二人の関係が良かったので、イスラエルの民を解放してもらえるように、モーゼがファラオを説得したのだ。

*** では、ヘブライ人（古代イスラエル人・ユダヤ人の別称）たちは、彼らを殺そうとするファラオの軍に追われなかったのですか？**

追われたのだが、それはファラオとその軍によってではなく、ファラオの決定に不満を持ったエジプトの支配層による。彼らが出発することを知ると、追っ手の傭兵隊を組織した。ファラオに歯向かうことを避けて、エジプトの手の届かないところで捕らえようとしたのだ。

*** それで、何が起きたのですか？ 聖書には、モーゼが聖なる力を借りて紅海の水を断ち割り、ヘブライ人が渡れるようにした後、エジプト兵に水が押し寄せたので、彼らは溺れ死んでしまったとありますが。**

実際に起こったことは違うのだ。まず、モーゼが水を断ち割ったというのは本当ではない。モーゼが考えたルートは、通常水に覆われている地域を通らなければならなかったが、時折、気候と潮の状況により、場所によっては渡れるほどの水準にまで、一時的に水が引くことがあった。モーゼの顧問役たちはこのことを知っており、彼にそれが起きる日時を教えたので、単に、潮が引く頃まで待って出発したのだ。ファラオに仕えている者たちも、通り道に当たる地域を整えてくれていた。2～3日遅れてそこに追っ手が到着した時には、もう潮が満ち始めていた。中に入って行けば海に飲まれてしまうことは明らかであったから、常識があれば渡ろうとはしなかった筈だ。だがそうしてしまい、渡っている途中で水かさが増して、溺れ死んでしまったということだ。

これでわかっただろうが、実際には、何も超自然的なことは起きていない。信じられているように、神の怒りに触れて死んだわけではない。死んでしまったのは、彼ら自身の憤りのせいだ。ヘブライ人に追いついて殺したいという欲求の方が、自分たちの命を守ろうとする良識よりも勝っていたということだ。

*** それでは聖書には、なぜ別の話を書いてあるのでしょうか？**

利己的な関心のためなら、すべてが歪曲されてしまうと言っただろう。当時は聖なる書物というものは、司祭職しか手にすることができなかったのだ。だから、実際に体験した人たちが死んでしまうと、自分たちに有利になるように事実を変えてしまうことは割と簡単だった。

どの宗教でも同じだが、ユダヤ教の支配者たちは、人民に神の存在を怖れさせて従順にさせることで、彼らの権威に逆らわないようにしておきたかった。そのために、裁きの神と執行者モーゼ、というイメージを創り上げたのだ。ひと度そのような神話を作りあげれば、人民を意に従わせようとする場合は、神の言葉をモーゼが代弁していると言いさえすれば、人びとを震え上がらせ、怖れから言いなりにさせることができたからだ。

*** なんてことでしょう！ その時代の歴史に、本当に起きたことをもっと知りたいです。人類の宗教観に多大な影響を与えてきたことですから。**

それは、我々が見ている大事なテーマから外れてしまうので、今は不適切だ。君に話したことを、人間がどういうものであるかを示す一例としてほしい。自分の一時のエゴを満たすためになら、何でも改ざんしてしまうのだ。霊的な教えもしかり、また、捏造された間違いだらけの神や使者の概念さえも伝えようとするのだ。

*** 第二の戒律（神の名をみだりに唱えてはならない）に最も違反したのは、特に過去の時代における宗教権威者だったようですね。**

過去の宗教権威者だけでなく現在の宗教権威者もだ。現在はより巧妙に行われているとはいえ、まだ神の名が利己的な目的のために使われている。霊的には偽りで、人間の魂の進歩を妨げる宗教上のドグマを正当化するために、いまだに神の名が用いられる。高位聖職者たちは、その地位がもたらす権力を利用して、ありとあらゆる搾取や犯罪を犯し続けている。今では多くのことが秘密裡に行われているが、それは首謀者が明るみに出ると、法廷に引き出されるからだ。

政治権力者たちも、都合のいい時には宗教を利用して、利己的で侵略的な目論みを市民に納得させようとする。たとえば、市民を戦争に送り

込みたい場合などには、犠牲を要請しているのは神であると言いくるめ、神が味方についているから、戦闘中も守ってもらえると思込ませる。

だが、一番の影響力を持っていた宗教や政治の権力者たちが最も有害だったとはいえ、この戒律を破っているのは、彼らだけではない。個人的なレベルにおいても、見せかけの正統宗教や霊性の下に人間の自由や意志を制約したり、私欲に基づいて他の人たちをコントロールしたり操作するなど、偽善的で利己的な行動は、この掟に背くものである。

同様に、自己の利益のために、人の宗教及び霊的信心を利用する者も、この戒律を破っている。したがって、「神の名を、利己的な目的を正当化するために使ってはならない」ということを我々が正しく応用するのなら、「霊性で商売をしてはならない」ということに繋がるという結論に至る。つまり、霊性を商売にして儲けようとする人も、この戒に背いていることになるのだ。

* 「霊性で商売をする」とは、具体的に何を意味するのですか？

霊性とは、魂が存在するだけで元来生まれ持つ特性である。進化を促す力となり導き手となるために、霊界から個々の魂に授けられた資質であり、天賦の才なのだ。

したがって、霊性というものは、特定の人に属するものではなく、皆が平等に有するものだ。我々には無償で与えられているのであるから、それを使用する時には無料とせねばならない。それゆえ、霊性を金儲けのために使ってはならない。そうするのなら、それは、誰かが空気を私物化して、呼吸をする権利と引き換えに、人からお金を取るようなものだ。我々の持つ霊的な能力と知識を、思考に忍び込むエゴに占有させてしまえば、無私の方志すべき他者や自己の進化に役立つ霊的な仕事も、利潤や儲けを引き出す物的な商売に変わってしまう。

さまざまな霊媒能力も、すべて霊界から授かった才能なので、どれも商売の対象としてはならない。この中には、エネルギーの伝授も含まれるが、お金と引き換えに霊界からの助言や交信を受け取るのもダメである。霊媒能力は、我々の進化を助けるために与えられたのであり、取引のための商品ではない。霊的な才能の使い方を誤れば、霊的な援助が貰えなくなろう。高次の霊たちは、私欲を肥やすことに協力的でないのだ。

* でも、「お金持ちになりたいのではなく、霊性に天職を見出したのでそれに従事したい」と思っている。他の仕事をする時間がないけれど、何かで暮らさないといけないので、スピリチュアルなことでお金を取る必要があるんだよ」と言う人がいますが、これについてはどうですか？

誰から、物質界での仕事を免除されていると言われたのかね？ 我々は全員、霊的な進化と関係があるのだから、「霊的なこと」に従事するために皆が仕事を辞める決意をしたとしたら、この世界は何で生きていくのだろうか？

現在、多くの人たちが、スピリチュアルな変化を遂げるといことは、世俗的な仕事を辞めて、彼らが霊的な仕事と呼ぶことに専従することだと思込んでいる。そして、世俗的な仕事からの収入がなくなるので、霊的な知識を伝えたり助言を与えたりして、お金を貰っても構わないと正当化しているが、そうではない。

霊的な成長は、物質界の仕事と完全に両立させることができる。しかも、病気、老体、肉体的または精神的に不適合な場合を除いて、誰もそれを免除されることなどない。肉体を持って生まれた者の生きる上での義務——たとえば仕事だ——を回避する口実として、霊性を持ち出してはいけない。なぜなら、すでに霊的な仕事をしているからと言いつて働かない者は、楽をしようとする怠け者であり、霊的に進化はしない。誰もが生計を立てるために働かねばならず、皆がそれにふさわしい対価を受け取らねばならない。霊的なことを物質界の職業にすることは、正当化できない。

*** 霊的な観点から見ると、霊性を職業化するのは正しくない、と言われるのですか？**

その通り、正しいことではない。君の言うところの霊性を職業化したことによって、宗教や聖職者が存続することになったのだ。聖職者たちは、霊的な仕事らしきもの（儀式や崇拝に時間を割くことは霊的に無駄なことなので、実際には仕事とも呼べないが）をすることで世俗的な仕事を免れて、自分たちで稼げないお金を信者や信徒から貰って食べていく必要があると人びとに思い込ませ、彼ら自身もその気になってしまった。

繰り返すが、霊的な仕事に専念できるように実際的な仕事を免除されることがあるなど、誰も信じてはならない。

*** カトリック教会は、イエスやその使徒たちの例を見習ってそうしなければならぬ、と理屈をつけることでしょ。**

一体どのような手本があるというのだ？ イエスは大工の息子であり、一緒に住んでいる間は、父親の仕事場で働いていた。多忙な使命に取り組むと大工をする時間がなくなったのは事実だが、霊的なことで一度きりともお金を取ったことはないし、養ってほしいと頼んだこともない。

彼の使徒たちも、そんなことはしたことがない。各々が持っている物を提供し、家族や職業上の義務を投げ出した者はおらず、世俗的な仕事と霊性とを両立させていた。注目すべきは、使徒の中に一人としてユダヤ教の司祭がいなかったことだ。当時働いていなかったのは、ユダヤ教の聖職者だけだったのだ。

使徒たちは生存中、教会を組織することも、聖職者を名のることも、扶養してほしいと人に頼んだことも、一度もなかった。ただ質素に暮らし、持っている物を分かち合っていた。

イエスと使徒たちがユダヤ教の僧侶たちにそれほど睨まれたのは、彼らの宣教によって、ユダヤの聖職階層に最も収入をもたらす商売であった、動物の生贄のために寺院に行く人の数が随分減ってしまったからだ。

***この場合はカトリックのことですが、教会は何を間違っ、創始者たちが行ったことや宣教したこととは裏腹に、ユダヤ教会と同じように成り果ててしまったのでしょうか？**

すでに話してあるが、イエスもその使徒たちも、教会など一つとして設立していないし、そうする意図もなかった。そのような機関を創り上げたのは、先駆者たちが伝えてくれたメッセージを悪用した、後からやって来た者たちである。

君もまるで教会に独自の命があるかのような質問の仕方をするが、それを見ても、君たちが宗教機関というものをいかに重要視しているのかが伺える。実際には、教会というものは存在していないのだ。教会独自の意志も良心も存在しないのだから。それゆえ、教会が善を成すこともなければ、悪を成すこともない。それは、ただ、特定の間人によって組織され、運営されている構造上の枠組みに過ぎない。内部の人びとは時代と共に移り変わるが、幸いなことに人の一生は短いので、せいぜい何十年かしか権力にはしがみついていられない。

だから、違う質問をしたらどうか。人間はどうして、霊的な成長に役立てるために授けられた真の霊性のメッセージを、それと正反対のもの、つまり、自分が隷属させられるドグマに変えてしまったのだろうか、質問してみたらどうか。そのような教義は、人に自己の意志と自由を放棄させ、搾取や狂信、格差を増長している。

教会は、自己のエゴに流されてしまった者たちによって企てられ、組織され、歴史において存続してきた。実のところ、それは、霊性を求める人びとの潮流によって手放さざるを得なくなった指揮権を力づくで奪い返して、以前の抑圧形態を再度導入したものに過ぎず、徐々にコントロールに成功したのだ。

*** 靈性を求める人びとの潮流によって手放さざるを得なくなった指揮権を力づくで奪い返して、以前の抑圧形態を再度導入したものに過ぎない、とはどういう意味ですか？**

つまり、イエスの死後、継承者たちがその教えをあらゆる場所で普及させることに尽力したので、イエスの無条件の愛のメッセージは急激な広がりを見せた。そのうちに、その無条件の愛のメッセージに賛同する人びとの数も、飛躍的に増えていった。イエスの教えは、人間同士の平等や兄弟愛を訴えていたので、それによって自分たちのやり口がバレてしまうと思った時の権力者たちは脅威を感じ、幾人ものローマ皇帝が大規模な迫害を行った。しかし大虐殺にもかかわらず、キリスト教徒と呼ばれることになった人たちの数は、止まることなく増え続けた。そこで、この流れを外圧で撲滅するのが不可能だと見た権力者たちは、内部に浸入することで舵取りをして、進路を変えてやろうと決意したのだ。

この新しい戦略で最も際立つものの中に、コンスタンティヌス帝の治世のものがある。彼は自らキリスト教に改宗したとして、ローマ帝国全体の強制的な改宗を布告したのである。しかし、これによって、すでに時の経過と共に作り変えられていたキリスト教は、それ以後は、より一層改変されてしまった。もう貧困者や奴隷の信仰であってはならず、富と権力と相容れるものである必要があったが、そうではなかったので、丸ごと改造されてしまったのである。

このように、我々は、再び人類の諸悪の根源に行き着くことになる。一番の問題は、人間の利己心なのである。道徳の権威者だと自称したこれらの者は、そういう利己的な魂であり、教会を維持して強大にするのが大事だと人びとに思わせ、神が喜ぶからと、そのために命を捧げたり他者の命を奪うことを奨励したのだ。だがそれは、靈性の面で進化の乏しい人びとの無知、怖れ、狂信だけに支えられる大嘘である。

本当のことを知りなさい。君たちが教会と呼ぶ枠組みは、神にとっても靈的世界にとっても、何の意味もなさない。靈界にとって大切なのは、靈的な生命を有するものだけなのだ。一言で言えば、神にとって意義があるのは人間であり、教会ではない。それゆえ、宗教的または靈的な組織を拡大しようと努めて、人生を無駄にしてはならない。またそこに富を貯えたり、信者の数を増やそうとしてはならない。これらのことは、靈的な視点からは無意味な努力であり、君たちの進化にとっても全く役に立たない。

それよりも、自分たちの心の中のエゴを根絶して、愛の感情を発達させるように努めなさい。それだけが唯一、奮闘する甲斐のあることで、霊的な進化の階段を昇らせてくれるものだ。

*** けれど、そうならないように回避できたであろう特定のエゴがありますか？ つまり、具体的にはどのような事柄が、教会のような機関を創るのに貢献してしまったエゴ的な行為と見なせるのでしょうか？**

一番の問題は、イエスが宣教した霊的な教えを基盤として、教会や宗教を創り上げてしまったということだ。先にも言った通り、イエスはいかなる教会も創ろうとしたことなどない。そうではなく、ただ人類に、ごく単純な次のメッセージを伝えようとしたのだ。「愛の感情を育み、エゴを排除しなさい。これは、一人ひとりの仕事であり、物理的な組織の設立を一切必要としない」

*** 将来、同じことを繰り返さないで済むように、アドバイスをください。**

いかなる旗印の下にも結束しないこと。なぜなら人間というものは、すぐに自分のグループの者とそうでない者とを分け隔てして、仲間を優先し、他の者を差別する傾向にある。信仰や政治に関してであろうと、愛国心であろうとである。これが集団的なエゴの姿なのだ。

霊的な真相を知れば、そのお陰で、人類は皆兄弟であると気づけるようになる。人それぞれにレッテルを貼るのは違いを生み出すだけで、時が経つと、争いや不和の口実として利用されてしまう。

*** どういう意味かわかりません。**

人間はお互いの違いを見出すために信仰を利用してきたので、宗教のために対立してきたし、今でも仲間を殺しあって敵対する羽目になっているということだ。

実のところ、これまでになかった組み合わせは残っていないほどだ。つまり、ユダヤ教徒対イスラム教徒、キリスト教徒対イスラム教徒、キリスト教徒対ユダヤ教徒といった始末だ。しかも、キリスト教徒の中では、カトリック対プロテスタントとなり、同じイスラムでも、シーア派對スンニ派となる。

不思議なことに、これらの宗教はどれも同一の神を信じており、アブラハムを始祖とし、モーゼを民に与える戒律を神から授かった預言者だとしている。

社会から離れることを試みたり、世間から孤立した共同体を創るのはやめなさい。むしろ、その反対のことをするように。世の中が少しずつ「魂の法則」——特に愛の法則——と調和したものとなるように、社会

を変えようと努めるのだ。すべての人には、自由で幸福になる権利があるので、誰からもこの権利を奪ってはならない。世間から離れて閉ざされた共同体を創れば、他の人たちは、君たちが成し遂げた成果の恩恵にあずかれなくなってしまう。

***でも俗世間と交われば、協調した行動がとれなくなり、靈的な悪習に染まる危険を冒しはしませんか？ 初期キリスト教徒も、またそれ以前にはエッセネ派の人たちも、他の人たちから離れたコミュニティーに集まりませんでしたか？**

初期キリスト教徒やエッセネ派の者たちがその時代の町から離れた場所に隠れたのは、度重なる迫害から身を守るためであり、社会から遠ざかりたいわけではなかった。同じ理念を追う人たちの協力を求めるのは何も悪いことではないが、それを口実にして他の人たちと距離を置いてはならないし、同じ考えや信仰を共有しない者を排除するのもよくない。

自分の信念をしっかりと持っている者は、他の人の信念にそう簡単になびくことはない。引きずられるとするなら、それはそれほど確固たるものではなかったということだ。

また、自分と違った信仰や文化を知ること、決して悪くはない。そうすることによって人間的な幅が広がり、自分自身の考えや信念を形成する上で、さらに多くの情報が得られるからだ。

カトリックの信仰者は、カトリック教国に生まれたからそうなっただけだ。また、イスラム教徒の者はイスラム教の国に生まれついたからであり、自分の信仰を自由に選べたわけではない。他に選択肢がなかったのだ。

***ですが、物理的な機関を何も創れないとなると、隣人愛のメッセージと矛盾することになりませんか？ 教育や医療の現場や困窮者の保護施設などの、物的な支援をするプロジェクトの実現を妨げることになりませんか？**

我々がここで問題視する機関の創設とは、それ自体の存続を図ることを主目的とした物質主義的な機関のことで、それを設立することで、権力と富を肥やそうとするもののことだ。富と権力は、利己的な願望を叶えてくれる特権的な地位を狙う、欲望と野心に満ちた者を引き付け、現状を一層ひどくしてしまうのだ。

寄る辺ない人たちを助けたいのであれば保護センターを創ればいいし、病人を看護したいのであれば病院を創ればよく、子どもたちを教育したいのであれば学校を創ればよいのだ。

大切なのは、単に儀式を執り行ったり聖遺物を貯える機関ではなく、相互扶助に役立つものにする事だ。そうでなければ、人びとの助けとなるべく設立された筈なのに、当初の機能を果たせなくなってしまう。君たちは、あまり利用されていない既存の機関を活用して、社会的な機能を持たせることができるし、まだなければ新しいものを創り上げることで、ここでのアドバイスを実行できる。

私が批判しているのは、物的な手段を利用することではない。それらは正しく使用すれば、公正で気高い理念である、公共の福利に役立てることができる。そうではなく、これと正反対のこと——つまり、エゴ的な利益を満たすこと——をしようとして、物的な手段を悪用することを非難しているのだ。私欲は、多くの貧しき者の犠牲の上に成り立つ、少数の富める者を生み出す社会格差の元凶となる。

*** それでは、（教会などで）人のために募金集めをするのもいけませんか？**

困っている人のために助けを請うのは、悪いことどころか、その反対だ。貧困者を支援するという善い目的のためにお金が使われるのであれば、それは霊的に気高い行為である。

正しくないのは、仕事をしないで済むように、自分のためにお金を貰おうとすることだ。無意味なことや利己的な目的で、お金をせがむのも正当化できない。そして、それに輪をかけて不当なのは、公正なことを口実としながら、後で利己的な目的にそのお金を使ってしまうことだ。貧困者を救済するために集金しておきながら、それを株に投資してしまうというようなやり方が、これに当たる。

*** でもふつうは、募金集めをする人は、立派な志でやっていると思っ
ている筈ですよ。ある人にとっては気高い目的でも、別の人にとっては無
意味なことがあります。それをどうやって見分けるのでしょうか？
たとえば、信仰の場の建設や老朽化した教会の修復を崇高なことだと思
う人がいても、他の人たちには意味がなかったりします。**

崇高な趣旨とは、必要としている者を助けることである。社会格差や理不尽な物事を一掃するのに役に立たず、貧困者のためにならないものには、利己的な意図がある。

各人が良心を見つめ、人のために募金集めをしてあげる時の自分の動機が何であるのかを内省してみるがよい。そうすれば、自分をつき動かしているものがエゴ的な思いなのかがわかる。他人は欺けても、自分の良心を騙すことはできないからだ。

カトリック教会は大金持ちであるので、聖堂の改修や新しい教会の建立のために資金を集める必要などない。もっとも、他の人たちに彼らの棲み家の請求書を払わせることができれば、大満足であろうが。

*** 他にしてはならないことはありますか？**

前に言ったことだよ。霊性を職業にしてはならないということ、つまり、スピリチュアルに関係する活動をして生計を立てようと思っはならない、ということだ。霊的なことでお金を稼ぐ者は、霊性の助言役としての資格を失い、霊性の商人と成り果てるのだ。

また、財産や経済的な利益を手に入れるためや、人より有利になるためや優遇されるために、霊性を使うべきではない。そうすれば、組織の資金で維持される、宗教的な職業（僧職）階層ができてしまうこともない。そのようなものは、教会の信仰や儀式をしきり、組織を維持する方策として加入者を勧誘すること以外に、何の役目も果たしていない。

私の話は、今日のピラミッド型の不公平な会社構図を例にとれば、理解しやすくなるだろう。

*** 宗教への勧誘が悪いことのようにお話されていますが、矛盾が出てきてしまいました。霊性の知識を自分の人生に役立てられて、それを他の人たちにも教えてあげたいと願うことが、いけない行為なのでしょうか？**

先ほどの勧誘とは、相手の自由意志を尊重せずに、何かを説得したり納得させようとするを指している。私が問題にしているのは、力づくで信徒を獲得したり、操作や強制をしたりする者たちのことだ。あるいは、特定の信仰に加味することを条件に人を助けたり、全く関心のない者を説得したり、自分の概念や信念を押しつけようとする者たちのことである。このようなことはすべて、相手の自由意志を強要することになる。

他者を愛するということは、相手が必要としていることを助けてあげるということで、その見返りとして、自分の考えや信仰を共有してもらうことを期待してはならない。霊的な知識を広めようとすることは、悪いことではない。その反対にそれは善いことで、人が成長し幸せになるために求められることでもある。だが、それを相手の意志に反して行ってはならないのだ。要するに、自分が真実を知っていると信じていても、人に強要してしまえば間違いを犯していることになる。

したがって、自分自身の信念を相手にも信じさせようと躍起になって、無理強いしたりプレッシャーをかけたりしてはならない。誰にも、絶対に、自分の信仰を押しつけてはならない。そうではなく、それを自分自

身に適用して、愛の感情を発達させてエゴを一掃することで、もっと幸福になるのだ。自分が実際に手本となって示してあげることが、他の人たちにとっては、一番の学びとなるのだ。

***では、スピリチュアルな援助を求めて人が来る時は、どのような態度で接するべきでしょうか？**

人を助ける時には、自分の信念を受け容れてもらうことや共有してもらうことを引き換え条件としてはならない。心を開いて、彼らが興味を持つことに応じて、分かち合うべきである。さまざまな意見が出るのを認め、自分と違う視点を尊重すべきだ。そして、他の人の視点がよりのを得たものであれば、聞く耳を持ち、自分自身のものの見方さえ変えようとしてみるべきだ。

感情的な問題を解決してくれるように頼まれた時は、自分の意見を言う前に、「君の心はどうしたいの？」とその人に質問してみよう。我々は思考と感情とを混同してしまうことが多いが、心の声ほど適切に我々を導いてくれるものはないからだ。頭に介入するのはエゴなので、そう尋ねることで、心で思うことと頭で考えることとの区別がつくように手助けしてあげられるのだ。考えが整理できるように、君たちの意見や体験談を話すのはいいが、当人に代わって決断を下したりせずに、それぞれの人生にふさわしいことを自らの価値判断で決めさせてあげなさい。

求められる援助の内容と程度は、人によりけりだ。各人のレベルに合わせて、必要とされ、受け取る気があることだけを与えるまでだ。それと同様に、君たちの能力が及ぶことまでに限られる。君たち自身に、その人の手助けができる準備が整っているかを見てみるのだ。自分がまだ力不足に思えれば、それを認めて、その用意がある人に助けてもらえるように適役を探しなさい。悪気がなくても、知らないことを助言してしまえば、その人を助ける代わりに混乱させてしまうからだ。

また助けが必要な人がいても、それを欲しがらなければ、当人の意志を尊重して、アドバイスはしても押しつけないことだ。このような場合には、その人が気を変えるかを、ただ見守るだけしかできない。要は、その人が中に入ってこなくても戸は閉ざさずに、考えを変えた時に一度は断った助けを頼む勇気が出るように、半開きしておくのだ。

***他につけ加える大事なことがありますか？**

ああ、自分の信念は権威ある者の価値観で決めずに、自分自身を拠り所としなさい。私が言いたいのは、あの人が言うことだからと特定の人

の言葉を重視しないで、伝えられるメッセージの質で判断して、自分自身の価値基準で、それを排除するのか受容するのかを決めなさい、ということだ。そうすれば、真の霊的な教えが、身分の低い人のものであるために過小評価されることもなければ、利己的な内容が、著名人のものであるために持てはやされることもない。

宗教上の権限は、実のところ、権威者の裁断が正しいものだと思者に思い込ませたこと、つまり、地位が上の者の言うことは下位の者の意見よりも価値があると思わせたことによる。最高司祭だとか大司教だとか呼ばれる法王の言葉は、絶対なる真実となり、霊性に関してはそれ以上の権威を持つ者がいないので、議論の余地もないのである。

このようにして宗教の権威者たちは、彼らの利益にはなるが人間の霊的進化を阻む、利己的な信念を良しとすることに成功した。一方で、霊的には本物であっても、彼らの利得を損なう概念は非難や中傷をされ、葬られてきたのだ。

***まだ他にもしてはならないことがありますか？**

そうだね、他者のために行うことで、人から認められたいとか、有名になりたいとか、賞賛されたいなどと思わないことだ。そうなれば愛ではなく、自分の虚栄心を肥やすだけだからだ。

***では、第三の戒律に移りましょう。これは、「祝日を聖なるものとせよ」でした。**

この戒律もまた、改変されてしまっている。申命記の文中では、「土曜日を心に留め、これを聖なる日とせよ。六日間は働いて、すべての仕事をしなければならぬ。しかし七日目は、あなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事もしてはならない」となっていた。

この戒律の意義は、権力者の搾取に対して労働者の権利を認め、その代償に報いるための休日を与えるものであった。当時は奴隷制が頻繁に見られる時代で、支配者は、自由人であろうと奴隷であろうと、働き手に休みを与えずに搾り取る傾向にあった。それゆえ、従僕や荷積みの動物までを含めた全員に、休む権利があると明記する必要があった。それは、すべての搾取に歯止めをかけようとするものだったのだ。つまり、「少なくとも週に一日は休日として、仕事を休むためにとっておきなさい」と言おうとしていた。

教会もまた、この戒律を自分たちの都合のいいように改変するのに、ささやかながら手を貸した。初めは休日を尊重するものだったのに、彼らの都合に合わせて、イエスや聖母や聖人たちを祭る儀式を重視するものに変えてしまったのだ。

つまり、これも、コンスタンティヌス帝以前のローマ帝国の風習を模倣したものであったのだ。聖ヨセフの祝日や聖ヨハネの祝日といった聖人のお祭りやクリスマスでさえ、それぞれが春分の日、夏至、冬至と重なっているが、それは、以前の異教の祭日をキリスト教のお祝いに再編したからなのだ。

*** 第四番目の戒律である「あなたの父と母を敬え」を見てみたいと思いますが、これについてはどういうご意見ですか？**

これは、老人を保護するのが目的だった。その時代の社会制度には、高齢者を守るための社会保障制度も、年金もなかったのだよ。当時の統治機関は、困窮者や弱者を守るなど一切しなかったし、老人を保護しようとしなかった。したがって、老人たちに残された唯一の選択肢は、家族、つまり子どもたちに頼ることであった。子どもたちは大人になると、もう自分たちではやっていけなくなった年寄りを扶養したのだ。

しかし、この戒律もその意味合いにおいて、やはり改ざんされている。というのは、両親を敬い世話をするといい肯定的なことを、親の意に従うのが子どもの義務であることにしてしまったのだ。この掟を盾に取り、子どもたちに対する所有権を得た親の多くは、心おきなく横暴に振舞い、彼らを隷属させた。虐待や侮辱、操縦によって、ほんのいたいけな幼少期から子どもたちの自由意志を侵害して、勝手に結婚相手を決めて不幸な人生に縛り付けるなど、彼らの意を曲げ、その人生をコントロールしたり支配したのだ。しかも、それが神聖なる権利だと思い込んでいた。

よって、宗教色が濃い社会においては、親は子の人生に関して、より一層支配的になっていった。だから子どもが大人になって、しがらみを断ち切るほど強くなると、親のことなど知りたくもないという事態になる場合が多いのも、驚くに値しない。

その時になると、親たちは「こんなにも色々尽くしてあげたのに、なんて仕打ちだ」と言いながら、子どもらに見捨てられたと嘆くのだが、実際には、自分の蒔いた悪い種を取り入れているに過ぎない。

それゆえ私は、「父や母を敬う」だけでなく、人を理解し尊敬して慈しむ心は、家族すべてに、つまり、祖父母や、父母や、兄弟や子どもや孫たちにまでも、行き渡らねばならないと言うのだ。その中でも特に子どもたちは一番弱い存在なので、大事にしてあげなければいけない。

小さな子どもたちは、最も傷つきやすく無防備な存在なので、より一層の理解と愛情と尊敬をもって、扱ってあげなければならない。子どもは絶対にたたいたり、辱めてはならない。以前にも子どもに対する愛情については取り上げたと思うが、それはとても大切なことだからだ。

したがって、この戒律に関しては、次のようにより広範な意味で解釈することだ。君たちの人生を取り巻くすべての人たち、特に最も傷つきやすい者である子どもたちに対して、慈愛、尊重、理解を示しなさい。

*** 今度は、五番目の戒律である「汝、殺すなかれ」について話しましょう。**

これは、議論の余地がないほど明確だ。この掟は、霊的な世界から授かった時のままの形で保たれてきた。それゆえ、他の解釈はあり得ない。「殺すなかれ」は殺すなかれであり、命を奪ってはならないということだ。

知っての通り、魂は不死なので、幸いなことに人間が何をしようとも、その不死性を絶やすことはできず、せいぜい肉体の生を中断させることができるだけだ。だが、肉体での生命は、霊界が魂に授けてくれる贈り物の一つである。肉体を持って生きている期間は、霊的な世界で魂が学んだことを実践してみせる場であり、身体の維持に空気が必要となるように、魂にとっては欠かせないものだ。そのため生き物には、自己の存在を認識できる前から、自分や同族の命を保つプログラムとなる、生存本能というものがある。

命を奪うことは、その人の進化のチャンスを絶ってしまうことであり、霊的視点からは極めて否定的なことだ。それゆえ、この戒律のように簡潔だが基本的なルールを守れない限り、地球人類が心待ちにする、進化の飛躍を遂げる準備が整ったとは見なせない。

*** 世界のどこを見回しても、殺人を咎めない刑法というのはあり得ないと思いますけど。**

それはそうだが、人間は、死の中でも分け隔てをしているようだ。ある命は他の命よりも重要度が高いらしく、多くの場合において、殺人を合法化している。

*** それは、どういう意味ですか？**

平和時にある男が何人もの人を殺すと、連続殺人者ということになり、必ず裁判で有罪とされるだろう。だが、同じ男が戦時に敵側の人たちを殺すと、戦争の英雄となり、政府から勲章を貰うだろう。しかし、この男が敵兵を殺したくないがために軍を離反するとすると、お上に捕らえられて、反逆者の罪を着せられ、処刑にされるかもしれない。

ある指導者が、自国の軍隊に敵国を爆弾で攻撃することを命じたとして、それで何千人もの人が死んだとしても、それは職務を遂行したということになり、死者が軍人であれば「損失」と呼ばれ、市民であれば

「付随的損害」と呼ばれる。そして、その国が戦争に勝てば、その指導者は英雄として記憶され、歴史でも名誉ある記録をされて、街路や学校の名前は、彼の名を戴くことになる。

また世界の多くの国々には、刑法の中に死刑があり、罪次第では「正義を行う」ためにそれが執り行われている。

以上の結論を言うと、君たちは「殺すなかれ」という戒律を、不当な契約書の末尾に小さい文字で書かれた「殺すに値しない者を殺すなかれ。しかし殺すに値する者を殺せば、じょうできだ」という補足と共に、適用していることになる。そうしておけば、殺されても当然だったという口実を後から探ささえすれば、済むからだ。人殺しをしたりそれを命じる者は皆、そうしてもいい動機があると思込んでいるものだ。

*** 戦争については、どうお考えですか？**

戦争と呼ばれる集団的な殺人や殺戮は、霊的な視点から見れば、最も重い罪の一つである。無数の命が奪われるという理由だけでなく、生き残る者に与える破壊と苦悩には、計り知れないものがある。それゆえ、戦争を煽ってはならないことも、非常に大切な霊的な助言であると伝えておこう。戦争の最高責任者たちは、彼らが与えた損害をすべて修復するまでは、永く辛い償いを耐えねばならない。

*** でも、たいていの場合、戦争に赴く人は自分がひどいことをしているとは気づかずに、祖国のためとか、自分たちのイデオロギーや宗教的な信仰を守るためなど、いいことをしていると信じ切っていますよ。**

それは自分を欺いているか、騙されているのだ。殺人を正当化し得るほどの理念や信仰や祖国など、何一つないからだ。

したがって、「聖戦」というものは存在しない。そんなものは、人間が作り出したものであり、富や権力への野望を正当化するために神を利用して、狂信によって、他の人たちに仲間を殺しをさせようとするものだ。

ゆえに、戦争を先導してはならず、戦争に参加してはならない。それを正当化できるものは、何一つとしてないのである。

*** 死罪についてのご意見も聞いておきたいのですが、死刑は、世界の多くの国で、重い罪を裁く妥当な方法とだと考えられています。**

死刑は、どんな事情があるにせよ、またいかなる理由があろうとも、霊的な観点からは恥ずべきもので、残虐で恐ろしく、身の毛のよだつ、おぞましいものである。

あろうことか、最も宗教心があり神の信徒だと自認する国々が、犯罪者への罰として死刑を適用するのに一番熱心である。それを我々が、どれほど深く嘆きながら見ていることか。

裁きの代理人たちが、法に背いた者に死刑を課して、罪人と同じレベルになるならば、どの点で殺人者よりも優れていると言えるのだろうか？

より残酷な国家では、軽犯罪に対しても死刑が適用される。中には、霊的に見れば罪に値しないものまでが含まれる。たとえば、そこでは愛してもいない男性との結婚を強いられる女性が大多数なのに、夫に不実であると処刑されてしまう。

一神教を奉じる三大宗教、つまり多数の国の何十億人も信者が、この「殺すなかれ」が織り込まれた十戒を聖なるものとしている。しかし実際には、どれほどの人たちがこの掟を尊重しているだろうか？ 最も信心深いと言っている者が、この掟を一番守っていないように見えるではないか。

よくあることだが、自分の宗教の儀式や規則をすべて守り、従わない人がいると目くじらを立てる、熱心な信者を自認する者が、実は最も感性に欠け、情け容赦がないのだ。そういう者は、人の生命や苦悩には全くお構いなく、死刑を擁護したり、自国の子どもを軍役に就かせて戦争によって他国の兄弟たちを殺すように煽るのだが、自分たちが神に祝福されていると強く確信している。

神の真の信奉徒でありたい者は、正義の行為に見せかけたこのおぞましい犯罪に、真っ向から反対せねばならない。死刑が正当であると思わせているのは神ではなく、自身のエゴを神の似姿に仕立てあげたい者どもの狂信によって支えられていると知るべきだ。

*** 人殺しをしたり、誰かや大勢の死に対して責任のある人が死んだ後は、どういう運命が待ち受けるのでしょうか？**

通常、一部の霊たちの間で「奈落」と呼ばれる、下層アストラル次元の特定の場所に拘留される。そして、自分と同じような犯罪を犯した者たちと共に、犯した罪の大小に応じて、かなり長い間そこに留まることになる。

そのような場所で、犯した犯罪の場面を何度となく再体験させられるが、今度は犠牲者の苦悩をあたかも自分のもののように感じるので、その苦しみは最たるものだ。このような者は、お互いに苦しめ合ったりもするが、復讐に執着する進化の乏しい犠牲者の魂にもさいなまれる。

犯した罪を自覚し後悔する兆候が見えると、より進化した魂によって「奈落」から救い出されて、救助所に運ばれ、回復の手当てを受ける。その後、自分の罪の更正のための準備に取りかかるが、それはまず霊界で始まる。一例を挙げると、自分と同じ状況にいる者たちの救出を手がけたりする。そして、機が熟して物理的な次元に転生すると、罪の償いに捧げる人生を送りながら、それを継続していくのだ。

*** 自殺について話されることはありますか？**

自殺は自分自身を殺すことに等しく、霊的には魂の成長の機会を無駄にすることになるので、否定的なことだ。それはまた、試験を欠席してしまうのと同じであるが、今回中断してしまったことは、次の転生で、再び立ち向かわねばなくなるのだ。

*** 自殺者は霊的な次元で、どういう運命を辿るのですか？**

一般的には、混乱した状態で、繰り返し自分が命を絶った瞬間を思い出し、近親者の悲しみを自分のことのように感じるものだ。再体験を繰り返すうちに、自分の取った行動がいかに無意味なものであったかを意識するに至る。自覚して後悔し始めた兆しが見えると、彼らには新しい転生が準備される。それほど時間をおかないで生まれ変わることが多く、中断してしまった人生で越えなければならなかった試練と同じものに直面することになる。

*** 安楽死に関してはどうですか？ 治癒の可能性のない病人や末期患者の場合のように、それを擁護できるケースがありますか？**

前にも言ったと思うが、生命とは神聖なもので、死が自然にもたらされる前に中断してはならないものだ。苦しみを避けてあげたいという善意からでも、命を打ち切るという行為は、霊的視点からは良くないことだ。

苦境にいる人たちの命を全部終わらせてしまったら、誰もこの世になくなってしまう、と気づかないかね？ 人が直面する状況はすべて、それが遺伝性の病気であろうと、半身不随であろうと、どれも、その魂を成長させる意味があるのだ。それらは、魂が生まれる前に選んだ試練なのだよ。

寿命の前に命を中断させても、その人は別の機会に戻ってやり残した課題を終わらせる羽目になるので、全く助けとならない。苦痛を味わっている魂は、時折おじけて、命を断って逃げ出したいと思うことがあるが、安楽死によっては、その状況から抜け出すことはできない。

***でも末期患者の場合なら、安楽死を正当化できませんか？**

死にかけているのなら、死を早めることにどういう意味があるのかい？ 自然に死なせてあげなさい。

***おそらく、苦痛を短くしてあげるためでしょう。多くの末期患者が耐え難い痛みを抱えていますから。**

ならば、痛みを緩和してあげなさい。だが、命を途絶えさせてはならない。

***では、永く昏睡状態にある場合はどうですか？ その場合には安楽死を弁明できますか？**

いや、その場合でも擁護できない。人が肉体生を終え、この世を去らなければならない時には、霊界から助けが来て、なるべく早く身体から離脱できるようにしてくれる。でも肉体にまだ生命が宿っているのなら、その人生にまだ意味がある、ということだ。なぜなら、寿命が来て魂が肉体を脱ぐ瞬間が訪れたら、君たちが何をしようとも、その人の旅立ちを避けることはできないからだ。

***中絶について話しておかれることはありますか？**

このことについては前作で深く取り上げているので、ここで繰り返すのはやめておこう。犠牲となる胎児の顔を見ることもなく、その苦しみがわからないとしても、妊娠中絶が殺人であることに変わりはない。空襲を命じる者たちは犠牲者の顔を知らないが、それでその罪が軽くなるわけでないのと同じことだ。

胎児に宿った魂は、拷問されて殺される人と同じくらい苦しむのだ。そんな苦しみを与えずに済めば、自分自身の子どもの死刑執行人となって、苦悩することもない。

生命を尊重するのだ。生命は、進化のために与えられた非常に貴い天の恵みである。殺人、戦争、死刑、自殺、安楽死、中絶といった、どのような形であろうと、またいかなる理由であろうと、絶対に命を絶ってはならない。そうすれば、自分自身のためにも、他の人のためにも、多くの苦悩を回避できる。

***第六番目の戒律は、「不純な行為をしてはならない」です。**

これも、時代と共に変化してきた戒律だ。カトリックやキリスト教の申命記の訳では、「姦淫してはならない」とある。

***どちらが正しいものなのですか？**

どちらも正しくはない。申命記に記載されているヘブライ語の十戒を見てみれば、この戒の最初の訳は「姦淫してはならない」ではなく、「売春してはならない」であると気づくだろうが、それは「望まない性行為を誰にも強いてはならない」というに等しい。

取り決めによる結婚も、この戒律の及ぶ範囲だ。伴侶の一方に——通常は女性になるが——望まない性関係を持つことを義務付けるからだ。つまりこの戒は、婚姻関係があろうがなかろうが人に望まない性行為を強いてはならない、という意味である。

この時代の女性や子どもの権利（特に子どもの）は無に等しく、彼らは、家畜に毛が生えたも同然の扱いを受けていた。

女性は、特に最下層に属していれば、いたいけな幼少期から商品とされ、奴隷や娼婦として売買されて、お金を払うことができた者たちの低俗な本能をみたく道具とされた。女性が誘拐されたり強姦されることなど、日常茶飯事だった。戦時には、たびたび戦利品とされて、兵士に強姦されたあげく、娼婦や奴隷にさせられた。

取り決め婚も日常的で、家族でさえも自分たちの娘をお金や権力がある人と結婚させることができると、いい取引をしたと思っていた。親の利益のために、少女が大人や老人と結婚させられたり、男児と女児同士の結婚も頻繁であった。子どもたちがまだ小さい頃や生まれる以前に、親同士の決断で婚姻が取り決められていたので、結婚の90%以上には、弱い方の伴侶の意志が反映されていなかったと言える。

権力者や野心家は、より一層の富や権力を貯えるためや領地拡大の手段として、あるいは単なる気紛れから好き勝手な人を性的に所有できるように、婚姻を利用した。一夫多妻はふつうのことで、富と権力の象徴であり、良いことと思われていた。

これほどまでの搾取と屈辱を忍従させられていた、女性や少女たちの苦しみを想像してみしてほしい。この戒律は、そのような搾取のすべてに歯止めをかけようとしたものだ。それなのに、ここでもまた人間のエゴが、犠牲者を刑事に、刑事を犠牲者にすり変えてしまった。なぜなら、すぐに罰せられるのは売春を強いられた女性たちとなり、売春を担ってこの掟に背いた、娼婦幹旋者、レイプ犯、強引に夫となった者、あるいは娘を売って商売した親などは、お咎めなしとなったのだ。

***この戒律を変えようとした動機は何でしょう？** つまり、いつ、どうして、「売春してはならない」が「姦淫してはならない」になったのでしょうか。

権力者が堂々とレイプや売春をしていれば、「売春してはならない」という戒律に違反していることが明白になる。政略結婚も一夫多妻制度も、代わりに妻や妾たちを扶養しなければならなかったものの、権力者にだけ許される人目を欺く売春や強姦の一種であった。実際のところ、この慣習はモーゼが生まれるずっと以前から、広く行き渡っていたのである。

モーゼはそのような搾取の実態を知り、大変な憤りを覚えたので、聖なる助言を抛り所にして、その廃止を法令化しようとした。彼の生存中は、最も目にあまる乱用行為を止めることができたが、彼の死後は、支配者たちが彼らの都合のいいように、この戒律を解釈し始めたのだ。だが、戒律自体を変えてしまう度胸はなかったのも、元の意味が曖昧になる新たな法律を発案して、それを付け足した。

始めに、政略結婚や一夫多妻制や妾を囲うことが神の意に叶うことだというイメージ作りをし、結婚はそれ自体が聖なる制度であるとした。次に、不用となった妻たちの扶養義務から逃れるために離縁制度を考案し、この戒律自体の解釈を変え、売春していたのだと告発して、離婚を女性のせいにした。

中には本当に、恋愛感情を抱く別の男性と性関係のある女性もいたが、それは、無理やり権力者の妻にされていたために、公にその人とつき合うことがならず、人目を忍ぶ恋をしていたからである。

また他の女性たちは、離縁によって社会から完全に閉め出されてしまい、身売りをして生き延びるしか術がなく、虚偽の罪状を現実のものとして認める羽目になってしまったのだった。

カトリック教会はさらに大胆で、最終的にこの戒律を改ざんしてしまい、配偶者を選ぶ自由は無視して、婚姻制度を最も重要なものとした。のちの時代の権力者たちも、エゴを満たす武器として政略結婚を利用し続けており、それを放棄する気がなかったからである。

そのために不義密通という概念を導入し、掟の再定義に利用したので、この戒律は「姦淫してはならない」に変わり、婚外交渉を持つ配偶者を罰することが可能になった。だが、カトリック教の社会もユダヤ教のように男尊女卑が根強いので、実際に姦淫罪で有罪とされたのは女性だけで、男性は咎められることなく依然として二重生活を送っていた。

*** お話にもかわからず、最も信仰心の篤いとされる社会では、今でも取り決め婚は正常で神が喜ぶと見なされている、一般的な習慣です。これについて話されたいことはありますか？**

取り決め婚は、外見上「潔白」に見せかけているが、実は制度化された蹂躪形態である。この点に関して疑義が生じないように補足すると、取り決め婚は、自分が選んでもいない相手と暮らして性関係を持つことを強要されるので、靈的な観点からは、自由意志の甚だしい侵害であり、人の感情を極度に屈折させるものである。

しかも、言うことを聞かなければ神の計画に背く不純で汚い人だと思いつまされるなど、脅迫や恐喝の限りを尽くして隷従から逃れられないようにされるので、「神の名を、利己的な目的に使ってはならない」という掟にも違反することになる。

*** それでは、不義密通は靈的に見て悪いことなのですか、どうなのですか？**

この件については、パートナーとの関係について話した時に幅広く扱ったが、靈的な次元では、自分の感情に誠実であるか否かが唯一の問題だと言った筈だ。それが、幸せへの鍵であるからだ。

夫婦にお互いに男女の愛情があれば、自然に忠誠心が湧いてくるものであり、その無理強いはできない。

世間のしきたりは、ここでは問題でないのだ。無理やり夫婦にされれば、強要された伴侶とセックスすることを嫌悪して、間違いなく大反発するだろうし、自分で選んだ人と交際して性関係を持ちたいと願うに決まっている。また、自分で決めた関係であっても、愛情がなければ不満を覚え、性欲が減退しセックスを拒否するかもしれず、別の関係で満たされない思いを埋めようとするだろう。

このようなケースでは、不義または密通と呼ばれるものは、夫婦間に男女の愛がないことを反映している。そのような夫婦は、我慢しているか、愛のない関係を強いられているかで、家庭の中に見出せない愛を外に求めているのだ。

ラテン語源学上では、「不義密通」という言葉[adulterio]は、物の品質や純正さを異物を混ぜて変化させてしまうことや、真実を偽ったり改ざんすることを指す「偽造する」という語[adulterar]から派生している。

これらの意味を知ること、不義密通という言葉の靈的な定義がわかりやすくなる。不純な関係とは、二人が外見的には愛情があるふりをし一緒になっておきながら、本当はそうでない場合である。つまり、愛のないカップルの結びつきは、演出された偽りのものであり純粹ではない、ということだ。

パートナーとの関係が相互の愛の感情と類似性に基づいていれば、靈的な定義においても現世的な意味においても、不義密通は存在しなくなる。愛する者と一緒にいれば、性関係も真に満たされたものとなるので、性欲を満たすために別の関係を求めようとしなくなるからだ。

だが、これが実現するためには、感情においての自由がなければならない。よって、人間がこのことを理解できるまでに進歩した今日においては、この「売春してはならない」という戒律は、「感情の自由を尊重せよ」に置き換えられると言っておきたい。別の言い方をすると、すべての人は、誰とカップルになりたいか、またはなりたくないかを、性的な関係を持つことも含めて、自由に選ぶ権利があり、何者もこの権利を侵してはならないということだ。それゆえ、誰も、望まない相手と一緒にいることを強要されはしないし、嫌な関係をずっと続けるように強いられることもない。

*** 教会で褒め称えられている婚姻非解消主義はどういう位置づけとなりますか？**

前にも言っただろうに。署名入りの結婚契約書の有無にかかわらず、確固とした愛情がある場合には、夫婦の関係は自然に続いていくのだ。継続を強制することは、自由意志の侵害になってしまうので、してはならない。

婚姻の非解消は神聖な法律ではなく、人間が考案したもので、モーゼもイエスも関係ない。事実、これは、イエスが地上にやって来てから千年以上も経って、導入された規則である。歴史を復習してみるがいい。キリスト教徒のローマ皇帝が支配していた間はずっと、離婚は合法であった。キリスト教徒の皇帝の時代の民法では、離婚後に再婚することを認めていたのだ。ローマ帝国が解体して誕生した国家も全部が、離婚を有効としていた。

キリスト教国家で婚姻非解消主義を推進したのは、法王グレゴリオ9世（在位：1227 - 1241）である。彼は、当時の皇帝や王族と敵対していたために、彼らが頻繁に妻を取り替えているのを見て、法令を出したのだ。

*** それでは、離婚しても天の法則に違反することにならないのですか？**

もちろんだ。その反対に、自由意志の行使と感情における自由を選択できるので、良いことだ。先にも言ったが、望まない関係を続けるように強要される者は一人もいない。それに靈界は、人間の自由意志や感情の自由の妨害などしやしない。

*** 離婚が増えているのは、夫婦間の愛情が減ってきているからだと解釈する人がいますが、そうなのでしょうか？**

いや、そうではなく、もっと自由に関係を切れるようになったという事で、満たされない関係を終わらせることに、心の咎めを感じなくなったことの反映である。

以前の方が離婚が少なかったとしても、関係が良好であったからでも、もっと愛があったからでもない。そうではなく、法律で離婚が認められていなかったためか、合法であっても抑圧的な教育を受けたせいで、多くの人たちが、愛がなくてもその関係を継続させねばならないと感じていたからである。

*** 「売春してはいけない」という戒律の話のついでに、霊的な視点からは売春をどう見ているのか、ご意見いただけますか？**

売春は、感情の発達の成長が乏しいことを反映している。進化した魂ならば、愛のない性関係など理解できない。また、二人の合意がない場合は、なおのこと受け容れがたい。

売春で性欲を満たそうとする者は、感情が貧しく、愛の感情や感受性よりも本能に支配されている。

*** でも売春はどのように法令化すればいいのでしょうか？ 合法化すべきでしょうか、禁止するべきでしょうか？**

未成年が関係するものは、全部禁止すべきである。斡旋業者も客も——このケースでは小児性愛者になるが——追及されるべきで、未成年者は二度とそのような搾取をされないように保護されなければならない。

成人の売春に関しては、強制されたものを禁ずるべきである。つまり、売春をする者が、そうするように何らかの方法で、強要されたり圧力をかけられる場合である。これは自由意志の侵害となるので、司法は売春を強いた者を追及すべきであるが、強制的に身売りさせられていることを客が知っていた場合は、客も同様に処罰されるべきである。そして、それ以上の痛手を受けないように、身売りさせられていた者を保護しなくてはならない。

誰も経済的な理由から売春をせざるに済むように、政府も、経済的な糧のない人たちを支えようとするべきである。他の選択肢がなくどうしようもないので、自分や家族の食い扶持を稼ぐための最終手段として売春に訴える者がいるが、そういう売春では、社会そのものが共犯者なのだ。

しかし、家族を扶養する必要もなく、十分な自己決定能力がある人が、自発的に身体を売ることを自分自身で決意した場合には、それを禁ずる

ことはできない。このような決断自体が、当人の内面の乏しさを映し出しているとはいえ、その人は自分の意志でそうするのであり、客がそれを強要して犯罪に加担したわけでもないのだから、この場合は自由意志の侵害の対象とはならない。

また、売春を完全に禁止しても、かなり原始的な性本能を満たす需要が多く、自由意志を尊重できない君たちの世界の現状では、それを根絶することはできないとつけ加えておこう。むしろ、その結果、強姦や性的虐待のケースが増えて、売春も秘密裡に行われることだろう。よく考えてみれば、君たちの社会で自ら売春に従事する人たちは、多くの強姦や性的虐待を防いでくれている。それがなければ力づくで性欲を満たそうとする、進化の遅れた大勢の魂の低級な本能を、自分から進んで満たしてくれているからだ。

それゆえ、君たちの世界では、強制的には売春を排除できないだろう。そうすることによってではなく、人類が感性を十分に発達させて、性欲が生物的な本能を満たすものから、男女の愛の想いを表現するものに変った時に、売春は自然となくなるだろう。そして、これを達成するためには、人間が感情と性的な面で、自由を獲得していることが外せない。そうなれば、性的な関係も自然なものになり、それが商売や搾取の目的に使われることもなくなるのだ。

*** 次の戒律は、「盗んではならない」です。**

そう、人は通常、盗むということ、誰かからその人に属する物的な所有物を無断で取り上げる行為である、窃盗のことだと考える。そのため、スリや、銀行や宝石店などの店舗を襲う強盗などのことを泥棒だと見なしている。

しかし、ペテン、詐欺、恐喝などで、労働者からその報酬に見合う賃金を取り上げて私腹を肥やす者や、人の損害、苦しみ、欠乏などの犠牲の上に権力や富を貯える者は、司法によってその罪が暴かれることがなくても、実は最たる泥棒なのだと言っておこう。

したがって、「盗んではならない」という第7戒律は、「偽りの証言をしたり嘘をついてはならない」という第8戒と「人の財産を欲してはならない」という第10戒と共にまとめられる。このどれにも、自己のエゴを満たすために人に損害を与えるという意図があるからだ。そう考えてみると、これらの三つの戒律を一本化して、「**エゴに突き動かされて、他者に損害を与えてはならない**」という助言にすることができる。

最も物的なエゴの形態は、強欲、貪欲、野心である。これらのエゴは、他の人に及ぼす弊害には目もくれずに、自己の富と権力の貯財に夢中に

ならせる主犯である。だが、人間関係のテーマで扱った、執着、嫉妬心、憎悪、憤怒、独占欲、恨み、無念などのエゴ的感情のように、物質主義的ではない他のエゴの形態も、他者を傷つけるものだ。

*** 他の人に損害を与えずにお金持ちになった場合でも、霊的な負債を背負ったり、「エゴに突き動かされて、他者に損害を与えてはならない」という最大律を侵してしまうことになりませんか？**

掟を破ってはいませんが、進化した魂ならば、富を欲することもないし、金持ちになろうと時間や労力を無駄遣いすることもないので、大きな進歩を遂げてもない。進化した魂は、そのような状況には全く惹かれなないのだ。

人に直接的な損害を与えなくても、自由になる物的な富と権力を隣人の支援には使わずに、自分の物欲を満たすためだけに使うなら、成せたであろう多くの善を施せなかったことになるので、他者を助ける好機を無駄にして、自分自身も愛において進歩するチャンスを逃したことになる。ある魂が、公益に役立てるように物的な富を望みながら転生しても、生まれた後でそれを自分のエゴのために使ってしまうえば、そのミッションは失敗なのだ。

いずれにせよ、君たちの世界では、財産を相続するとか宝くじに当たるとかでもしない限り、誰にも損害を与えずに金持ちになることは難しい。君たちの経済や商業のやり方は、最も強い者の理論に支配されているので、そのような好戦的なシステムにおいては、それに毒されずに、善人が成功するのは至難の業だ。

*** 明確に言うと、どういうことでしょうか？**

君たちが資本主義と呼ぶ、地上に君臨する経済システムは、人間のエゴから生まれた制度であり、この戒律とは始終一貫して矛盾しているということだ。なぜなら、それは人間の権利を全く考慮することなく、止めの効かない法外な富の蓄積を追い求め、それを認めているからである。

*** 僕は経済のことはよくわかりませんが、マクロ経済の指標が多過ぎて、国際経済を推進しているものを理解することは、とても困難な気がします。多くの格差や不正、貧困が蔓延していて、それが益々ひどくなっているように見えますし、今日のような経済危機の時代にはそれが悪化しています。この現状では、人類のより良い未来を垣間見ることは難しく思えますが、どうしたらいいのかもわかりません。**

本当は見かけよりもシンプルだ。全体がとても複雑で、物事がそうになっているのは誰のせいでもないと思わせているのは、君たちに解決策がわからないようにして、責任者を追及できないようにするための。

現在の世界の経済システムは、ピラミッド型組織の大企業のようなものだ。それは、利子が増大してゆく巧妙な貸付制度に基づいており、利潤を得る仲買人の手を得るたびに利子が増える仕組みになっている。そして、一番最後に貸付をせずにお金を借りるだけの者は、借金とその利子とを自分自身の仕事と生産品で返さねばならないので、押しつぶされることになる。このような人が、ピラミッドの底辺にいる大多数なのだが、このシステムは彼らの労力で維持されている。

残りの者は、何であろうと安く買って高く売ることによって儲ける投機市場を創り上げ、高利貸しと投機で生きている。ここで売買される商品の中には、農産物、畜産物、海産物、鉱物や工業製品のような現物もあるが、他のものは株式、証券、投資信託など、「金融商品」と呼ばれる架空の産物である。

実際には、現状の物事はごく単純である。少数の者が貨幣を造幣する権利を独占してしまっているのだ。つまり、お金を造る機械を持っている、ということだ。ただ同然でお金を生み出すことができ、他の人たちにはそれに利子をつけて貸し出しているのだ、皆が彼らに借金を負ってしまう。彼らは、安く買い占めて高く売りさばく特権的な情報を常に持っているのだ、自分たちが創り上げた市場を操作して、皆を思惑通りに動かすことが、このシステムでは可能なのだ。

*** このことは、経済危機と関係しますか？**

その通り。経済危機というものは、偶然に起こるものではなく、ピラミッドの頂点から誘発されるものだ。手始めに、多くの人の借金が増えるように、低利子でお金を貸してあげるのだ。ピラミッドの下層にいる人たちには、数段階の仲買人を経た後に、より高利でこの貸付金が回ってくるが、このお金を使って商売をしたり財産を購入したりするので、経済が活性化して消費が増える。

これがいわゆる好景気に当たる。この時期は、表面的には裕福であるが、すべてが借金で成り立っていて、それに利子をつけて返済しなければならないので、上辺だけのことである。

上層部の漁師たちは、沢山の魚が餌に食らいついた——つまり、多くの人が借金を背負った——のを見届けると、釣り糸を引き上げて、獲物を収穫する。これは、ある時期に財布のひもを締めて、貸付金の流れを止めてしまうという意味だ。すると、資金が不足する。借り入れをする

ためには、ずっと高い利子を支払わねばならなくなり、それまでに許与されていた貸付金の利子も高額になる。

何もかもが、経済活動の妨げとなる。負債者は借金を返済できなくなり、財産を没収されてしまう。国民の生活レベルは顕著に悪化するが、一方で、それまでに貯えられた富はこのシステムを牛耳る者たちの手に渡る。こうして金持ちは益々金持ちになり、貧乏人はより貧乏になる。経済危機はこのようにして起こるのである。

*** これには一体、どういう解決策があるのでしょうか？**

解決策は簡単なものだ。各人が自分の置かれた立場で、エゴを、つまり貪欲と強欲とを放棄し、分かち合うように努めるのだ。他者を自分自身のように見て、その人の幸福も自分のもののように気にかけてあげることだ。皆がこの一步を踏み出すならば、世界は瞬く間に変わるだろう。

現状の経済システムが保たれているのは、人間の強欲や貪欲、野心がふんだんで、愛や寛容が乏しいからだ。ほとんどの人が分かち合おうとしない。多くを所有する者は、自分が持っているもので満足しない。自分の豊かさを持たざる者と分かち合おうとはせず、他の人びとを犠牲にしてでも、それ以上のお金と権力を、さらに手に入れることを目指す。また、大勢の持たざる者たちも、上層階級の者のように、成功して金持ちや権力者になりたいと望むので、彼らが持てる者の立場になれたとしても、同じことしてしまう。

それゆえ、上部の者たちを入れ替えるだけでは、不充分である。我々全員が本当は霊的な存在で、同じ霊的進化の道を歩む仲間であり、愛を体得して幸せになるという目標を共有し、そのために互いを必要とし合っていると認識できるような、人類全体に及ぶ集合的な意識改革が起こらなければならない。

富を溜め込んでも幸福になる役には立たないが、生きるために必要なものがなければ苦しむことになる、と気づくことが肝心だ。こうして、豊かにある物を分け合えば誰も損はしないし、皆が恩恵を受け取ることになる。だが繰り返しになるが、そのためには富の蓄積を放棄し、分かち合おうとしなければならない。

*** 素晴らしい展望ですが、まるで夢物語です。もっと具体的な対策があるべきだと思います。**

対策の処方箋を望んでいるとしても、そんなものは存在しない。エゴを放棄して分かち合いで兄弟愛に努めようとする、人間の意志と善意次第だからだ。そういう協力精神がない限り、すべての努力は水の泡だ。

愛に基づく社会変革を実現したいと大多数の人たちが願い、それが根付くように精力的に協力してくれねばならない。強制によってや、全般的な協調がないならば、何も成し得ないからだ。

指導者には、靈的に高度の許容力を持つ人たちを選ぶ必要がある。愛に満ち、謙虚で、寛大で、貪欲・強欲・野心を一切持たず、状況を把握していて、公共の益・社会の正義・富の公平分配を促進する方策を探る用意がある人たちだ。そういう人たちならば、その場その場で、すべきことがわかるであろう。

大至急すべきことの一つに、高利貸しと投機で成り立つこの経済システムを解体し、利己的な手口が世界に再臨しないように見張って防いでくれる、正義感のある公平な法を制定することがある。したがって、「エゴに突き動かされて、他者に損害を与えてはならない」という戒律は、「公共の益・社会の正義・富の公平分配を促進せよ」で補完されることになる。

*** 今一度に三つの戒律を分析してみたので、残りは「不純な考えや願望を抱いてはならない」のみになりました。これについてはどうですか？**

そんな戒律は存在していない。申命記にすら記載されておらず、後世の発明品である。プロテスタントのキリスト教会にも見られない。エゴなく行動するのも難しい人間に、エゴ的な考えも持たないように要求すること自体が望み過ぎというものだろう。

しかも「不純」とされるのは、おそらく、教会の法規で許容外である——つまり婚姻関係以外の——性的な願望を指すのだろうが、この定義もかなり曖昧である。この戒律は、感情と思考や性における自由を抑圧しようとした人間が創り上げたものなのだ。

*** 三つの戒律を一つにまとめたり、一つを除いてしまったので、十戒が七つになってしまいました。**

一体誰が十個でなければならぬと言ったのだね？ だが構わなければ、とても重要で配慮すべきに思える助言が私にはあと三つほどある。

*** どのようなものですか？**

「自由意志を尊重せよ」、「靈的裁きの法則を尊重せよ」、「個人的または集団的な争いごとを平和に解決せよ」である。もめごとを平和に解決するには、個人レベルでも集団レベルでも公正であり、他者の自由意志を尊重しなければならないので、この三つの助言はお互いに深く関連している。

***それぞれの意味がはっきりするように、もう少し深く取り上げてくださいますか？**

「自由意志の法則」と「霊的裁きの法則」がどういうものかを説明した時に話してはいるが、もう一度見てみよう。

「自由意志を尊重せよ」は、他の人たちの自由を尊ぶことである。つまり、その人たちの意志、意見、信仰、感情や人生における決断を尊重するということだ。感情における自由も、自由意志の一部に過ぎない。誰も誰にも属さないで、誰にも他者の意志を奪う権利はないし、他者に代わって決断することもできない。

「霊的裁きの法則を尊重せよ」は、他の人たちに、自分にしてほしいことをしてあげることであり、自分にしてほしくないことはしないことである。なぜなら、実際のところ、他者にすることはすべて自分自身にすることになるからだ。そしてこのことは、個人レベルにおいても集団レベルにおいても、守られねばならない。

***個人レベルのことはわかりますが、集団レベルとはどういうことですか？**

人類全体が和合して共存するためには、正義と自由意志を尊重してそれを実践して見せねばならず、社会機能や統治形態、さらに法律、経済、教育、文化などに反映させないといけない。理論上では、自由と正義の原則が法令化されている国々においても、実際にはそれはエゴによって反故にされ、ただの紙切れに成り果ててしまっている。

***例を挙げてくださいますか？**

歴然とした奴隷制度はどの国においても不法とされているが、事実上は全人類が、搾取と虐待とを黙認して助長する経済・政治システムの下に統治されていて、奴隷制なのかと見違えるほどだ。多くの国が外見的には民主主義であるが、実はその内に、国民に奉仕するふりをしながら逆に利用して、利己的な目的を果たそうとする政府が潜んでいる。平和を希求するふりをしながら戦争を推し進め、他の選択肢を探そうともしないくせに、それが唯一の紛争解決の手段であると思わせる。他の方法を模索しないのは、エゴ、野心、貪欲に目が眩んで、代償を顧みずに突き進もうとするからだ。

だが、その気になって他の人たちを尊重して理解しようと努め、自分の利己的な行為を放棄する心構えを持てば、常に代替策はあるものだ。だから、「個人的または集団的な争いごとを平和に解決せよ」という助言を頭に置いておけば、君たち自身や他の人たちのために、多くの苦しみを回避してあげられる。絶対に、暴力、脅迫、恐喝に訴えてはいけな

い。また、自分に理があると思っっている場合でも、自分の意志を他者に押しつけてはならない。

*** ちょっと疑問が出てきてしまいました。万が一、襲われたり、虐待されたり、脅迫されるなど、一言で言うと、自分の自由意志が他者に脅かされるような事態になった場合には、争いを避けるためにその暴力を許容すべきでしょうか、それとも防衛する権利があるのでしょうか？**

もちろん防衛する権利がある。身を守る権利があるだけではなく、そうせねばならない。他の人たちの自由を尊重するのと同じように、自分自身の自由も守らねばならないからだ。

争いを避けるというのは、一番強い者の意志に屈することではなく、暴力を避けつつ解決する、という意味だ。もっとも、相手のレベルまで身を落とす必要もない。

*** この点が明らかになるような例がありますか？**

夫から虐待を受ける女性がいるとするなら、どんな事情であろうと絶対に我慢するべきではないが、これは、相手と同じレベルになって暴力を仕返すという意味ではない。加害者から離れてDVを告発し、正義の裁きに委ねるのが理にかなっているだろう。

*** でもそうしたら、加害者はきっと怒り狂って、暴力をエスカレートさせて、争いもさらに激しくなるかもしれません。そうなると、平和に争いごとを解決するという助言に反してしまいますが、これについてはどうでしょう。**

暴力は被害者の態度からではなく、自我を押し通すことのできない加害者によって生み出されているのであるから、ここで平和に紛争を解決するという助言を適用すべきなのは加害者であり、被害者ではない。平和主義であるのと従順になることを勘違いしないでほしい。両者は違うものだ。ここでは平和主義者になることを勧めてはいるが、従順になるように言うてはいないのだ。

両者の違いがわかるためには、兵役が義務付けられている国でそれを拒む平和主義者がいい例となる。こういう人は、ふつう不従順だとされないかね？ つまり平和主義者とは、暴力に対して不従順な人であり、確固たる信念を持って首尾一貫した行動をとる人なのだ。そのような人は、自分の良心が正しくないと思うことを強制されて行うことはないの、自己の自由意志が侵害されないように戦っていることになる。

*** 集団的にも、たとえばある国が他国から侵略されたとしたら、防衛する権利がありますよね？**

防衛権はあるが、それは常に平和的な解決策が尽きてからだ。

ガンジーの例を見てみれば、平和主義者と従順な者との違いが理解できるだろう。彼はまた、暴力に訴えなくても、崇高で公正な理念に対する信念と堅固な意志さえあれば、大きなことが成し遂げられることを証明してくれている。

大概の戦争や武力抗争は一朝一夕に起こるものではないし、それを引き起こしたいと思う人たちも少数派である。武力衝突の背後には一般的に、少数の者たちの利己的な関心——つまりある物を独占したいという野望——があり、人びとを騙して汚い仕事をさせるのである。好戦的な野心家どもを指導者の地位から追放すれば、すべての戦争や暴力的な紛争が回避できることだろう。

*** でも、ガンジーが成し遂げられたことは例外だと思うのです。たいてい、いつも強者が弱者を服従させます。それにそういう方法でも、多くの犠牲者が出ました。**

戦争になっていたら、もっと多くの犠牲者が出たであろう。しかも君の言う通りであっても、人生の意味は政治的な闘争にあるのではなく、霊的進化にあるのだ。

それに、ある国が他国を不当に侵略していると君たちが思い、結局は強者が弱者を支配するのだとの結論に至ったとしても、今日の被侵略者が昨日の侵略者であるかもしれず、過去にやったことを経験している可能性もあるのだ。人類の歴史を振り返れば、民族間の闘争は途切れることなく続けられてきたが、時代によって、抑圧者と被抑圧者の立場は入れ替わってきた。抑圧された民族は、ごくたやすく抑圧者となる。以前そうでなかったのは、抑圧者になりたくなかったわけではなく、単になれなっただけだからである。

そしてこれは、全民族、全人種に、野心と貪欲や強欲に満ち溢れた非常に原始的なエゴを持った魂が転生していたからであり、誰が一番富と権力を掌握できるかと互いに争い合っていたからである。これまで人類を互いに争い合うように駆り立ててきたもの、そして現在においても駆り立てているものは、野心、貪欲、強欲、そして狂信である。だが、どれほど強大な帝国であったとしても、どれも、時の流れと共に崩壊してしまった。愛の基盤がないものは短命なのだ。

以上のことから学びとるべきことは、野心と貪欲や強欲の姿を借りたエゴは多大な苦しみを生み出し、誰もその苦しみを味わいたくないの

で、各自が心の中からエゴを排除すべきであるということだ。この教訓を身につけたあかつきには、国家、民族、人種、宗教の間で、再び争いが起こることはないであろう。転生する魂には、いかなる動機も兄弟を傷つけることを正当化できはしないし、そうすれば自分自身を傷つけることになる、はっきりわかっているからだ。

イエスの地上での使命 —その2—

*** 霊的に成長する上で転生がそれほど重要なことだということに、イエスがそれを直接はつきり話さなかったことに驚きを覚えているのですが。**

もちろん話したとも。「魂の法則」についても説いたし、霊的な進化と関係することは、全部わかりやすく明瞭に教えたのだよ。君たちが持つ彼についての情報が正しく完全だとは限らない。

*** 根拠を示せる文書は残っていますか？**

君たちの世界で、イエスの人柄や功績について本当のことを知っている者は誰もいない。彼の思想や人物像や伝達された教えのほんの断片が残っているに過ぎない。しかも、僅かに保存できた彼の功績でさえも、その大半が改変、歪曲されてしまい、当時の支配層やその後世界を支配してきた者たちにより、人びとの目から隠されてしまった。そして、今でもそうされている。真実が明らかになると自分たちの利己的な利益が損われると考えているので、一切の事実を知られまいとしているのだ。

*** でしたら、そのような知識は何も新しいものではないのですか？**

もちろん違っても！ それは、有史以来、地球のさまざまな場所で伝えられてきたのと同じメッセージだ。伝達したのは実際にはいつも同じ霊性の使者たちで、地球の平均よりも進化しており、「愛の法則」と他の霊的な法則を熟知した者たちだが、転生した時代によってそれぞれ異なる名前で見られている。

*** でも、どうしてそれを知り得ることがなかったのですか？**

もう、話したではないか。霊性の使者たちが帰ってしまい、その教えが霊的に劣った者たちの手に落ちると、彼らによって、当初の教えの中に利己的な考えが織り込まれてしまったのだ。元の伝達者たちがいなくなっていたので、改悪を止めることもできなかった。

イエスという特定のケースにおいても、それと同じことが起こったのだ。時の経過と共にイエスの教えは歪められていったが、それは常に、支配者たちを有利にするためか、彼らの利権を損なわないようにするためだった。彼らは書記を雇い、本当の教えを徹底して改変した。そうして、支配者たちは人民に知ってほしくないことを消去し、書いてあった方が都合がいいことが加筆されたのだ。

*** 消されてしまった教えはどのようなものですか？**

ここで一緒に学んできた教えと同じものだ。魂の転生についての知識や、進化の法則などである。自己の人生と感情に関しては自分で決定できるという各人の権利も該当する。動物も含む最も弱く無防備な存在たちの生命と権利を保護して尊重しようという呼びかけも同様だ。

つまり、あらゆるエゴの形態——中でも強欲・貪欲・憎悪——と虐待や搾取などを糾弾して告発しようとする教えのすべてである。このような教えは全部、元々の意味がわからないように、意図的に改変されたり消し去られたりしたのだ。

*** イエスは自分の教えがいじられないように霊界から防ぐこともできたのに、なぜそうしなかったのですか？**

それは自由意志の侵害になってしまうので、イエスであろうと他の霊界が遣わす使者であろうと、誰も、世界を望み通りにすることができないのだ。唯一できるのは、人間のエゴによって台無しにされてしまったものを再建するために再び生まれ変わることだ。

*** それは、イエスがもう一度地上に生まれ変わるという意味ですか？二度目に戻ってくるのですか？**

そういうことだが、二度目ではなく、何度も来ているうちのもう一度に過ぎない。

*** では、キリストが再来するという予言は本当なのですか？**

キリスト（ロゴス・キリスト）は、遥か以前に人間の段階を超えることのできた大変進化した存在なので、もう転生はしないと話したろう。キリストは、霊的な使命を帯びて転生している人間の進化段階にいる魂たちに働きかけるのだ。

だが、イエスが転生するというのは本当だ。もっとも、すでに言った通り、二度目ではないがね。でもそれは、一部の人が待ち望むように、カトリック教会の陣頭に立つためではない。しかも、キリスト教徒を自認する多くの人たちからは、歓迎されないであろう。特にその上層部の者たちにね。なぜならイエスが戻るのは、二千年前にユダヤ教会を糾弾した時のように、彼の名においてキリスト教会が創りあげたあらゆる欺瞞と失態を暴くことも目的の一部になっているからだ。

*** 前にイエスがもう一度地上に生まれ変わるかをあなたに質問した時には、キリストの例で返答されて（「魂の法則」参照）、今僕がキリストのことを質問すると、イエスの話をするのはどうしてですか？ 二人は別々の存在なのでしょう？**

それは、君たちがイエスとキリストとを同一視しているからだ。確かに、イエスが再び転生する際には、実際にキリストからインスピレーションを授かることになる。しかしキリストは、他の大変進化した存在たちが霊性進化の任務遂行のために生まれ変わる必要が出る際にも、インスピレーションを与えることができるのだ。

*** お言葉からすると、イエス以外の人たちもキリストに感化されていたようですね。**

当然だ。

*** キリストは、救世主イエスが転生していない時期には、彼ほど進化していない人たちにもインスピレーションを与えられるのでしょうか？**

もちろんだ。というのは、キリストの場合も含めて、進化した存在たちは皆、特定の時代のたった一人にだけインスピレーションを与えるのではなく、イエスほど高いレベルではないとしても、無条件の愛を動機にして行動するすべての存在を感化するものなのだ。

転生する人間の進化の程度により、キリストやその他の高次の存在たちとの繋がり具合が決まる。多くの者が自分を重要人物だと思いたいのために「選ばれた者」になりたがり、愛そうとするそぶりをするが、エゴを放棄しようとはしない。霊界は、愛の道を進もうとする人には誰にでも手を差し伸べる。しかし、エゴが動機となって行動する者は、霊的に進化した存在たちからの応援は期待できない。

それゆえ、「選択」とは自分自身でするものであり、それは、エゴか愛かのいずれかを選び取ることである。どんな影響を惹きつけるかは、自分が選んだものによって違ってくるのだ。

*** キリストとイエスという組み合わせを、どう理解したらいいのでしょうか？ キリスト意識の状態とでも考えるべきでしょうか？**

キリストというのは高度に進化した霊的な存在で、君たちと同じように、独自の意志と個性をもって存在している。それゆえ、ある意識状態という以上のものだ。意識状態というのは存在そのものではなく、ある存在の表現形態だからだ。

人がキリストと繋がると、その人の意識は疑いなく、独りで到達できる限界よりも、ずっと広い範囲にまで拡張する。この超高次の存在からインスピレーションを与えられると、自分の力しかない時よりも確固とした勇気と決断力をもって行動できるので、取り組んでいる使命に役立てられるのだ。

*** 神以外で一番進化している存在は何ですか？ その存在は転生していますか？ どのような具体的、または全般的な使命があるのですか？**

進化の段階においては、キリストやイエスが神のすぐ下の存在だと思って君がそう訊いているのなら、あらかじめそれは違うと言っておこう。霊的な世界は広大で、キリストやイエスよりも高度に進化した存在は無数にいるのだ。そのような存在が生まれたのは、私にも進化の歴史を遡れないほど遥か以前のことだが、神は常に存在していたし創造をやめたことなどないので、その起源もわからない。

君たちには制約された認識力しかないのです、これらの存在に可能な最大の支援法が、人間として生まれ変わって地上に降りることだと思っている。だからイエスが神の生まれ変わりだと思ったりして、神そのものが人間に転生してもおかしくないという考えに至ってしまうのだ。

君たちの限られた視野では、超高度に進化した彼らの力がどこまで及ぶのかは、想像だにできない。彼らには、星の数ほどある世界と人類の創始者及び管理者として、想像し得るよりもずっと大きな責任があるのだ。一人の人間に生まれ変わることは、その潜在能力が雀の涙ほどの力に制限されることなのだ。

したがって、彼らが個人の人間として生まれ変わることはない。なぜならそれは人間に、蟻として生まれ変わって蟻の生活を送るように期待するのに等しいからだ。そのため、そういう使命を引き受けるのは、高次の存在の支援を常に受けているものの、進化程度が君たちに近い存在たちなのだ。

*** イエスが神やキリストの直接の生まれ変わりでないのなら、なぜ「私は道であり、真理であり、命である」と言ったのですか？**

君たちが知っているその文言が、そのままそっくりイエスの口から出たことはない。言わずとも普遍的であったメッセージを、自分個人のものにしてしまうことはできないからだ。

それは、「私は、霊的世界からの使者としてあなた方に霊性進化の道筋を示し、霊的世界の真実と魂の命の真相を教えにやって来た」というメッセージを簡略化したものに過ぎない。

*** あなたはイエスが何度もやって来たことがあると言われましたが、それは、ナザレのイエスという人物として生まれる以前にも幾度か転生したことがあるという意味ですか？**

もちろんだ。現在の君たちの公の歴史に書かれてもおらず、認知されてもいない古い時代に、地球に生まれ変わったことがある。

*** それらの人生では何をしたのですか？**

イエスは君や皆と同じであった。そして、十分に進化を遂げてから、霊的なメッセージを携えてやって来たのだ。

*** でも、イエスとしてやって来る以前にも、過去に似たような使命を果たしたのではないですか？ 彼のしたことが何か記録に残っていないのでしょうか？**

彼の任務は歴史のどの時代においても、人の魂に刻まれていく霊的な仕事であった。歴史の書物にその記述がなかったり、歪められてしまっているけれども、それが無駄になってしまったわけではない。なぜなら、霊的な教えに心を掴まれた魂は、その教えを絶対に忘れることがなく、以後の転生でそれを表明していくからだ。

イエスは、さまざまな時代の異なる場所に、愛のメッセージをもたらした。イエスは、この世の諸悪の根源がエゴであることを各時代の人びとに伝える方法を熱心に探し続けた。また、魂の諸法則と霊性進化の行程を人びとが理解できるように、基礎的な霊的な知識をできる限りやさしく伝えることにも力を尽くした。しかしながら、その時代の大部分の人たちは、今の時代とくらべると知性においても感性においても大変劣っていたので、彼の提案した改善案が実施されることはなく、彼が過去の世で認められることもなかった。人びとは、超常現象のように思えたイエスの数々の行いに惹きつけられはしたが、彼が布教した意味深い霊的な教えを汲み取ることはなかった。イエスが特別な存在であることはわかっていたのだが、彼を理解できなかったのだ。彼のことを理解することができたのは、最も身近な僅かな弟子たちだけだった。

それゆえ、同じ仕事を続けていく必要がある。そのため、当時イエスを理解できた者たちが、かつて進化不足のために教えがわからなかった人たちを助けようと、現在、継続して任務を担っているのだ。

*** 人類が救済されるかはつぎのイエスの転生次第なのですか？ それとも、イエスは過去にも転生していたので、また生まれ変わらなくても人類を救うことができるのでしょうか？**

「救済」というものを人間が愛に向かう霊的な変革と捉えるのであれば、ある特別な高次の魂の転生いかにそれが左右されるわけなどない。同時期に大勢の人が変われば集団的に愛の方向へ善い変化を起こせるので、それを「人類の救済」と呼べるが、それは特定の人によるのではなく皆によるのだ。

すでに話したが、霊的に進化するかは、個人が自分自身で決断して行動することによって決まるのである。イエスや他の高次の存在たちに、

進化の劣った人間を成長させる義務を負わしてはならない。進化した魂たちは、自らの手本を示すことで一般人を啓蒙する手助けはできるものの、進化するかどうかは個人的かつ自発的なものなのだ。これに関しては、全能の神でさえも君たちを強いることはない。

*** イエスの使命への理解が足りないために、彼が戻ってくれば僕たちの罪業をあがなってもらえると、思い込んだ部分もあるかもしれませんね。**

その通りだ。イエスの犠牲によって全人類が救われるのだとしたら、人は善を成すか悪を成すかにかかわらず、また何の徳もなく自分の意に反してまでも、救済されてしまうことになる。地球に高次の霊的な存在たちがやって来るのは、いつも同じ目的のためだ。それは、人類が自ら自覚して成長できるように、その指導をするためなのだ。だが、それをするかどうかは人類にかかっている。

*** イエスが十字架上で死んだことと人類の救済とが無関係なのだとしたら、なぜそのような大きな犠牲を払う必要があったのでしょうか？**

イエスは殺されるかもしれない危険を冒すことを知っていたが、人類に愛の教えを伝えるためにこの世に生まれ出ることを選んだのだ。しかもイエスは、人生のある時点で見せられたビジョンによって、事態がそのまま進展すれば磔にされて処刑されるとはっきりと知らされ、引き下がる選択も与えられている。高次の霊的な世界では自由意志が完全に尊重されているので、誰にも——たとえそれが自分たちと完璧に似通った存在であっても——何の強制もしない。

*** 殺されることがわかっていたなら、どうしてそれを避けなかったのですか？ これは、あなたが「魂の法則」に反するとする一種の自殺行為に当たりませんか？**

殺してほしかったわけではないし、磔にされて死んでみたかったわけでもない、というのが君の質問への答えだ。だが、彼が一個人として勇敢で、どうなろうと最後まで愛の教えを広めるという手本を示したかったので、それを続けることにしたのだ。

すでに言ったが、イエスの功績は十字架にかかって死んだことではなく、神の使者としての任務を果たした果敢さにあるのだ。そうすることで、最終的に殉教か処刑となって甚大な苦痛を被ることを知っていたにもかかわらず、あえてその代償を引き受けたのだ。

*** イエスが僕たちの罪をあがなうために来たのではなかったのなら、彼は旧約聖書が予言する救済者なのですか、それともそうではないのでしょうか？**

イエスは確かに旧約聖書が予告した使者だが、カトリック教会が信じさせた目的やイスラエルの民が期待した目的のために来たかどうかはそれと別問題である。

イスラエルは、彼らを外国の支配から解放して征服者の国に変えてくれる、ダビデ王のような政治的な君主を期待していた。だがイエスはそのために来たのではなかった。彼の使命は全人類に及ぶもので、物的な統治者としてではなく、霊的世界の真相を伝える神の使者としてやって来たのだ。

間違った馬鹿げたお門違いの信仰の中で道を見失って混乱している人類を、暗闇から助け出すために来たのである。イエスは、神や人間の進化について混迷を極めて完全にエゴに囚われてしまっている人類に、本物の霊性進化の道を示すためにやって来たのだ。

*** 歴史に残る偉大な預言者やアヴァター（神の化身）の中には——モーゼやクリシュナや仏陀のことを考えているのですが——イエスの前世であった人もいるのでしょうか？**

君が名を挙げた人たちは確かに皆イエスと同じ使命を担って霊界から遣わされた神の使者だったが、誰もイエス自身ではない。彼らは皆同じ大義のために仕えたわけで、彼らが生まれ出た社会のメンタリティーの許容度においてだが、仕事もそこそ実を結んだのだ。

*** イエスと仏陀はこの地球にいたことのある最も進化した存在だと言えるのでしょうか？**

君たちが知っている者たちの中では、そう言える。

*** でもユダヤの民は、イエスがモーゼの律法に反する考えを持っているとして、彼を疎外したのではないですか？**

全員がそうしたわけではない。イエスを疎外したのは、ユダヤ教の僧職と彼らに影響された者たちだ。それにイエスの考えがモーゼの法に反していたからではなく、それがユダヤ聖職者たちが人民に定めた法律にそぐわなかったので、モーゼのせいにしたのだ。イエスはモーゼの律法を覆しに来たのではなく、捏造や改ざんされた箇所から虚偽を振り払い、元来授けられた姿で再提示をして、それを遵守するために来たのである。

*** 十戒のことを話されているのですか？**

十戒とは、温存することのできたほんの一握りのもののことなのだ。もっともその中には初期の意味合いが変えられて、歪められてしまったものもある。だがこのことに関してはもう充分話したから、ここで繰り返すのはやめとしよう。

真にモーゼの手になるものは短く簡潔であったが、靈的な観点からは真実であった。モーゼの五書は彼のものだとされているが、彼の死後かなり経ってから書かれたもので、思いあがった作り話やユダヤ民族の支配者たちが命じたいまわしい逸話に満ちていて、彼とは無関係だ。だが、有無を言わずにそれらを正当化するために、神やモーゼのものとしたのだ。

*** イエスのことに戻るのですが、イエスが最後に地上に転生していたのは二千年前なのでしょうか、それとも僕たちが彼だと気づかなくても、その後で再びやって来ていたことがあったのでしょうか？**

最後に転生したのは二千年前にイエスとしてであって、それ以後は地球で生まれ変わるためには戻ってきていない。

*** イエスは現在すでに地上に転生していますか？**

いや、まだだ。でも、あともう少しだ。

*** 生まれ変わろうという決断やそれをいつにするかは、イエスが決めるのですか？ それともイエスの上位にいる存在が決めるのでしょうか？**

地球の進化に求められていることとメッセージが最も浸透し得る最善の時期を把握した上で、彼自身がその自由意志で決めるのだ。

*** イエスの転生まで、あと正確にどのくらいかかりますか？**

その質問には答えられない。でも、そう遠くない未来に生まれ変わるであろう。それは物事がどのように進展していくかによるのだ。だが、この世代はまだ無理だ。とはいえ、その下準備をする者たちが、しばらく前から転生して来ているがね。

*** 「その下準備をする者たち」とはどういう意味ですか？**

靈的な任務というものは、個人的な孤独な仕事ではないということだ。行き当たりばったりに進めるものでもなく、それが実行に移されるかなり前から、真剣かつ詳細に計画されるものなのだ。それは人類の靈的進化を目的にした集団的な救援であり、イエスほどの進化を遂げてはいないが大勢の魂が参加する。主役となる使者が活躍する前、最中、またそ

の後に、ある者は霊的な次元から援助し、ある者は物理的次元から助けるのだ。

*** どういう準備をするのですか？**

アヴァターが転生する際にメッセージがより広く行き渡るように、霊的な教えを少しずつ知らしめて人びとに受け容れられやすくするのだ。

*** 進化した存在たちが増えるためには、地球はどのような環境にあるべきなのでしょう？**

先にも言った通り、霊的な支援のミッションというものは今回が初めてのことでなく、過去の時代に行われた仕事と関連している。同じ目的を持った同じ魂たちが、さまざまな時代に生まれ変わっているのだ。進化が遅れている者は、愛に関する基本的な知識を学ぼうと努め、より高次の者には、自分の愛の能力を発展させる責務と手本となって遅れた者たちに愛について教えていく責任がある。

教師的役割を果たす魂たちが進歩するにつれて、彼らの任務はより奥深いものとなる。それに伴い、遅れている魂たちも進化していくので、霊的な教えをより深く理解して実行しようとする魂の数も増え、彼らも教えの伝達者となっていく。

このような霊的な改革の波ごとに、より多くの魂が次々に進化を目指す仲間入りをし、進んだ魂の数もだんだんと多くなっていく。それゆえ、進化した魂がより多く生まれ出ていることは、人類の精神レベルが高まっていることを反映している。

*** 今のあなたの「進化した魂がより多く生まれ出ている」という言葉で、イエスが言ったとされている福音書の「私よりも、もっと大きな業を行うようになる」という一節を思い出しました。でもあれから二千年も経ったのに、イエス以上のことを成し遂げられた者がいないという点については同意されますよね。イエスは間違えてそんなことを言ってしまったのでしょうか、それともこの部分も歪曲されてしまっているのでしょうか？**

ここでイエスが言及していることは、以前すでに話したことだ。人間というものは、十分に進化しさえすれば、この地球に生きていたイエスと同レベルに到達することができる。さらに、魂の進化は留まるところを知らないのだから、彼よりも高次の段階に達することもできる。そうなれば、イエスが地上にいた時と同様かそれ以上の能力を持つことが可能になるという意味なのだ。

君たちの惑星でいまだに彼ほど大きな愛の能力を発揮できた者がいないのは、地球の最も進んだ者でさえそのレベルに辿り着けるほどの時が経っていないということだ。君たちには長い年月に思えるかもしれないが、靈的な視点からの二千年はほんのひと時に過ぎない。したがって、イエスは間違っただけでそう発言したのではないし、それは歪曲されてもいない。ただ、まだそれが実現する時期になっていないということだ。

*** 多くの人が自分が靈的に進化していると思っていて、神の使者であると言っていますが、どうなのでしょう？**

ほとんどの者がそうではない。注目を浴びたいあまり有名になりたいという願望を述べているに過ぎず、真実ではない。

高次の存在は、その愛する能力と謙虚さや他者の考えや信念をどれだけ尊重できるかで見分けることができる。

神の使者を名をのる大半の者が自慢をして、その状況を名ばかりの優越性で人を圧倒して利益を得ることに利用する。人よりもすごいのだと自慢して優位に立とうとする者は謙虚さに欠けており、自由意志を尊重することができない。それを見れば、彼らが口ほどでもない者であることがわかる。

*** イエスが新たに転生するかについて話していたので、彼の再来を予告しているらしい黙示録のことを思い出しましたが、その見解は正しいのですね。**

ああ、そういうことだよ。

*** でも黙示録では、地球の未来におけるさまざまな事象についても予告をしていますが、その多くが破局的なものです。そのような予言は的を得ているのでしょうか？ この件について、少し説明していただけませんか？**

前にも言ったと思うが、黙示録というものは、起こり得る地球の未来のヨハネによるビジョンの一つに過ぎない。ヨハネはの中で、地球で起こる可能性のある一連の事象——あるものは人間によって引き起こされ、他のものは自然の地質的变化の結果であった——と、その時期に人類が経験する事件や変革を見ることができたのだ。そして、彼はそれらを自分の能力の範囲内で、その時代の人たちに伝えようとした。

全部の事象を一遍に伝えているので、すべてがあつという間に起こるという印象を与えるが、実際にはこれらの物事は千年単位の長い期間に及んでおり、最終的には人類の靈的な進歩が起こるのである。

その時に、人間は、自分たちがどこから来てどこに向かうのかをはっきり知ることができ、人類よりも高次の存在がいるということを発見するだろう。神を筆頭に（ロゴス）キリスト、イエス、それに君たちの見知らぬ存在や名のない者たちが、人間を愛し、その霊的な成長と幸福とを見守ってくれていることに気づくことになる。

*** 黙示録ではキリストの再来を告げると共に、反キリストの王国のことも言及していますが、反キリストはいるのでしょうか？ これから生まれ変わるのでしょうか？ それはいつでしょう？**

悪において全能な者などは存在しないと話したと思うが、害を及ぼそうという明確な目的意識で生まれてくる魂などもいやしない。悪いことをしてしまうことになっても、霊的なミッションのようにそれを目的にしているわけではない。どんな魂であろうとも、あらかじめ悪い意図を持って転生することなどないのだ。そうではなく、霊的に進化していないがために、生まれ出ると自分のエゴの衝動につき動かされて、悪に傾倒してしまうことになる。

したがって、君たちが、反キリストという存在が極悪で、世を破壊してキリストやその支持者をやっつけることを目標にして生まれてくると思っているのだとしたら、そんな者は存在しないと言っておこう。

*** 反キリストが存在しないのだとしたら、黙示録ではどういう意味でこの言葉を使っているのですか？ それとも、これも文書が改ざんされたせいなのでしょうか？**

ヨハネには、未来で起こる物事が、愛に反する利己的な価値観に支配された人類の巨大なエゴのせいに見えたということだ。またメッセージの一部は、後世に簡単に改変されないように隠語で伝えられている。

こう考えれば、反キリストという者は、未進化の人間の利己的で野心的かつ無慈悲な面を表した象徴的な存在ということになり、そのために兄弟たちに多大な害を与えてしまうのである。つまりそれは、エゴが人格化したものなのだ。

また反キリストの王国というのは、エゴに支配された世界を表している。我々がキリストの教えを無条件の愛だと受け取るのであれば、反キリストとはキリストと反対のことをする者であり、愛と真逆の者のことなのだ。

***では、皇帝ネロやナポレオンやヒトラーなど人類に大きな痛手を与えた人物たちは、反キリストだったのですか、それともそうではないのですか？**

反キリストというレッテルを貼られたこれらの人物は、たいそう利己的な者たちで、野心や権力への野望につき動かされて、人類に多大な被害を及ぼした。だが彼らのような者は、歴史上には幾らでもいた。現在でも存在しているし、エゴが世の中で幅を利かせている限り、これからも存在し続けよう。世間の目にもっと重々しく怖く映るかもしれないだけで、彼らをどのような名で呼ぼうと、今より善くなるわけでも悪くなるわけでもない。

***黙示録に出てくる世の終わりというくだりは、2012年に人類の大惨事が起こるとしているマヤの予言を彷彿させるのですが。**

君は、西洋人がマヤの記録にそう書いてあると思いたい、と言いたいのだろうね。なぜなら、マヤ族の子孫にそのことを訊いてみるなら、そんなことはない、と答えるだろうよ。

***でも2012年には、人類を滅ぼすことになる天変地異とか第三次世界大戦の開始とか、何らかの終末的な出来事が起こるのでしょうか？**

2012年には、そういったことは何も起こらない。自然災害は、今までと同じような頻度であり続けるだろうが、そのどれも、地球環境を破壊させるほど甚大なものではない。君たちは自然災害のことをすごく心配しているが、それらは君らには防ぎようがないだろう。それなのに回避可能な、人間の仕業である戦争や残虐行為などの事象については、ほとんど気にかけることがない。

残念ながら君たちの世界で頻発している紛争は、現在とほぼ同じような傾向で継続するだろうし、愛についての意識が変わらない限り、この状況は続く。だが今のところは、地球や人類を破壊するようなことは何も起きない。

思い起こしてみれば20世紀の終わりにも、ノストラダムスの大予言に基づく似たような強迫観念があって、世紀末から21世紀にかけていろいろな大惨事が起きると予告されていた。だが、2001年になっても、何も起きなかった。些細なことをおおげざにしたのは、多くの人びとの狂信や妄想や無知である。このようなお粗末な占いを信じてしまう人たちは、

靈的進化という真に大切なことに集中できなくなり、恐怖や幻覚の狂気に囚われてしまう。

先にも言ったが、近く到来する変化の根本的なものは靈的なもので、これは特定の年や日付に限定されるものではなく、何百年にも及ぶ時代を包括するものなのだ。2012年にこの世が終わると思っている者たちは、大いに失望するであろう。

*** それから、世界のさまざまな場所で終末感が漂う超常現象が起こって——ルルドやファティマにおける出現のことです——大きな反響を呼びましたが、そこには真実の部分もあるのでしょうか？**

本当なのは、靈媒能力を持つ人と直接交信してメッセージを伝えようとする、靈的な存在がいるということだ。メッセージは個人的なものもあるし、全体に及ぶものこともある。

通常はそのような出現があっても、体験者に分別があり、その現象を言いふらせば精神異常者にされるのがおちだと知っているので、あまり大きな騒ぎになることがない。だがルルドとファティマのケースでは、それを見たのが子どもたちであり、彼らが目撃したことを自然体で話したために有名になったのだ。

*** ルルドとファティマの場合に出現したのはマリア様だったと言いますが、それは本当ですか？ どんなメッセージを伝えたのでしょうか？**

いや、現れたのは聖母マリアではない。もっともこれは、どちらでもいいことである。だが、女性の姿を借りて現れた高次の靈であったというのは確かである。

もっとも、マリアだと名のったわけではない。名のることは滅多にないし、名前を言ったとしたなら、それは総称なのだ。それが聖母マリアだということになったのは、子どもたちが教えられた信仰の人物と結びつけたからか、そのビジョンの後で、大人たちがそれをマリア様だと子どもたちに思い込ませてしまったからである。

もたらされるメッセージは一般的にとても明確で、人間が進化するためにこの世に存在していることや、エゴを解き放ち愛する能力を発展させねば進化ができないことなど、我々が話している内容に沿っている。また時には、個人や集団としての利己主義が将来全体的に引き起こすことになる、戦争などの未来の危険性についても警告する。

だがこのようなメッセージを受け取ると、教会がしゃしゃり出て来て、自分たちに都合がいいようにそれを歪曲したり、利益を損なわれないように知られたくないことを黙殺するのだ。

聖母マリアは特に利用価値がある。マリアとおぼしき人物が現れたのは、キリスト教へ改宗するように人類に呼びかけるためだと思わせて、さらに信者を増やそうとしたり、現状を保持しようとする。それに狂信と迷信が加わり、これらの場所は巡礼の中心地となる。こうして、信者の狂信と無知の犠牲の上に、莫大な儲けを得るのだ。

*** 教えてもらえらるとしたらですが、ファティマの第三の秘密とは何でしょう？**

霊的世界が秘密にしておきたいと思ったなら、世に伝えることなどなかった筈だ。霊的世界からのお告げに鍵をかけてしまっておくのは、それを公にすると明らかになってしまうことを怖れる人間のエゴ、特に世の中で物的な支配権を持つ者たちのエゴのせいだ。しかし、このことで頭を悩ますのはやめなさい。そこで告げられたことは、他の方法で、もう開示されているからだ。

おわりに

ある時イザヤと話していると、「今日は弟の君に見せたいものがあるので、身体から抜け出してもらいたい」と言われた。

そのとたんに僕は体外離脱をしていて、イザヤによく案内される例のたいそう美しい場所のガラスのピラミッドの一つに、超スピードで送り込まれていた。それから、円形の劇場のようなところに連れて行かれた。その真ん中には丸いステージがあって、周りを座席が取り囲んでいた。ステージの中央には台のようなものがあり、その上に磨きあげられた大きな透明な石が載っていたが、それは水晶のようだった。

「好きなところに座りなさい」とイザヤが言った。

後からは、僕のように付き添いのいる人たちが何人も入ってきて、座席を埋めていった。その人たちは僕と同じ人間で、付き人たちは、ローブをまとった姿とその輝くオーラから、ガイド役の霊たちと思われた。皆、僕のように座っていったが、ガイド役たちはイザヤと同じように中央に進み出て、石を載せた台の周りで、手をつないで円形を組んだ。そうするうちに室内の電気が暗くなっていて、ほぼ消えた状態になった。

見ていると、水晶のガラス面がだんだんと光り始め、突然、その光が射るように天井に撃ち上げられた。どういう仕組みだかわからないが、それによって中央の丸いステージの部分全体が明るく照らされ、光り輝く筒型となった。それから、その輝く筒はどんどんと大きくなっていて、皆をその内部に取り入れるように、室内の僕たちを包み込んだ。

「怖がる必要はない。何も危害は及ばない。これから見るものに注意を払いたまえ」という声が頭の中で聞こえた。光が徐々に弱まり、映像が見え始めた。それは立体映画と似ていたけれど、真に迫っていて、本当にその中にいるように思えるほど、すごくリアルだった。画像も完璧だったので、実際にその場所にいると断言できるほどだった。

画面に、多くの聴衆を前に演説をしている政治家らしき人たちが現れ、熱狂した群衆は拍手をしたり何やら叫んだりしていた。話している言葉はわからなかったが、考えていることは読むことができた。政治家たちは、別の存在たちから指示されていたのだ。姿は見ることはできなかつ

たが、彼らはダークな存在で、話している政治家たちに暗い波動を送っていた。戦争を始めるようにと、そそのかしていたのだ。

政治家たちが話をすると、それにつれてその暗い気の流れは、霧のように群衆へと広がって行って皆を染め、人びともこの薄暗い霧まみれになってしまった。怖れ、憎悪、狂信の大きな流動を感じ取り、僕は強い衝撃を受けた。

それからその映像は消え、今度は軍隊が行進している様子が見えた。次に、飛行機、戦車、戦艦、歩兵戦闘車、ミサイル発射機などがフル回転している画像が映り始め、機関銃を手にした兵隊が戦闘準備を始めていた。そのうち爆弾が投下されだし、落とされていく先々では、爆撃がすべてを破壊していく。

僕たちは、男の人も女の人も子どもも、多くの人びとが死んでいくさまを見せられた。中には、弾丸に蜂の巣のように射抜かれたしまった人も、爆弾で身体の一部が吹き飛ばされてしまった人も、焼け焦げになってしまった人もいた。また、兵士たちが女の人たちを力づくで平然とレイプし、その後で情け容赦なく殺していくのを見た。囚人たちは、殴られ、拷問されて殺されていった。町や村や畑は破壊尽くされ、至るところに死体という死体が散乱していた。

本当にその場で起きているみたいに思えたので、それは僕が生涯で経験した最も恐ろしい出来事だった。僕だけでなくその場の皆も、全員がショック状態だった。そのうち、飛行船に乗せられて急上昇したかのように、いつしか上方からすべてが崩壊していくのを眺めていた。

ミサイルが空から注ぎ、そのうちの一つが大きな街的中するのを見た。凄まじい轟きと共に、爆風の火玉が息を呑むような破壊力で燃え広がり、すべてを焼け尽くし、そこからもうもうと立ち上る埃は、巨大な雲となった。焼け野原と成り果てた領域の広さは測りかねたが、それは巨大だった。

しばらくすると、その爆発からかなり離れた地面の上に戻されて、そこから雲の形を見ることができた。広島や長崎の原子爆弾のきのこ雲と同じものだったが、もっと威力が強く破壊的な爆音に感じられた。そして、それと同様な原爆があちらこちらで炸裂するのが見えた。

それは、地獄のような光景だった。場所によっては、すべてがなぎ倒されてしまい、全く何も残っていなかった。何もかもが灰燼に帰ってしまったのだ。廃墟が残っているところもあったが、ずたずたになった遺体がそこら中に転がっていた。ボロをまとった憔悴しきった生存者たち

は、爆心地から逃げようとして、あてもなく彷徨っていた。映像はそこで終わった。

それから別の映像が始まると、地球のどこかで大地が揺れ出し、沢山の亀裂が走るのが見えた。相次ぐ大地震で、かろうじて残存していた物も崩壊してしまった。あちこちで火山が爆発し、どこかしこでも溶岩が、荒廃しきった地面をさらに焼き尽くしながら流れていった。また、言葉にできないほど大きな地響きも聞こえた。その大地は、陥没しつつあったのだ。

僕たちは同時に、さまざまな場所のビジョンを見せられたが、どこでも同じような天変地異が起きていた。沈没する陸地によって周囲の海の波はそそり立ち、巨大な津波と化した。津波がまだ沈んでいない大陸の沿岸に達すると、すべてのものが飲み込まれていったが、それは測り知れないほどの域にわたっていた。海にどっと流れ込む溶岩で莫大な水蒸気がたちこめ、空は瞬く間に厚い雲に覆われてしまった。そして、凄まじい嵐と暴風雨に襲われると、日の光は消え失せてしまった。

その後、僕たちは地表から少しずつ離れていき、宇宙から地球全体を眺めるに至った。暗澹たる光景だった。青い海も緑や褐色の大地も、白い雲さえもそこにはなかった。どんよりとした灰色の大気に覆われた球体で、大地さえも垣間見ることができなかった。僕たちの地球のそのような運命を見るのは、何と悲しかったことか！

ビジョンはそこで終わった。筒型のスクリーンは、再び部屋の中ほどまでに縮小して消えた。そして劇場の照明はまた明るくなったが、そこにいた僕たち観客は皆、ショックから抜け出せないままだった。

ガイド役の一人が部屋の中心へ歩み出て、ガラスの水晶を取り上げると、それを別のものに変えた。我に返る猶予も与えられないまま、前と同じように筒型のスクリーンが作動し出し、僕たちはまたもやその立体映像の中に取り込まれた。

ダークな存在にネガティブな波動を送られながら戦争を鼓舞する演説をしていた、以前と同じ政治家たちが現れた。だが彼らは、今度はそれをテレビ局から行っていた。テレビを通して、他の国々と戦争を始める決定を伝えていたのだ。でも、人びとの反応は前とは違っていた。集会

を行ってはいたが、今度は好戦的な政府を支持するためではなく、政府に対して抗議をするためだった。

大規模なデモが繰り広げられ、政府は軍や警察に命じて、市民を取り締まりデモを鎮圧しようと懸命だった。しかし、軍も警察も市民の弾圧に加担することを拒否し、抗議運動に加わった。躍進する市民革命に政府は転覆させられ、政治家たちは逮捕されて投獄された。戦争に突入しようとしていた国々では、どこでも同時に似たことが起きていた。

それから、かつての政治家たちとは全く異なる印象を与える人たちが登場した。彼らは、明るい波動を送る光の存在たちに付き添われており、市民にもその波動を伝えていた。謙虚さと冷静さが伝播し、平和と愛を伝える光の輪が波及していくのがわかった。新しい指導者たちは、暴力的な活動の一切を禁じ、人類が新たに進むべき道を決めるために一種の国際議会を設立した。

次のビジョンでは、戦闘用の機械がすべて解体されて溶かされて、軍も解隊されると、世界を大戦の淵に追い込もうとしていた者たちが裁判にかけられた。そして僕は、この英断の後で——それがどのくらい後のことなのかはわからなかったが——地球に起きた変化を観てみることにすると、テレパシーで告げられた。

何もかもが良い方向に変わっていた。市民の日常生活からは、戦争も紛争も、貧困や階級の差もなくなっていた。人びとは調和を保ちながら暮らし、幸せ一杯の顔をしていた。そこで映像は、先程と同じく宇宙から眺めた地球の姿を映し出すと、終了した。

初めのものとは、なんと対照的な眺めだったことか！ 前とくらべて、地球がどれほど美しく見えたことか！

筒型のスクリーンは、再び部屋のステージの大きさに縮まり、そして止まった。

僕は感動のあまり感極まっていた。周りの人びとも僕と同じほど衝撃を受けているのがわかった。短い時間に、あまりにも多くの強い両極端な感情を経験したからだだった。

円を組んでいたガイド役たちは、輪を解くと守護している人たちの元へ戻って行って、この強烈な体験から立ち直れるようにとエネルギーを流してあげていた。それから、皆すぐにそこからいなくなってしまった。

「君も戻る時間だ」と、イザヤの声がした。

そして強くグイッと引かれたかと思うと、ドンと身体の中に放りこまれていた。けれど、すぐには目を覚まさないで、硬直した状態のまま寝ていた。

「目が覚める前に、少し話をしよう。君が覚えていやすいように、このままでいい」

「あの人たちはどういう人たちなのですか？」と僕は質問した。

「君と同じような人で、この世に転生している魂たちだよ。そしてその付き人たちは、彼らを助けている霊界の兄弟たちだ」イザヤが答えた。

「皆、とても衝撃を受けていました」

「そう、君もだ。この世の者にとってはインパクトが強過ぎるので、多くの者がこの経験を覚えていられないかもしれない。だが、潜在意識ではちゃんと覚えていてくれて、考慮に入れてくれるのだ」

「僕たちが見たのは何なのですか？」と、訊いてみた。

「僕たちが見たのは、君らの世界の二つの異なる未来の可能性だ。最初のものは、人類がエゴに翻弄された場合の未来の可能性だ。そして二つ目のものは、愛を選んだ場合に待ち受ける未来だ」

「それなら、まだこのどちらも実際に起こってはいないし、起こる必要もないのですね？ 最初の未来の可能性になってほしくないの、訊くのですが」

「その通り。まだ、このようなことは何も起きていない」

「僕たちが見た二つの未来の他に、もっと別な可能性もあるのでしょうか？」

「そうだ。僕たちが見たものは、ポジティブなものとネガティブなもの、その中間の状況も存在し得る。だがどの状況も最終的には、このどちらかの可能性に辿り着く。もちろん、一夜にして実現す

ることではないのだが、長い目で——一つの転生以上のスパンにわたって——未来図を把握しておくことが好ましい」

「では、どういう人たちがこのような未来の可能性を見ているのでしょうか？」

「靈的に成長したいと願っている人たちだ。今日集められた君たちと同じように、転生している多くの者が夜寝ている間に守護靈に連れて行かれて、未来についてのこのような映像を見せられているのだ」

「どういう目的ですか？」

「自分たちの行為が全世界に及ぼす結果に気づくことができるように、君たちの内面を整えるためだ。そうして君たちが原因を知ることができれば、エゴの側か、それとも愛の側か、どちらにつきたいのかを決めることができるだろう」

「最初の可能性を体験したい人はいないと思いますよ」

「もちろんだ、誰も苦しみたくはない。利己的に振舞う者たちはいつだって、絶対に自分たちの行いの結果で苦しむことにはならないと思っている。我々が君たちに理解してほしいと思っていることは、すべてが繋がっているということで、君たちが他の人にすることは、遅かれ早かれ、いずれ君たち皆に跳ね返ってくる、ということなのだ」

「でも、なぜこの未来図なのでしょう？ とても憂慮すべきものです」

「それは、君たちの惑星の一部の極度に利己的で破壊的な力のある者たちが、人類全体の生存を脅かすようになっているからだ。君たちは彼らの破壊に手を貸すのかね？ それともその反対に、それを阻止するために尽くすのかね？ それはすべて、君たち次第なのだよ。君たちの自由意志によるのだ。今生か、あるいは今後の転生で、君たちはどちらの側につくのかを選ぶことになる。地球の運命は、君たちが握っているのだ」

「僕たちが地球の命運を握っているだなんて、あんまりです。責任が重過ぎます！ 誰だって、勘弁願いたいです」

「地球の将来というものは、一人の人間にかかっているのではなく、何百万という人によるのだ。各人が少しずつ、愛あるいはエゴに基づく行動で参加することで、世界は多少良くなったり悪くなったりするのだ。もっとも、善または悪を成す能力と意志の力に応じて、他の人よりも大きな（あるいは小さな）害を及ぼしたり、多くの（あるいは少ない）愛を与える人はいる。

これは、綱引きでの力くらべに似ており、二つのチームがそれぞれの綱のはしを持ち、真ん中に結びつけたハンカチを自分たちの方に引き込もうとしているようなものだ。君たちが選ばなくてはならないのは、どちらのはしを引きたいのかを決めるということだ。エゴの側か、愛の側か。この場合では綱引きのハンカチが、君たちの世界の未来に匹敵する。愛のチームに加わる選手が増えれば増えるほど、地球の未来が愛に変わる可能性が増すのだ」

「で、勝負は今のところ、どうなっていますか？」

「上手くいっていると答えたら、君は安心してしまっただろうし、不利な形勢だと言えば、がっかりしてしまっただろう。君はどんな調子だと思うのかね？」

「やっぱり！ 教えてもらえないだろうと思っていました。僕は、今のところはまだエゴが優勢だと思うのですが、人びとは現状では物事が上手くいっていないことに気づき始めていて、チームを乗り換え始めています。つまり、以前はエゴの側を引っ張っていた人たちが、今は変わって愛の側を引くようになっていると思います」

「そう、それに片方のはしを少し引っ張ってみたかと思うと、次は別のはしを引いてみると、自分の都合に合わせてやっている人もいるね、はっはっは」

「これは、冗談にして笑えるようなことではないと思いますよ」

「冗談にしているのではなく、ただ君の緊張を解いてあげようと思ったのだ。今日体験したことで、身がすくむほどの衝撃を君が受けたように感じ取れるからね。だが、心配することはない。さあ、そろそろ、別れの挨拶をせねばならない」

「もう行ってしまわれるのですか？」

「もう家に戻らねばならない。君とここにいるのもいいが、あちらは
ずっと居心地がいい。でも、またすぐに会えるから、心配には及ばない。
弟の君に愛を送ろう！ 家族の皆にも、よろしく伝えてくれたまえ。も
うわかっていると思うが、全人類という我らが愛する家族のことだ」

完

著者のあとがき

見返りを求めないという無条件の愛の趣旨にふさわしく、この本がすべての人に無私の志で届いてくれることを切に願う。

そのため、内容を変更せずに営利を目的としないのであれば、本書を自由に取り扱ってくれてよい。すべてのメディアでの全体あるいは一部の複製をこの場で許可し、その活動を後押しするものとする。

皆の協力によって、輪が広がっていくことが僕の願いだ。霊性や愛のテーマに関しての質問があれば、それが個人的なものでも一般的なものでも気兼ねなく訊いてもらえれば嬉しいし、可能な限り返事をしたい。

一般の関心事で役に立ちそうな貴重なものは、共有していくつもりだ。本書『愛の法則』は『魂の法則』の第2編に当たるが、前作の読者から寄せられた質問も取り入れてある。

また、できるだけ多くの人びとにメッセージが行き渡るように、本書を他の言語に訳してくれる、私心なき人たちの協力もお願いしたい。

話を直接聞きたい人の数がある程度まとまって、君の町や村に僕たちに行ってほしい場合は、遠慮なくそう教えてほしい。君の町や村が、他の国や別の大陸にあっても構わない。僕たちのできる範囲で、要望に答えたい。

講演会での依頼者側の費用負担は心配ない。完全に無私無益の活動なので、旅費や宿泊費も僕たちが持つ。誰でも興味のある人が、自由に無料で参加できることが条件だ。

君に、僕の愛のすべてをこめて。いずれどこかで会えるときまで。

連絡先： ヴィセント ギリエム・プリモ Vicent Guillem Primo

ウェブページ：<http://lasleyespirituales.blogspot.com>

日本語サイト：<http://tamashiinohousoku.blogspot.com.es>

このサイトでは、電子書籍の形態で無料で本をダウンロードしたり、印刷版を要請したり、講演会の日程を調べることが可能だ。



著者、ヴィセント・ギリェムは、スペイン、バレンシア大学で化学博士号を取得後、がん遺伝子の特定に関する研究をしている。週末は全国講演を行うなど、無私無欲に活動している。本書「愛の法則」は、「魂の法則」の後編にあたる。

これは、皆さんに贈る愛のメッセージだ。

本書が、自分の感情についての理解を深める一助となることを願う。

そうして、真実の愛の感情と偽物の愛の感情とを見分けることができるようになってほしい。真実の愛の感情だけを育て、愛を装うエゴ的な感情を排除していく役に立てればと思う。なぜなら、それが唯一、幸せになれる方法だからだ。

愛することへの怖れを手放し、心で感じる通りの人生を生きてほしい。僕たち一人ひとりが、誰にも侵害されることのない、自由に愛することができる権利を持っているということが、この本を読み終わった後で、はっきりと理解してもらえればとても嬉しく思う。

すべての愛をこめて。

ヴィセント・ギリェム



「愛の法則」 by [Vicent Guillem](#) is licensed under a [Creative Commons Reconocimiento-No Comercial-Sin Obra Derivada 3.0 Unported License](#).
Creado a partir de la obra en <http://lasleyesespirituales.blogspot.com/es/>.